ISSN 2434-513X

東アジア日本学研究

第７号

Japanese Studies in East Asia

No.7

東アジア日本学研究学会

The Society of Japanese Studies in East Asia

2022 年 3 月 20 日発行

巻 頭 言

学会誌第7号を今回も予定通り出版することができました。執筆者、編集委員、そして査読者の皆さま方に感謝とお礼を申し上げます。

新型コロナウイルスをめぐる世界的騒動が始まってすでに 2 年が経過しました。いまだに収束の気配を見せません。それどころか、感染力の強い変異株オミクロンの出現によって、1 日の感染者数の新記録が続出しているという状況です。一時は収束に向かうかに見えた日本でも、年が明けるや感染爆発が始まり、いまでは感染者数の新記録を日々塗り替えるという状況です。

ところが、そのような事態のなか、一見奇妙な動きが始まりました。現に膨大な数の感染者が出ている状況で、感染防止規制の緩和政策が見られるようになり、条件付きではあるが門戸開放に踏み切る国も出ていることです。それは欧米諸国で始まり、日本政府もそれに倣ってか、一定の重点措置はとるものの、より強力な緊急事態宣言を発出しようとはしません。

ワクチンが行き届いてきたから、オミクロン株は重症化率が低いから、そして経済を止めることはできないから、というようなことのようです。重症化が低いオミクロン株の感染を拡大することによって集団免疫を獲得しようという政府や専門家の隠れた思惑があるのかもしれません。

本当に収束に向かう兆候が出てきたのであれば喜ばしいことですし、明るい希望です。しかしそうではなく、社会復興のためには一定の人命の犠牲はやむを得ないという方向に世界が歩調を合わせて舵を切ったということであれば、ここにきて人命が軽く扱われるようになった感があり気になるところです。

ところで、この第 7 号に掲載された論稿は、寄稿論文 2 本、論文 10 本、そして研究ノート 1 本という内容になっています。研究活動が著しく制限され、加えて、オンライン授業やネット会議などによって新たな負担が強いられるなか、これだけの論考を掲載できたことは有難いことです。本学会のさらなる発展のために、引き続き、会員諸氏の奮闘努力に期待するところです。

新型コロナウイルスをめぐる騒動がここまで長引けば、収束した後も完全に元に戻ることはなく、人々の社会活動や人間関係、あるいは言語活動に一定の変更が生じるのではないでしょうか。ではどのような変更が生じるのか。それを探るべく、私たちは研究者としてこれからの社会の動向を注意深く見ていく必要があるのではないでしょうか。会員それぞれがしっかり目を光らせて社会の動向を注視し、それぞれが手に入れた情報を持ち寄って議論を重ねることを通して、きたるべき新たな社会をより良くするための方策を見出すことができるように頑張りましょう。

東アジア日本学研究学会
会長　安達義弘

目 次

巻頭言　安達義弘（東アジア日本学研究学会会長） …… 1

【寄稿論文】

徐東周　近代日本における「人口」の思想と日本主義
—古屋芳雄の民族科学を中心に— …… 5

鄭亨奎　中国改革開放期における日本語教育と日本の支援事業 ……19

【論文】

飯嶋美知子　『特定技能 1 号 外食業技能測定試験 学習用テキスト【接客全般】』の分析
—漢字・語彙の日本語レベルを中心に— …… 33

杉村泰　日本語の「〔乗り物〕で」と「〔乗り物〕に乗って」の選択について …… 43

橋本恵子　為政者の歴史的演説に対する印象評価の変容と日本語能力に関する一考察
—中国人大学生を対象に— …… 51

胡蘇紅　応答文における「けど」の言いさし表現の談話機能
—「のだ」との連接を中心に— …… 61

朴天弘・宋天鴻　類似性に関わる判断形式
—日本語の「ヨウダ」と中国語の“好像”を中心に— …… 71

連菁　句を包摂する接辞性字音形態素「系」について …… 81

滕夢瀲・張一弛　日本昭和期のファルス研究
—坂口安吾「風博士」、三島由紀夫「卵」を中心に— …… 91

崔雪梅　漱石の「非人情」と漢文学 …… 101

村下慣一　N・エリアスに基づく「日本－西欧」の比較研究に向けた予備的考察
—R・ガルシア『日本武道の歴史社会学』を手がかりとして— …… 111

金珽実　満洲に設立された鉄嶺日語学堂について …… 119

【研究ノート】

王思瑶　セルフメディアから見る日中の民間交流 —竹内亮監督の『走近大凉山
（中国最貧困大凉山地区ドキュメンタリー）』を例として— …… 129

学会役員 …… 137

学会動向　李東哲（東アジア日本学研究学会副会長） …… 138

会員消息　李東哲（東アジア日本学研究学会副会長） …… 139

東アジア日本学研究学会会則 …… 140
『東アジア日本学研究』投稿要領 …… 143
『東アジア日本学研究』執筆要領 …… 145
『東アジア日本学研究』査読要領 …… 146
編集後記 …… 148

近代日本における「人口」の思想と日本主義
—古谷芳雄の民族科学を中心に —

徐 東周（ソウル大学）

要旨

総力戦時期における「人口政策」の樹立過程で古屋芳雄という人物の存在は無視できない。 古屋は 1930 年代半ばまで大学で「民族衛生学」を教える学者であった。 しかし 1939 年、厚生省に「勅任技師 」として入省し、体力局と衛生局、そして予防局の技師を兼任しながら、戦時の人口政策の樹立に携わっていた。彼は優生論者たちの「代弁者」という役割を越え、戦時期の人口政策に自分の優生学理論を適用しようとした「実行家」に近かった。したがって、古屋義雄という衛生学者が近代日本の優生学史に残した活動の全体像を把握するためには、総力戦時期の人口政策の樹立過程で果たした彼の役割だけでなく、自ら作り上げた「民族生物学」の論理構造はもちろん、ひいては戦争状況により変化していった彼の優生学理論の内容まで視野に入れなければならない。とりわけ、古屋の「民族生物学」は、天皇主義の圧力の前で実証科学の姿を失ってしまった。彼は進化論のロジックを借りて、現在存在するということは「淘汰」の圧力を勝ち抜いたことを表わす印であると考えた。それによると、「皇室の存在自体」がその重要性を立証する科学的根拠である。嘗て文化史的民族理解を「民族科学」の領域へ移行させた古屋は、戦時期に至ると「皇道主義」をいかなる実証もなく正当化する「非科学」の態度を表している。

キーワード：古谷芳雄、民族生物学、日本主義、総力戦、人口政策

はじめに

1940 年、日本政府は戦時の「人口管理」のために「国民優生法」を制定した。名称からも分かるように、「国民優生法」はいわゆる「優生学」の主張を法という形式で表現したものである。よく知られているように近代日本の優生論者たちは、人口における「悪質な素質を有する者」の数を抑えるために、継続的に「断種法」の実施を主張してきた。 そしていわゆる「健全な素質を持つ者」の数を増やすために「健全な素質を持つ者」間の結婚、いわゆる優生結婚を勧めてきた。[1)]

総力戦時期における日本の人口政策と優生学の関係を考える際、1938 年 1 月厚生省が設置されたことは重要な意味を持つ。 というのは、新設された厚生省には優生学を支持する多くの官僚や優生学者が「動員」されたからである。 彼らは主に厚生省傘下の「予防局」の中に設置された「優生課」に配

属された。 優生課科は多くの優生学者を「動員」し、優生政策樹立のための調査研究を実施するのみならず、当時は「民族衛生」と呼ばれた優生学の大衆啓蒙にも力を注いだ。[2)]　優生学者の国策動員は、1940 年 7 月第 2 次近衛内閣の発足をきっかけに一層活発に行われた。当時、近衛内閣は総力戦体制の新しい理念として「高度国防国家」を掲げ、また「人口政策」をその実現のために必要な「基本政策」の一つと見なした。「国民優生法」（1940 年公布、1941 年施行）と「人口政策確立要綱」（1941 年 1 月閣議決定で成立）は、このような状況が生み出した法的措置であった。

総力戦時期における「人口政策」の樹立過程で古屋芳雄（1890-1974）という人物の存在は無視できない。 古屋は 1930 年代半ばまで大学で「民族衛生学」を教える学者であった。 しかし 1939 年 5 月、厚生省に「勅任 技師 」として入省し、体力局と衛生局、そして予防局の技師を兼任した。古屋は厚生省の技師として予防局が進めていた「断種法」（後に国民優生法として成立）の作成だけでなく、「人口政策確立要綱」にも深く関与した。[3)]

彼は優生論者たちの「代弁者」という役割を越え、戦時期の人口政策に自分の優生学理論を適用しようとした「実行家」に近かった。したがって、古屋義雄という衛生学者が近代日本の優生学史に残した活動の全体像を把握するためには、総力戦時期の人口政策の樹立過程で果たした彼の役割だけでなく、自らが「民族のための新しい科学」と呼んだ「民族生物学」の論理構造はもちろん、ひいては戦争状況により変化していった彼の優生学理論の内容まで視野に入れなければならない。 本稿では、このような問題意識の上で「生物学（遺伝学）」の知識と「民族問題」への深い関心のもとで構築された古屋の優生学的「人口論」を分析し、彼が近代日本の優生学史に残した思想的痕跡を批判的に批評することを目的とする。

Ⅰ.「生命の芸術」から「民族の生命」へ

古屋芳雄は 1890 年大分県で生まれた。1916 年、東京帝国大学医科大学を卒業し、大学院に進学してからは東京帝国大学衛生学教室に籍を置いた。1925 年に千葉医科大学に赴任し、1927 年から 2 年間、ドイツのカイザーヴィルヘルム大学に留学した。帰国後、1932 年から金沢大学医学部の教授職に就くと衛生学を担当した。1930 年「日本民族衛生学会」の結成時、当代の最も著名な優生学者であった永井潜と共に「本部常任理事」として名を上げた。それだけでなく、1939 年厚生省に入り、自ら人口政策の樹立と実行に関与すると同時に優生学、すなわち民族衛生学の専門家として精力的な執筆活動を行った。古屋は総力戦体制の中で優生学者として厚生省に参加した一種の「革新官僚」であった。

こうして見ると、古屋の人生は、東京帝国大学に入学して以来、衛生学者になるための順調な道のりを歩んできたように見える 。しかし、興味深いのは、古屋が医学者としての履歴を積み重ねていく一方で、「芸術上の天才」を夢見る「芸術家」でもあったという点である。例えば、彼は 1917 年、ベルギーの詩人エミール・ベルハーレン（Émile　Verhaeren）の「生命」が芸術を通じて「永劫」の「人類」を表現しているという内容の記事を翻訳し、雑誌『白樺』に掲載した。[4)] 衛生学者としてのアイデンティティを確立する前、古屋は大正時代の芸術運動を代表する「白樺派」の同人として活躍しただけでなく、1917 年には自ら『白樺』の姉妹紙である『生命の川』を創刊し、そこに戯曲や小説など

を発表した。古屋は雑誌『生命の川』の特徴を「命をめぐる宗教的、芸術的な色彩が著しい」もの[5]と規定したが、これは「白樺派」を代表する柳宗悦が「生命の問題」(1913)という文書で書いた、「すべての芸術は、学説で出ず、それは、生命の直観から出発する。学説は決して生きている生命を産むことができない」[6]と言ったことと相通じることは言うまでもない。

では、大正時代の生命主義に深く関わっていた古屋は、いつごろから「科学的な衛生学者」へと変貌したのであろうか？その変貌は、1927年から始まったドイツでの留学生活の期間中に起こったと思われる。古屋は自分の人生を回顧した文章の中で、ドイツのカイザーヴィルヘルム大学で留学していた時期に経験した変化について次のように述べている。つまり、彼は文学と医学のどちらを選択するか悩みを抱えていたが、留学中トルストイの『戦争と平和』に接し、彼の偉大さに圧倒され、トルストイに比べると自分の持っている「芸術家」としての才能は取るに足らないと思うようになり、その後本格的に医学者の道に進むようになったと語っている。彼はその時のショックを「初めて目が開かれた」と記している。[7]

一方、大正時期における古屋芳雄の経歴の中で目を引く特徴の一つは、彼が当時の「アナーキズム」の思潮に接近していたという点である。これに関する手がかりは、1925年に古屋芳雄と早川孝之が出版した『天使の翼』(1925)という著書から見出すことができる。『天使の翼』は、エドワード・カーペンターの著書 Angels wings を日本語に翻訳したものである。エドワード・カーペンター(Edward Carpenter, 1844-1929)は英国の社会主義思想家および評論家であるが、彼の社会主義思想はウィリアム・モリスの影響を強く受けたものであり、今日の観点から見れば「アナーキズム」に近いものだった。彼は、ケンブリッジ大学を卒業後、聖職者として叙任されたが、1871年3月から5月まで組織された「パリコミューン」での経験を通して社会主義思想に傾倒していった。聖職者を辞職したのち、シェフィールド近郊の農地を購入し、自ら農場を運営しながら初期社会主義運動を繰り広げた。おそらくカーペンターに対する古屋の関心は、アナーキズムに対するものより「芸術は生命を表現する」という生命主義の影響によるものであったが、後に古屋が「農村」を日本民族の精神的基盤として強調したことを踏まえると、「自然」と「農村」に対するアナーキズムの認識に共感していた可能性を排除することはできない。

参考までに、古屋よりも先にエドワード・カーペンターの思想を日本に紹介した人物として、当時日本における著名なアナーキストであった石川三四郎(1876-1956)がいる。石川は1909年からカーペンターと書簡を交換し、1912年2月には『哲人カアペンター』を出版した。『哲人カアペンター』という著書は、石川がカーペンターの思想に深く共感していることを顕著に示しているが、この著書で石川はカーペンターが「クロポトキン、トルストイ、ウィリアムモリス、ウォルト･ホイットマンのように互いに離れている人たちを一つに合わせた」ような性格の人物だと評している。[8] このような交流と共感がきっかけとなり、石川は1913年から1920年まで海外で亡命生活を送った時期にカーペンターを直接訪問し、共に生活を送ったりもした。

ところが興味深いのは、石川三四郎が著書でエドワード・カーペンターという思想家を描きながら言及している人物たちが例外なく柳宗悦をはじめとする「白樺派」の同人たちが関心を向けた思想家

だという点である。このような事情を踏まえると、白樺派の一員だった古屋が1910年代には既にカーペンターの存在を認知していた可能性は十分に予想できる。言い換えれば、白樺派の一員として古屋は『天使の翼』を出版するよりも前に、白樺派の知識人たちの批判的思想に影響を与えたカーペンターのアナーキズムを自身の思想的源泉の一つとして受け入れていたと考えられる。

『天使の翼』に話を戻そう。この著書は翻訳書だが、大正時期における古屋の思想を把握するための手がかりとなりうる。この著書の序文は、共訳者の早川孝之が書いたものだが、早川は著書の前半部分を自身が翻訳し、古屋が後半部分の翻訳を担当したことに触れている。『天使の翼』の後半部分を構成する内容は、ベートヴェンに関する研究と付録のような形で載せられている「生命の芸術」という主題の評論である。「生命の芸術」の核心となる主張は、「生命は表現」であり、「それは内部から外部への動き」だという言葉に集約されている。カーペンターは、「人類史の一大頂点に到達した」人間は、「生存競争」が支配する社会において「物質の奴隷」となったが、今や生命の表現のために「物質を使用しなければならない」と主張する。「生命の芸術」の内容が注目に値する理由は、古屋が大正の思想空間を規定した、いわゆる「生命主義」に深く心酔していたことを物語っているからだ。

1930年代における古屋の履歴からは過去に白樺派の一員でありながら、「永劫の人類」と「芸術の生命」を論じた芸術家の跡を見つけることは容易くない。そういった意味で、このような断絶は著しく見える。しかし、だからといって、それが短期間に起きたことを意味するわけではない。少なくとも1930年代初頭における古屋の文章を見れば、「生命」と「永遠」に没頭していた大正時代の痕跡を確認することができる。例えば、1931年に出版された『優生学の原理と人類遺伝学』を見ると、個人は「民族としての生命」の中で「不死」の存在になるという表現が見られる。古屋は、民族衛生学者の立場から書いているものの、過去に持っていた生命に対する「浪漫主義」的な考え方を完全に払拭することはできなかった。後で述べるように、古屋が、このような生活に対する「浪漫主義」から脱したのは、1930年代後半のことであった。言い換えれば、戦争期の中で古屋は観念的な「普遍的生命」から抜け出し、遺伝を通じて永続される「民族の血液」へと「転向」を完了したといえよう。

Ⅱ．「民族生物学」からみた「民族」と「文化」

1930年代を通じて古屋芳雄は優生学者として活発な著述活動を展開した。1935年に出版された『民族問題をめぐりて』は、「日本民族のための科学」の確立という彼の構想が、初めて体系的なかたちで提示された著作である。続いて1938年11月に出版された『民族生物学』は、彼の求めた優生学の内容を集大成した著作として位置づけられる。では、古屋の言う「民族生物学」とは、どのような性格の学問なのか。彼はどのような根拠に基づいて、それを「国策の指導イデオロギー樹立」に貢献できる学問として規定していたのだろうか。

古屋の言う民族生物学はドイツ語の「Rassenbiologie」を翻訳したものである。彼は民族生物学を「民族素質が変化する過程を生物学的に観察する学問」、言い換えれば「民族の生物学的機構の変化過程を研究する学問」[9]として定義する。古屋によると、世界的に民族間の対立が激化した結果、

「国家の力量」を意味する「国勢」が再び注目を浴びるようになった。ただし、古屋は最近の国勢が軍事力と経済力だけではなく、「民族の生物学的勢力」までを含めたものとして捉えられるところにその特徴があると言う。古屋はこの方面ではナチス・ドイツが最も進んでいると言う。というのも、ナチス・ドイツは「国策の最高指導原則をドイツ人の民族衛生（ Rassenfplege ）」に置いているからである。そして、そのようなドイツと比較すると、日本は「国家総動員体制」を宣言したにもかかわらず、依然として「財力」と「兵力」だけを重視し、「生物学的勢力」への関心は表面的なものにとどまっていると批判する。したがって、彼は、このような限界を乗り越えるためには「民族科学」における最も最近の学問である「民族生物学」に立脚した指導原理の確立が求められると述べている。[10)]

民族生物学のこのような定義からわかるように、古屋は「民族」という言葉も民族生物学の中で新たに定義する必要があると考えた。彼は、今までの民族が主に「同じ国語を使用し、同じ風俗・習慣の中に住んでいる個人」の集合を意味したといい、それを民族の文化史的理解と規定する。これに対し、民族生物学における民族は、何よりも「血液中の近親者」を指すと言う。[11)] ここで古屋が「血液」という言葉を持ち出したのは、彼自身が人間の生命現象は、あらゆる生命体と同様に、遺伝の法則に従うと考えていたからである。古屋は、既存の民族概念、すなわち民族の文化史的理解は人間を生物の「種」として捉える視点を欠いているところに根本的な限界があると述べている。[12)]

このような古屋の民族認識に対して批判がなかったわけではない。たとえば、次のような批判の声があった。民族を文化史的観点ではなく、「種」の観点から見ることは、最終的に民族理解を「人種」に還元させることではないか？また文化史の意義が強い「民族」という言葉をあえて使う理由はどこにあるのだろうか？古屋は生物学や遺伝学の立場を堅持する場合、民族よりも「人種」という言葉を使用したほうが適切だという声が出てくることを認める。また、民族生物学が遺伝学の法則に従った民族形式の変化を研究する学問である限り、これを「人種生物学」に代えて称することも可能だと言う。しかし、「民族」の代わりに「人種」という言葉を使ってしまうと、民族生物学が生物学的、遺伝学的特徴だけに没頭する印象を与える可能性があるため、やはり「民族生物学」という名称を使うのが良いと結論づける。[13)] そして、このような考え方の延長線上で古屋は、ドイツ語の Rassenbiologie を「人種生物学」と翻訳する人もいるが、ドイツ人が Deutsche Rassen と言う時に、それが生物学的意味だけでなく、文化的な意味も含むものとして使用されているため、「民族の生物学的機構の変異過程を研究する学問」は「民族生物学」と呼ばざるを得ないと言う。[14)]

では、民族生物学で捉える民族と文化の関係は、民族の文化史的理解のそれとどのような点で区別されているのだろうか。例えば、古屋は、この問題については、次のように述べている。

> だが彼等はまたいふだらう。民族の生物学的資質の変化とは、ただ単に生物学の法則に依るものであって、何等我々の社会の文化形態や道徳思潮に影響されることは無い、だから文化学的観念を生物学に導入するのは 邪道であると。けれどもそれが大変な間違ひである。第一に民族の生物学的素質が、社会の文化形態によって変わらぬとするのが根本的な間違ひである、勿論個人の遺

伝質は、その者の一生涯の間では変わらない。けれども優良なる素質をもつ者の子孫がなくなり、劣悪なる者の子孫が多くなれば、民族の平均素質は下落して来るし、（人口の量的な-筆者）増殖率の差を起す原因は主として我等の社会に於ける道徳的、及び経済的事情に在るのである。だから民族素質の変化過程が、我々の属する社会の文化形態に依存することは非常なるものであって、それに気がつかぬやうでは、民族問題を論ずる資格は無いのである。[15)]

古屋は、個人の遺伝形質は一生変化しないが、個人の集合である民族の形質は、その中に「優れた素質」を持つ個人の数に応じて変化し、さらに、 社会の文化がこのような民族形質の変化に決定的な影響を与えると述べている。したがって、民族の生物学的理解は、文化を排除するどころか、文化が民族素質の遺伝に与える影響について再認識することを要求する。ここで古屋が使用する文化の意味は、文化史や文化学で話す言語や風俗などではなく、民族の生存に影響を与える包括的な意味での社会的・道徳的環境を指していることがわかる。古屋はこのように文化に対する再定義を行った上で、動物が「自然淘汰（選択）」を経て進化（変化）するのと同じように、民族も長い時間にわたる「文化的淘汰（選択）」を経て民族特有の素質を形成すると主張した。

古屋が民族生物学の必要性を力説した背景には、先に取り上げた民族間の対立が激化する国際情勢だけではなく、それ以上に日本民族の人口構成が質と量との両方で問題となっている状況があった。毎年日本の人口は増加しているが、出生率が持続的に低下する傾向に対して、古屋は懸念を表明している。彼は出生率低下の原因を次のように診断している。すなわち、日本は「明治維新以来、欧風文明によって啓発され、いわゆる長足の進歩を成し遂げ」たが、一方、その過程で「自由主義文化の甘い果実」にはまって「民族消耗症」の初期症状を呈し始めたのである。[16)] 彼は出生率の減少を「民族消耗症」への兆候として把握した。

ところが、古屋は出生率の減少という人口の「量的喪失」よりも、人口の「質的低下」がもっと深刻な問題だと考えた。彼は様々な人口統計を取り上げながら、現在の日本の「知識階級」あるいは大都市に居住する「上層の文化生活者」の間では「避妊の傾向」が急速に広がり、出生率が低くなっているのに対し、「無能力階級」あるいは「知能が普通以下のいわゆる低格階級」、あるいはいくつかの「変質者」の出生率は、少しも低下していないと言っている。そして、このような階級による出生率の差がもたらす結果は、「社会の上層階級の喪失と変質あるいは低格階級の増加による国民の平均素質の低下」、すなわち、いわゆる「逆沙汰」というものである。[17)]

さらに古屋は人口統計学上の破局的な状況である「逆沙汰 」の到来は、農村の比較的「優れた部分」が継続的に都市に流入される傾向によって加速していると指摘する。[18)] そして、このような「日本民族の素質の低下」を引き起こす究極の原因として「西欧の自由主義」が糾弾の対象となっている。結局、古屋は「 逆沙汰 」の状態のような「民族消耗症」が全面化される事態を防ぐためには、人口の生物学的変化に対する研究を通してそこに影響を与える社会的・文化的要因を分析し、人口を量と質

の両面で「改善」させる対案を提示できる「民族生物学」が一日も早く日本の人口政策の基盤学問になければならないと主張したのである。

Ⅲ．日本人の「性神形質」と「弘道主義」

古屋の人口思想は優生学の理念を忠実に従っている。特に人口の「質」と関連して優生学の方針を積極的に受け入れていた。彼は、劣悪者に対して断種を実施し、混血だけではなく、他民族の日本国内への流入を抑制することを主張した。もちろん、このような主張は、古屋だけでなく、他の多くの優生論者も概ね共有している内容であった。古屋の人口思想が示している固有性は、人口の質について「肉体素質」のみならず「精神素質」の重要性も強調したところにある。戦時期の古屋は、日本民族の精神素質が他の民族より優位であることを明らかにしようとし、またそれを「大東亜共栄圏の建設」という戦争の目的に積極的に結合させた。

生物学的観点に立脚した民族の理解を主張する古屋が民族の「精神素質」を強調したということは、一見矛盾するかのように見える。しかし、古屋の言う民族の生物学的な特性とは、一般的に「人種」の区分に使用される身体的な違い、すなわち肌の色、外見、身長のようなものを意味するのではない。彼の民族についての定義から見たように、彼の強調する生物学的観点とは、民族の肉体形質であれ精神形質であれそれを長い時間にわたって自然的かつ文化的「淘汰」の結果として理解することを意味する。 彼は次のように述べる。

> 人種の生物学的な性質といふものはさやうに簡単に融合出来ないものだといふことである。[…]それは精神形質に就ても云へる事で、精神が肉体の従属である以上、ここにも固有の気稟と云ふものが出来上つている。日本人には日本人の 気稟 があって、それのよしあいにかかはらず、アリアン民族の気稟と完全な一致は出来ないのである。[19]

彼の言う精神形質は、民族が進化の結果として持つようになった固有の気品ないし気質を指している。たとえば、彼は「ユダヤ人の精神形質」と「東洋人の精神形質」は、本質的に違うと言っている。そのため、ユダヤ人の考え方が生んだ「マルクス主義」のような思想が東洋に流入しても、東洋人の気質と合わないので、最終的に「清算」されるしかないと考えた。彼によると、日本精神の「培養土」である東洋の気質は「不立文字を愛して」という点で、「論理学的に体系を確立する」西洋人とは本質的に異なっている。[20] 古屋は、これらの差異が長い期間の「淘汰」（自然選択）の結果であるため、簡単に変わることができる性質のものではないと見なした。

それでは、古屋の定義した日本民族の固有の精神形質とはどのようなものなのか。彼は、『民族問題をめぐりて』で日本人特有の民族精神を「小我を捨て大我に帰入する心構え（心がまへ）」であると言っている。彼は、このような日本人の精神世界が「生物学的問題、地理的関係、その他の無数の事情に基づいて自然に培養」されたものであり、「完全に日本固有のもの」だと言う。ただし、その民族精神に対する外来文化の影響まで否定はしない。古屋によると、そこには「仏教の影響も、道教の影響も」あるが、それらは「インドと中国（支那）で

盛んできず、日本に来て、本質的な結実を成し完成されて、最終的には、民族精神融合」することにより、「日本固有のものになっていた」。[21] 要するに古屋は、日本民族を「外来の栄養をよく吸収し、整えて手際よく結実する人種」と見なし、これを日本人だけの「生物学的素質」による結果と捉えているのである。

古屋は一貫して、西洋の個人主義と自由主義を人口の優生学的な発展を阻害するイデオロギーであると非難してきた。このような点から見ると、先の「小我」が何を指すのかを知るのは難しくない。一方、「大我」は、漠然とした感じでの共同体的なもの、全体的なものを指しているかのように思われる。実際、この文章で「大我」について何ら具体的な内容は見当たらない。

ところが、『民族生物学』に至ると、「大我」の意味上の空白には「天皇=国体」が定着しているのを確認することができる。言い換えれば、彼の民族生物学はここに至って「皇道主義」と結合し始めたのである。たとえば、古屋は『民族生物学』で日本人が自覚しなければならない「自分と民族の関係」について次のように説明している。

> 大切なことは民族固有の素質を科学的に研究することであらう。そして自己と自己の属する民族との因縁を深く自覚することである。自分の親は、仮令それがどのやうな親であらうとも、自分に取つて絶対である。この絶対性の自覚が我等と我等の民族との間に、また我等と我等の大宗家たる皇室との間に自覚されねばならない。永い間西欧流の唯物主義に教育された来た現代のインテリゲンチヤはこの自覚に於て欠くるところが無いであらうか。[22]

古屋は「私と両親の関係」が絶対的なものであるのと同様に、「私と皇室の関係」も絶対的であるということに対する自覚を強調している。「大宗家」という言葉からもわかるように、天皇家を日本民族の「親」ないしは「先祖」と見なす認識が「私と皇室の絶対関係」を正当化している。言い換えれば、「小児/大亜」という項対立に代わって、「階級の一員/大宗家の一員」という新しい区分法が登場している。

一方、民族の精神素質に関する記述は、『民族生物学』の後に出版された『国士・人口・血液』(1941)にも続いている。ただし、ここでは『民族生物学』で主張された皇室との関係の絶対性に関する内容が抜け落ち、民族の精神的素質に対する観察は、とりわけ「東亜共栄圏内の複数の民族（國人）」に関しても行われる必要があるという提言が結論として提示されている。だが、日本民族の精神形質に関する内容が完全に除外されたわけではない。『国士・人口・血液』では、それが「日本人の心性」という別の章を設けて述べられている。つまり、『民族問題をめぐりて』と『民族生物学』では異なる形で提示された日本人の精神形質に関する記述が、『国士・人口・血液』では一つに「総合」されている様相を示している。

> 結論から先にいふが、筆者の考へによるに、日本人の心性の動向といふものは一少しむつかしい表現を用ひるが―『小我(主観)を捨離することによつて大我(客観)に生きようとする希求』に在ると思ふのである。この心性の特徴はいかにして日本民族に育成せられて来たかはむつかしい問題であるが、これは一面吾々の祖先が、北から、南から、或は西から、この日本嶋に徙遷して来て、それが今日の統一された日本民族を作るまでに通過しなければならなかつた社会的、政治的、その他あらゆる種類の『淘汰』の結果であつ

たといふことが、必然的に想像せらるるのである。

例へば皇室に対する『大君のへにこそ死なめかへり見はせじ』との心がまへは、我国には既に古代からあるのであるが、その原因はただの伝統的理由に依るといふよりは、もつて深い悠久の昔に於ける日本民族生成当初の、社会的、経済学的及び人種生物学的理由に基くやうに思はしめらるゝ。[23)]

「大君へにこそ死なめかへり見はせじ」というのは、『万葉集』に収録されている言葉である。古屋は再び日本人の心性(精神形質)を「小我」を捨てて「大我」の中で生きようとする意志として言及しながらも、ここではそれを「皇室=天皇」のために喜んで死ぬことができる心のようなもので対応させている。そして、こうした心の起源を古代の天皇制にまで遡及することにより、少なくとも数世紀を経て不変の形質となったという旨を主張している。いわゆる「国体」を全面的に受け入れるのみならず、「天皇のための死ぬこと」を日本民族の最高の精神的価値であると考えているところは、古屋が「国民の戦争動員」という当時の国家政策を強く意識していたことを表わしている。要するに古屋の日本民族の精神形質に関する議論は、「小我/大我」という抽象的な概念から始まり、天皇を頂点とする「大宗家」の一員であるという自覚を経て、最終的に「天皇のため命を捧げることができる心」へと変貌していったのである。

天皇のために死ぬことに崇高な価値を付与することは、戦争動員の論理としてはそれほど珍しい主張ではない。しかし、民族衛生=優生学は基本的に「生命の増殖」を目指す学問であるという点を考えると、そこで皇道主義に基づく「死の論理」が浮上していることを見過ごすことはできない。では、古屋の受け入れた「死の皇道主義」はどこから来たのだろうか。

この問題に関しては、当時「日本主義」の思想家として活躍した倉田百三のいわゆる「皇道主義日本文化論」に注目する必要がある。1938 年に発表された「日本主義文化宣言」で倉田は、「民族は文化を担当するユニット」であり、「文化は血統的系譜がある」と述べている。以下でみるように、民族や文化の関係に関する倉田の認識は、民族を「生物学的近親者」の集団とみなした古屋の民族概念と酷似している。

それ(文化)はその民族の血液と、言語と、風土と歴史との諸条件に制約されて、一定の性格を烙印せられる。かくて日本民族の文化とは、日本民族共同体すなはち日本皇国の上に開いたところの民族的生活の精華である。その発生に於て普遍一般の文化はあり得ない。我々は先づこの日本民族の文化血統を宣言して出発するものである。[24)]

さらに、倉田は言う。つまり、「日本の国体」は「世界無比」であるため、日本の独立のために戦う兵士は「天皇の名前を呼んで死ぬ」と記している。日本文化の核としての天皇は、ここで「死の論理」と接続されている。

日本文化の独自性はその国体の独自性と離れることは出来ない。日本の国体は世界無比である。それはその品位と、純潔と、血液的協同性と、献誓性とに於て断然万邦を超えている。それは神々の直系の裔であると国民に信仰せられ、民族の血統的中心である天皇によつて統治せられ、

一系の純潔を乱さず、国土も亦他民族の凌辱を受けた事はない。［…］国家の独立と、名誉と、使命とのため生命を捨てて戦ふ国民即兵は、天皇の名を呼んで死ぬのである。[25]

古屋の皇道主義優生学と倉田の日本主義文化論との類似性は、このような論理的な相同性に限られたものではない。大正期に「生命」と「芸術」に傾倒していた古屋は、その時期既に倉田と交流していた。実際に、古屋は自分の小説「暗夜」（1919）の冒頭で倉田について言及している。実は、それに先立って倉田は古屋が1917年『白樺』の姉妹紙として創刊した『生命の川』に投稿者として名前をあげていた。要するに、二人はすでに大正時代から「生命主義」の言説圏の中で知的な交流を行なっていた。

戦争期の古屋の日本民族の素質に関する言説をみると、そこに嘗て学問の実証性と科学的方法を重視していた「学者」の姿は著しく後退している。古屋は、日本民族の民族性、すなわち「天皇のために死ぬことができ」、また「天皇の指導下、外来文化を受け入れてそれらを統合することができる能力」を日本民族の「大東亜共栄圏」での指導的地位を保証する根拠と見なした。それだけではなく、日本人の観念が西洋人の個人主義と自由主義に比べて優れていることを示す証拠であると考えた。つまり戦争の中で、彼の民族科学的人口論は戦争動員のためのイデオロギーの性格を明白に帯び始めたのである。

結局、古屋の「民族科学（民族生物学）」は、天皇主義の圧力の前で実証科学の姿を失ってしまった。それは古屋が「皇室の歴史」を科学的実証の対象として考えなかった点からも確認することができる。彼は進化論のロジックを借りて、現在存在するということは「淘汰」の圧力を勝ち抜いたことを表わす印であると考えた。それによると、「皇室の存在自体」がその重要性を立証する科学的根拠である。嘗て文化史的民族理解を「民族科学」の領域へ移行させた古屋は、戦時期に至ると「皇道主義」をいかなる実証もなく正当化する「非科学」の態度を表している。

おわりに

1938年以降、日本では総力戦に備えた社会的な再編が始まり、その過程で国家による国民の生命に対する管理・統制が強化された。このとき国民は動員のための「人的資源」として見なされ、政府は優生学に基づいた人口政策を通して人口の「量的増加」と「質的向上」を主導した。すなわち、優生学は経済力と軍事力と並んで人口を総力戦の核心的な要素として取り組むという発想を導入した。

優生学は、当時の表現を借りれば「高度国防国家の優生学」として存在した。しかし、現実は期待通りの成果は得られなかった。結局、出生率は改善されず、「遺伝的悪質者」の排除のために認められた断種の施術件数も様々な反発により低調にとどまった。さらには、激しさを増す戦争の中で増えていく戦死者数が優生学の期待を決定的に頓挫させた。「逆淘汰」を払い退けて「一億人口」に到達するという優生学のビジョンは「未完」に終わった。

そして、人口政策（生命管理政策）の挫折は優生学そのものにも当てはまる。本稿が対象とする古屋芳雄のいわゆる日本主義優生学は、その典型的な事例だと言える。前述した通り、古屋は時代の圧力に便乗していく中で、「生命の増殖」を追求する優生学の理論の中に天皇のための死を賛美する「死の美学」が侵食するのを許してしまった。「日本主義優生学」という「形容矛盾」をなす表現は、戦

時期に起こった優生学における知の堕落を象徴的に示すものだと言える。

注

1）藤野 藤野豊,『日本ファシズムと優生思想』, かもがわ出版、1998、p.264

2）米本昌平他,『優生学と人間社会―生命科学の世紀はどこへ向かうのか』, 講談社, 2000、pp.176-178.

3）松村寛之,「「国防国家」の優生学―古屋芳雄を中心に―」,『史林』83(2), 2000、pp.121-124.

4）松村寛之、前掲論文、p.107.

5）鈴木貞美編,『大正生命主義と現代』, 河出書房新社, 1995, p.244.

6）柳宗悦「生命の問題」,『柳宗悦全集　第一巻』, 筑摩書房, 1981, p.323.

7）「古屋芳雄先生に聞く」,『公衆衛生』27 巻 1 号, 1963.1、pp.26.

8）中見真理,『柳宗悦　時代と思想』, 東京大学出版会, 2003、pp.75-76.

9）古屋芳雄、『民族生物学』, 高揚書院, 1938、p.1.

10）古屋芳雄、前掲書、p.3.

11）古屋芳雄、前掲書、p.4.

12）古屋芳雄、前掲書、p.4.

13）古屋芳雄、前掲書、p.4.

14）古屋芳雄、前掲書、p.7.

15）古屋芳雄、前掲書、pp.5-6.

16）古屋芳雄、前掲書、p.29.

17）古屋芳雄、前掲書、pp.32-33.

18）古屋芳雄、前掲書、 pp.36-38.

19）古屋芳雄、『民族問題をめぐりて』, 人文書院, 1935、p.20.

20）古屋芳雄、前掲書、p.20.

21）古屋芳雄、前掲書、pp.36-37.

22）古屋芳雄、『民族生物学』, 高揚書院, 1938、pp.58-59.

23）古屋芳雄、『国土・人口・血液』,　朝日新聞社, 1941、pp.149-150.

24）倉田百三『日本主義文化宣言』, 人文書院, 1939、pp.1-2.

25）倉田百三、前掲書、pp.7-8.

参考文献

가토 슈이치(加藤秀一) 著, 서호철 翻 (2013) 『‘연애결혼’은 무엇을 가져왔는가--성도덕과 우생결혼의 100 년간』小花.

미쉘 푸코 (Michel Foucault) 著, 이규헌 翻 (1990) 성의 역사 1 앎의 의지』나남.

오구마 에이지 (小熊英二) 著, 조현설 翻 (2003)『단일민족신화의 기원』소명출판.

요코야마 다카시 (横山尊)　著, 안상현·신영전 翻 (2019) 『일본이 우생사회가 될

때까지--과학계몽, 미디어　생식의 정치』한울아카데미.

강태웅（2012）「우생학과 일본인의 표상--1920~40 년대 일본 우생학의 전개와 특성」『일본학연구』제 38 집 단국대일본연구소.

김경옥（2013）「총력전체제기 일본의 인구정책--여성의 역할과 차세대상을 중심으로」『일본역사연구』 제 37 집　일본사학회.

박이진（2013）「일본의 혼혈 담론」『대동문화연구』제 103 집 성균관대학교 동아시아학술원.

서동주（2020）「근대일본의 우생사상과 '파국'의 상상력」『일본문화연구』제 75 집　동아시아일본학회.

이헬렌（2021）「우생학 담론에서 '배제'의 논리: 생명관리 권력(Biopower) 이론을 통해 본 이케다 시게노리(池田林儀)의 우생운동」『일본역사연구』제 36 집 일본사학회.

久野収・鶴見俊輔（1956）『現代日本の思想』岩波書店。

倉田百三（1929）『日本主義文化宣言』人文書院。

古屋芳雄･早川孝之訳（1925）『カアペンタ-芸術論　天使の翼』 表現の生活研究会。

_____（1935）『民族問題をめぐりて』。

_____（1938）『民族生物学』高揚書院。

_____（1941）『国土・人口・血液』朝日新聞社。

_____（1943）「大東亜戦争と人口問題」『教學叢書第 十四輯』文部省教學局編。

_____（1963）「古屋芳雄先生に聞く』『公衆衛生』27 巻 1 号。

佐藤光（2015）『柳宗悦とウィリアム・ブレイク　還流する「肯定の思想」』東京大学出版会。

鈴木貞美（編）（1995）『大正生命主義と現代』河出書房新社。

_____（1996）『「生命」で読む日本近代』 NHKBooks。

鈴木善次（1991）「進化思想と優生学」柴谷篤弘外（編）『講座進化② 進化思想と社会』。東京大学版会。

高岡裕之（2013）「体力･人口･民族：総力戦体制厚生省」『한림일본학』第 23 号　한림대일본학연구소

田中聡(1994)『衛生展覧会の欲望』青弓社。

中見真理（2003）『柳宗悦　時代と思想』東京大学出版会。

日本文学研究資料刊行会（編）（1971）『日本文学研究資料叢書　白樺文学』有精堂出版。

荻野美穂（2008）『「家族計画」への道』岩波書店。

藤野豊（1998）『日本ファシズムと優生思想』かもがわ出版。

松原洋子（1997）「<文化国家>の優生法―優生保護法と国民優生法の断層」『現代思想』。

松村寛之（2000）「「国防国家」の優生学―古屋芳雄を中心に―」『史林』83 巻（2 号)。

柳宗悦（1981）「生命の問題」『柳宗悦全集　第一巻』筑摩書房。

米本昌平他（2000）『優生学と人間社会―生命科学の世紀はどこへ向かうのか』講談社。

Population Thought and Japanism in Modern Japan: Focusing on Koya's "Rassenbiologie"

SEO, Dong Ju

Abstract

The existence of a person named Yoshio Koya cannot be ignored in the process of establishing population policy during the total war. He was a scholar teaching eugenics at university until the mid-1930s. However, since he became a bureaucrat of the Ministry of Health in 1939, he has been involved in the establishment of wartime population policy. He went beyond the role of "speaker" for eugenics. He was rather closer to the "executor" he was leading the wartime population policy. Therefore, in order to understand the role that Yoshio Koya played in the history of eugenics in modern Japan, his influence exerted in the process of establishing population policy and the logical structure of "“Rassenbiologie" presented by him were explained. Must be analyzed. Furthermore, it is necessary to take into consideration the content of his eugenic theory that has changed due to the war situation. In particular, during the war, Koya's "“Rassenbiologie" disappeared under the pressure of Japanese Imperialism. He borrowed the logic of evolution and thought that being present is a sign that he has overcome the pressure of "selection." According to it, the existence of the Japanese emperor itself is the scientific basis to prove its importance. He once moved the cultural history of ethnic understanding to the realm of "ethnic science", but by the time of the war he expressed a non-scientific attitude that justified "Imperialism" without any proof.

Keywords：Yoshio Koya, Rassenbiologie, Population Policy, Total War, Japanese Imperialism

中国改革開放期における日本語教育と日本の支援事業

鄭 亨奎（日本大学）

要旨

改革開放期に中国の日本語教育は急速な発展を遂げた。その背景には国内の改革開放政策をはじめ新たな外国語教育政策等があり、国際的には日中平和友好条約締結による日本の支援事業があった。本論では改革開放期の高等教育における日本語教育の変化と発展、中等教育における朝鮮族学校の日本語教育、そして日本の支援事業について考察した。大平学校は研修事業を通して、中国における日本語教育の基礎を固め、新しい日本語教育のモデルを確立した。留日予備校は学部生、大学院生、訪問学者などに対する留学予備教育だけでなく、その教授法は中国の大学における日本語教育にも大きな影響を与えている。教育委員会による日本語教師派遣は中国高等教育の日本語教育の促進に大きな役割を果たし、日本語教材作成にも貢献した。中国に日本語教材を送る会の活動は日本語教材が極力不足の当時において大変貴重なものであった。改革開放直後中等教育における朝鮮族学校の日本語教育は「満州国」時代に日本語を習得した知識人らにより支えられるという特殊な時代背景の反映でありながら、当時の中等教育における日本語教育に大きな役割を果たした。

キーワード：改革開放期、日本語教育、支援事業、派遣教師、国語教科書

はじめに

新中国成立以降、中国の日本語教育は 70 余年の歩みを経過し、2018 年時点ではすでに学習者数（1,004,625 人）、教師数（20,220 人）ともに世界一[1]の規模になった。しかし、その道のりは決して平たんではなかった。中国の日本語教育を軌道に乗せ、確立するまでに 30 余年という長い歳月が必要であった。中国の日本語教育の現代史を扱った先行研究は多数ある。例えば、徐・高野（2004）は「草創期 1949-1972」「始動期 1972-1978」「発展期 1978-1990」の 3 期に分け、それぞれの特徴について「政治的優先型」「経済的需要型」「実利的現実型」としている。田中（2015）は大きく 4 つに区分している。

（1）黎明期・揺籃期（1949-1969）（黎明期：1949-1963・揺籃期：1964-1969）

（2）復興期・確立期（1970-1989）（復興期：1970-1977・確立期：1978-1989）

（3）成長期・成熟期（1990-1999）（成長期：1990-1999・成熟期：2000-2010）

（4）転換期（2011-）

他にも 1977-1990 年を「展開期」[2] とするもの等がある。このようにそれぞれの研究目的や分析の観点によって区切りの設け方、名称が異なるが、その中の「発展期」「確立期」「展開期」はいずれも改革開放期と重なり、中国における日本語教育の最盛期であったという点では共通する。本論では田中(2015)の区分を援用して「確立期」とする。

では何故「確立期」と見做すか、確立ができたのにはどういう時代背景があったのか。本論では当時の中国国内の情勢、政府の政策と日本の支援事業を視野に入れ、この改革開放期における中国の日本語教育について考察する。

Ⅰ．高等教育における日本語教育

中国における日本語教育の特色は高等教育段階の学習者が最も多い割合を占めることで、国際交流基金 2018 年調査では全体の 6 割近く[3]を占めている。これは世界で日本語学習者数が 2 番目、3 番目に多いインドネシア、韓国と異なる。2018 年時点で、インドネシアは、高等教育段階の学習者高等教育段階の学習者（28,799 人）が全体（709,479 人）のわずか 4.5％で、韓国も高等教育段階の学習者（39,774 人）が全体（531,511 人）の 7.4％しかない[4]。

高等教育における日本語教育は(1)外国語専門教育としての日本語専攻(2)非専攻第一外国語、第二外国語としての日本語教育に分類されるが、大学の日本語専攻教育は、中国の日本語教育の中心的な役割を果たしている。

建国当初北京大学の日本語学科（当時の名称は「北京大学東方語文系日文専業」）をはじめ数校の日本語教育機関が学生募集を始めたが、規模が小さく、主に情報獲得のために日本語資料を読解、翻訳する人材を養成するのが目的であった。その時のカリキュラムは主に精読や文法教育を中心とする内容であった（李 2007）。

1966 年文化大革命が始まると大学授業は中止となり、日本語教育も空白状態が続いた。

1970 年代に入ってやっと大学の教学活動が復活し、清華大学や大連外国語学院等の大学の日本語学科は相次いで学生募集を始めた。いわゆる「工農兵学員」[5]であるが、推薦によって選抜された。まだ文化大革命の影響もあり、学習年限は 3 年、それも在学中軍事訓練や労働などが科せられ、実質学習時間はもっと短かった。日本語教科書には中国の作品を翻訳したものが多く、文章のタイトルは、「団結と友情の盛会」「引き続き前進」「中日両国人民は何時までも仲良くしていこう」等といった政治色の強いものが教科書に掲載された。当時は日本語の教科書や資料が乏しく、教科書を作成するための教材として、「人民中国」や「北京週報」を参照にしたという（田中 2013）。

1976 年文化大革命が終息し、大学の教育が正常な軌道に乗りつつあった。その後改革開放政策の実施と伴い、対外的に門戸を開くことにより、留学生派遣事業も本格的に開始した。1977 年には 11 年ぶりに大学入試も再開した。1978 年北京で全国外国語教育座談会が

開かれ、会議では『外国語教育強化についての意見』がまとめられ、翌年の 1979 に国家教育委員会によって公布された。それにより本格的な日本語教育が始まった。

1978 年に統一試験を受けて選抜された一期生（77 級）、2 期生（78 級）が入学した。そのほとんどは文革中に下放された経験のある人で、高卒で直接大学に進学した世代もごく少数でありながら一部存在した。彼らは年齢の差はあるものの、皆貪るように学習に没頭した。

文化大革命中大学を追われ、農村部に下放された日本語教師が次々と大学に戻ってきた。戦前日本留学経験のある人、「満州国」時代に日本語教育を受けた人、残留日本人、新中国成立後大学を卒業した日本語学科の出身者が教師となった。教員不足のため卒業したばかりの「工農兵学員」出身者も教壇に立った。

教科書の選定はかなり自由となり、日本の教科書をそのまま採用する大学が多かった。代表的なものに東京外国語大学付属日本語学校編の『日本語』Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、大阪外国語大学吉田弥寿夫編の『新しい日本語』、国際交流基金編の『日本語初歩』などであった。大学独自の教科書作成も始まった。例えば、上海外国語大学日語教研室編『日語（日語専業用）』第一冊（1980）、第二冊～第四冊（1981）、第五冊、第六冊（1986）、第七冊、第八冊（1987）、北京大学東方語言文学系日語教研室編『基礎日語』第一冊（1981）、第二冊（1982）、第三冊（1985）、第四冊（1987）等。田中（2015）は 1980 年代の中国の日本語教科書は日本の国語教科書との重なりが見られ、様式としては「評論」「解説・鑑賞」「随想」、題材としては「文学」「言語」「自然科学」が多いと指摘している。1979 年からいろいろなルートで日本の国語教科書が中国に入るようになり、教育現場でそのまま使われることもあった。1979 年から 1981 年まで、自治体の教育委員会による国語科教諭の派遣事業として、江蘇省南京市の高等教育機関に日本から派遣された教師によると、日本語教科書が少なかったため日本から持参した書籍や国語教科書を用いて現地の教科書作成を行ったという（田中 2015）。

1990 年に大学専門日本語教育の「教学大綱（教育指導要領）」が制定されから、大学の日本語教科書はそれに準拠した内容となった。どの教科書も基本的には発音・文字・語彙・文法・文型は「教学大綱」に依拠し、また一つの課は本文、会話、語彙、文法、練習からなっているが、その提示の仕方や力点の置き方には、それぞれの特徴が見られる（堀口 2003）。

この「教学大綱」は 1980 年代に主要機関の研究者が日本から派遣された専門家とも協議を行いながら検討した下地があり、そうした蓄積に基づく知見が全国の高等教育機関で試用・分析された上で、制定されたこととなる（田中 2015）。

1978 年から各大学の学報や日本語関係の専門誌が相次いで復刊した。上海・大連・天津外国語学院の日本語学部では、それぞれ『日語教学』『日語学習』『日語教学参考』などの雑誌を刊行し、日本語研究論文や日本語教育の参考資料を載せている。商務印書館編集の『日語学習』第一集が 79 年 11 月に刊行された。対外経済貿易大学（当時の名称は北京対

外貿易学院）の『日語学習与研究』は 1979 年に創刊号が刊行され（王 1980）、中国教育部主管、対外経済貿易大学が主体となる日本語研究の総合学術季刊誌として現在に至っている。

Ⅱ．中等教育における朝鮮族学校の日本語教育

1. で述べたように、中国における日本語教育の特色の一つに高等教育段階の学習者が最も多いことであるが、改革開放直後は状況が異なっていた。中等教育の日本語学習者が高等教育の学習者数を遙かに上回っていた。その背景には朝鮮族学校における日本語教育が存在していた。

改革開放後の朝鮮族の中学・高校の日本語教育は大学の日本語教育と並んで中国の日本語教育において極めて重要な役割を果たいしている。1990 年末に行ったアンケート調査によると、高等教育の日本語学習者が 71,475 人であるのに対して、中等教育の日本語学習者は総計 122,103 人であった。そしてその半数の 62,387 人が朝鮮族であった。学生がもっとも集中しているのは吉林省延辺朝鮮族自治州で計 25,218 人であった（王 1994）。

前述の『外国語教育強化についての意見』では、「小学校、中学校、大学ともに成人に対する外国語教育に力を入れること」を示し、「英語教育に大いに力を入れると同時に日本語、ドイツ語、フランス語、ロシア語教育も発展させるべきである」と提起した。これによって、小中学校にも外国語教育が導入されることになった。

1977 年の大学入試再開に続き、79 年には全国統一試験の正式科目として外国語が加わった。1980 年 10 月に国家教育部と民族事務委員会は『民族教育の自治権の強化について』[6]を公布し、民族学校に対する財政的支援も決定された。それにより民族学校の外国語を含む民族教育がさらに強化されることになった。

新中国成立後中国は社会主義陣営のソ連一辺倒の方針を実行に移し、外国語も英語教育からロシア語教育にシフトされた。その後中ソ論争が始まってから、外国語教育として英語、ドイツ語、フランス語、日本語等が見直され始めてきたが、東北地方では一時期まで依然としてロシア語が主流であった。朝鮮族学校では英語教師の確保がとても難しかった。そこで登場したのが日本語教育である。当時の朝鮮族社会には日本語を教えられる人材が少なくなかったからである。「満州国」時代に学校教育において日本語を習得した「朝鮮人」[7]の「老教師」たちである。1981 年統計では全国の朝鮮族の日本語教師（663 人）が漢族（631 人）よりも多い。また遼寧省朝鮮族中学校では 1985 年時点でも 50 才以上の「老教師」が半分以上（52.6%）を占めていた（王 1994）。

漢族学校でもロシア語と日本語を学ぶ学校があったが、英語教員が確保できた 1980 年頃には英語教育に切り替えた。朝鮮族学校では 80 年代末までほぼほとんどの中学・高校で日本語教育が行われた。その理由には、上記の日本語教師の確保ができたことと、もう一つは日本語と朝鮮語との類似性が指摘されている。事実朝鮮族の生徒が日本語を学習するメ

リットが大学受験でも明確に表れた。小川（1997）によると、延辺朝鮮族自治州における大学入試の日本語と英語の成績を比べると日本語の平均点は英語のそれより 20 点から 30 点も高くなっている [8)]。朝鮮族の生徒にとって日本語の学習は進学において非常に有利であることが分かる。

ところが 2000 年代に入ると初等・中等教育の学習者が減り始め、2018 年の調査では高等教育機関の学習者の 16%までに減少した [9)]。その理由の一つに東北、特に延辺州の朝鮮族中学・高校の日本語の学習者が減少したのと直接関係があると思われる。琿春市と安図県では､教育委員会の決定により 2001 年から地域内の初級中学校で日本語クラスの生徒募集を中止した。2003 年頃には延辺州の 84 の中等教育学校の中で日本語教育が行われた朝鮮族学校は 20 校で全体の 24%に過ぎなかった（金 2009)。

Ⅲ．中国の日本語教育に対する日本の支援事業

新中国の成立とともに日本と中国は国交断絶状態が続いた。両国間の文化交流、教師の派遣などほとんどなかった [10)]。1972 年日中国交が回復し交流も始まったが、当時中国はまだ文化大革命が続いていたので、本格的な交流には至らなかった。文化大革命の終息、改革開放政策の実施、1978 年の日中平和友好条約の締結により、日中交流が盛んになった。そこで、日本は官民ともに様々な支援事業を行った。日本政府による対中 ODA 援助、その一環として日本語教師養成事業、通称「大平学校」、留学生に対する予備教育、地方自治体の教育委員会による日本語教師派遣事業、民間組織による「中国に日本語教材を送る会」の活動等があげられる。

1. 大平学校

大平学校の正式名称は「在中国日本語教師研修センター」である。故大平正芳元首相がその設立に尽力したことで中国では「大平班」、日本語で「大平学校」と呼ぶようになった。1980 年中国教育部と国際交流基金は共同事業として、北京語言大学（当時の名称は北京語言学院）に日本語教師研修センター（中国名「日语教师培训班」）を設置した。当時の中国全土の日本語教師約 600 人に対する研修を、5 年間（毎期一年各 120 人、全５期計 600 人）にわたって実施することになった。研修の重点は、教師の「日本語運用能力の向上」ならびに「言語理論と各専門領域の知識向上」に置かれ、現職の日本語教師の研修を行うことが目標とされた。日本側からの講師派遣と、教材・図書資料・機材の提供が行われた。そして研修生は一ヶ月の訪日研修を行うことになっていた。1980 年 8 月から 1985 年 7 月までの 5 年間に、最終的には中国国内約 160 機関の日本語教師 594 人が参加した。日本からの教員の派遣は、主任の佐治圭三氏をはじめ著名な日本語教育研究者や、若手日本語教師が参加して、のべ 91 人（長期・短期）に上った（篠崎・曹 2006)。これは日本の対中 ODA 援助の一環であり、五年間で計 10 億円が投入された。それ以前には、これほどまで大規模

に日本語の教師研修を行った例はなく、大平学校の設立は日中国交正常化以降、中国の日本語教育にとって重要な転換点となった。

研修内容について、佐治（1989）は以下のように述べている。

(1) 日本語教師としての能力を高めることを目標として、日本語学、日本文学、日本事情の各領域から、できるだけ中国側の要求に応じるように学科目や講義の内容を組んだ。

(2) 学年の初めの頃は共通的な、基礎的な学科を配置、次第に選択科目を増やし、後期には語学コース（文法・語彙コースと、発音コースに分かれる）と文学コースに分かれるなど、それぞれの専門とする領域の力が付けられるように配置した。

(3) どの期においても、研究会活動や、研究指導の時間を設けて、研究者としての能力を高めることができるようにした。

その後この活動の継続と発展を目的として 1985 年に北京日本学研究センターが設立された。同センターは引き続き全国の大学の日本語教師の養成訓練を担う日本語教師研修班の他に、新たに日本語学、日本文学、日本社会、日本文化の 4 つの修士課程及び博士課程コースを設置して運営してきたが、日本語教師研修班は 2001 年 9 月に解消して、在職の日本語教師を対象とした中国で最初の日本語教育の修士課程コースとしてスタートした（堀口 2003）。

研修生の選抜対象は大学（外国語学校を含む）に所属する壮年、青年専任日本語中堅教師で，健康且つ統一試験に合格することを必須条件にしていた。1980 年に全国を対象に統一試験が行われ、120 名の第 1 期生が選抜された。

第 1 期の研修に参加した研修生は「文革勃起時の 1966 年時点ですでに大学ないし専門学校を終えていた者およそ 30 名、残りの 90 名はいわゆる文革世代であった（平井 1981）」。研修生たちは中国の現職の大学の日本語教師であったため、強い問題意識と学習意欲をもっていた（孫 2015）。第 1、2、3 期の研修生には文革中に日本語を勉強した「工農兵学員」が多かった。第 3 期から 1977 年の大学入試再開後の世代が参加するようになり、そのため 4 年制大学の卒業生が徐々に増加した。主任の佐治氏は「三期になると、だいぶ様子が違って、中国自体がかなり緩和してきたのでしょうか、開放政策が進んでいったんでしょうか、四期になると、論文を書くことが非常に上手な人たち、つまり大学の教師として単に日本語教育、実地の教育にあたるだけでなく、行く手を自分たちで切り開いていくことのできるような能力をもった若い人たちがやってきました。」[11] と述べている。

大平学校は大学の日本語教師である研修生に対して、日本語教育に関する専門的な教育を行い、日本語教師としての資質を高め、そのことを通して、中国における日本語教育全体のレベルを高めた。

研修生たちは大平学校でのゼミや公開講座などを通して意識を高め、レポートや論文を書く訓練を通じて研究手法を学び、次第に基礎的な研究能力を身につけた。

大平学校は 1980 年代の中国における日本語教員研修のモデルとして最新の知識を獲得し、研究能力まで育てる場を提供し、その後の日本語教育の質的向上に貢献した（孫 2018）。

2. 中国赴日本国留学生予備学校

1978 年日中平和友好条約が締結され、翌年の 1979 年から日本は中国からの国費留学生を受け入れることになった。大規模な留学生派遣に伴い、留学前の予備教育の必要性が生じ、中国教育部は日本派遣留学生の予備教育機関として東北地区に 2 か所設けた。その一つが 1979 年日中政府間の共同事業として長春市にある東北師範大学（当時の名称は吉林師範大学）内に設立した「中国赴日本国留学生予備学校」（以下「留日予備校）と略す」である。提携校は東京外国語大学と東京工業大学である。

留日予備校の運営主体は中国側であり、東北師範大学の副学長が校長になって直接運営に当たっていたが、留学予備生の教育そのものは、日本政府の派遣した日本人教師を中心に行われた。カリキュラムは基本的に東京外国語大学付属日本語学校の例が参考とされた（王 2009）。

留日予備校予備生の選抜は中国政府が担当し、第 1 期の予備生の選抜は 1978 年 9 月に実施された全国大学入学統一試験の成績を基準に行われた。この統一試験は文革後に初めて全国の高校卒業生に向けて行った大学試験である。選抜された予備生は、政治審査と健康診断を受けてから、3 月の予備学校に入学するように命じられた。政治審査はどういう基準で行ったかは不明だが、成績が優先されたことには間違いない。

日本人講師の人選と派遣は、基礎科目については文部省学術国際局国際教育文化課が担当し、日本語教育については国際交流基金が担当した。学部留学生予備教育のために、第 1 期に 19 名、第 2 期に 20 名、第 3 期に 19 名、第 4 期に 11 名、第 5 期に 9 名の日本人講師が派遣された（王 2009）。第 1 期の日本語派遣教員は団長の東京外国語大学付属日本語学校の伊藤芳照教授をはじめ計 7 人であった。

使用教科書は東京外国語大学付属日本語学校編の日本語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲである。この教科書は来日した東京外国語大学付属日本語学校で学ぶ国費留学生のために作成されたものである。「練習」は本文に提出された文型を個々に取り上げ、模倣、記憶、応用の順に練習できるよう「言葉の使い方」「言葉のきまり」「まるうめ」」「わくむめ」「置きかえ」「言いかえ」「問いと答え」の流れで構成されている。模倣・記憶・応用の練習は、行動主義の理論に基づいて開発されたフリーズが主唱したオーディオリンガル・アプローチの影響がある。授業は東北師範大学日本語学科の教員の協力を得ながら進められたが、全て直接法であった。予備生のほとんどは日本語学習歴がゼロであったが、一年後に驚くほど上達し、日本での大学進学率は 100％で、33 校の国立大学と 3 校の公立大学に入学した（酒井 2012）。

当時中国の日本語教育界において、直接法を実践している機関はほんの一部で、直接法に対しては懐疑的な風潮があったが、留日予備校の実践を目の当たりにして東北師範大学

日本語学科も試みることになった。

留日予備校の教授法は、オーディオリンガル・アプローチを基本としながら ASTP（Army Specialized Training Program）の一面もあるとの見方もある（酒井 2012）。留日予備校の日本語教育は東北師範大学だけではなく、後に中国の日本語教育界にも影響を与えた。

中国人教師の依頼で、伊藤芳照氏は一週間に一度、中国人教師のために日本語教育の指導要綱についての特別講座を行い、予備学校の教師だけでなく東北師範大学日本研究所の研究員、吉林大学の教員も参加したという。こうして東北師範大学の日本語学科の教員の研究が実り、予備学校の教授法を取り入れていった結果、日本語学科の学生のレベルも急激に高くなったという。留日予備校に派遣された日本人教師団は学生の教育だけではなく、他機関の教員養成の機能も果たしていた。1984 年日本語教育を行っている中国国内の大学が連携して「中国日語教学研究会」を発足した。同年東北師範大学において中国日語教学研究会のシンポジュウムが開催された。その際、各大学および教育部の参加者に対して、東北師範大学日本語学科の日本語の授業を公開したが、授業を見学した者たちは一様に驚くとともにその学習効果に高い評価をしたという（酒井 2012）。

この学部国費留学生の予備教育は 1979 年から 5 年間続き、5 期計 369 人の留学予備生を育てている。その後教育対象を学部留学生から大学院留学生、訪問学者など、各レベルに拡大させつつ、その留日予備教育という役割を現在まで担い続けている。

3.　出国留学人員培訓部

日本派遣留学生の予備教育機関のもう一つは、大連外国語大学（当時の名称は大連外国語学院）内に設立した「出国留学人員培訓部」（以下「培訓部」と略す）である。その前身は 1979 年に設立した「出国留学生予備部」であり、1982 年に変更された。培訓部設立当初は訪問学者の日本語教育が中心であったが、一部の大学院生の教育も担当していた（王 2004）。培訓部の日本側提携校は大阪外国語大学と京都大学であり、1982 年から中国政府派遣大学院生の予備教育を行っている。孫（2019）は 1982 年の第 1 期中国政府派遣大学院生を対象として、大連外国語大学における大学院生出国留学生の実態調査を行っている。

1981 年 10 月に「全国大学院及び出国留学生選抜試験」が実施され、合格した 150 名が日本留学の国費予備生に決まった。その中の 100 名が大連外国語大学の培訓部で予備教育を受けることになり、他の 50 名は東北師範大学の留日予備校で受けることになった。

1982 年日本からは責任者吉田弥寿夫教授をはじめ、計 4 人の日本語教育講師団が派遣され、大連外国語大学の中国人教師と協力しながら日本語教育に当たった。赴任時に日本から教材、テープレコーダーなどの機材全て（学生 100 人分）を持参したという。

クラス編成は 100 人の学生が 6 クラスに分かれて、1 班は 20 人で日本語がかなりできるクラス、2 班も 20 人で日本語がある程度できるクラスであるが、3 班から 6 班は 15 人ずつで日本語がほとんどできないクラスである。持参した初級教科書の学習は一か月半で終わ

り、自作教材で対応したという。なお、専門教育は京都大学から 5 名が派遣され、化学、物理、生物、情報工学、数学を教えていた。

受講生からこの予備教育が日本留学に重要な役割を果たしたと高く評価されている。

半年の予備教育を終え、1982 年 10 月国費留学生は日本全国の 30 余りの大学に分散して留学生活を始めた。彼らは学部聴講生や大学院研究生の形で専門課程の講義を聴きながら、大学院入試の準備をし、その後大部分は大学院に進学した。なお、進学先は中国教育部と日本の文部省が交渉して決めたという（孫 2019）。

1982 年から 1985 年まで培訓部で予備教育を受けた大学院留学生は計 354 人で、1982 年 100 名、1983 年 113 名、1984 年 89 名、1985 年 102 名である [12)]。

4. 日本の教育委員会日本語教師派遣事業

中国の高等教育における日本語教育の現場では日本の社会や文化事情に精通したネイティブ教師の必要性が高まり、1970 年代末から多数の教師が専門家として日本から派遣された。形態としては、地方自治体の教育委員会や日中技能者交流センター、国際交流基金、文部科学省、JICA などの機関と中国国家外国専家局との共同事業として実施されてきた。当時は日本語教育を専門とする教師が少なく、派遣教師の多くは、大学で中国語学や中国文学、日本語学、国語学、国語教育学を専門とする教師や院生、日本の高等学校の国語科教諭であった（田中 2015）。

その中でも特に地方自治体の教育委員会による日本語教師派遣事業が注目される。

1979 年神奈川県の教育委員会は中国国家外国専家局との共同事業として、全国の教育委員会初となる国語科教諭派遣事業を開始した。神奈川県教育委員会は 1979 年から南京大学、南開大学、上海外国語大学、北京第二外国語学院、遼寧大学、曲阜師範大学、大連外国語学院、四川外国語学院、福建師範大学福清分校等の大学に国語科教諭を派遣した。派遣教師の職務は中国国内大学の日本語専攻学科において日本語を教授することであり、主に日本語専攻の学部生を教えていた。派遣教師に求められたものは「正しい日本語」「日本人の心」の規範、実践的な日本語力の養成、日本社会と文化に関する知識と情報の伝達であった。派遣教師も「正しい（美しい）日本語」や「日本人の心（考え）の規範として学生の日本語力を高め、日本についての知識や理解を促すのが役割であると認識していたという。派遣教師は原則として日本語学科開設授業を週 12 コマ（1 コマ 45 分）程度行うが、担当学年・担当科目・使用教材の選択は、派遣先機関に一任されていた。派遣教師には適正を考慮し、国語科教育の専門性が活かせ、日本で行っている授業内容と大幅な違いがないと考えられる科目（高学年段階の「精読」、「文学選読」、「文学史」、「文語文法」、「古典文学選読」等）を中心に担当することになった。その他に、実際に日本で生活し、社会や習俗について把握していないと担当が困難な「日本事情」や、学生の誤用を発見し訂正するためネイティブの語感が必須となる「作文」「会話」も派遣教師担当となる場合が多い。派遣

事業が始まった当時は教材も種類が少なく内容的にも不足や偏りが見られたため、派遣教師が小・中・高等学校の国語教科書を持参し、それを用いて授業が行われる場合が多かった。国語科教科書や副読本を生徒の人数分日本から持参する派遣教師もいた。

このように教育現場では派遣教師の適性を考慮した役割分担がなされ、基本的には、国語教育の内容や手法で教えることが求められてきた。そして、現地中国人教師から「しっかりした言葉を覚えようと思えば高校、中学の先生が一番いい。しっかりと相手が何を必要とするか、高校の先生は特に分かる」という意見や、心情や文化に踏み込む内容や、古典から近現代文学までも教えるには国語科教諭が必要という指摘がなされた。更に、日本語教科書の作成には国語科教諭の協力が不可欠で、大学専攻日本語教育の教育内容や手法確立に際し多大なる貢献を果たしたと評価している（田中 2015）。

他に東京都、静岡県、埼玉県、山梨県、三重県、奈良県、岡山県、広島県、山口県、愛媛県、長崎県等の教育委員会も国語科教諭を派遣し、派遣先は主に中国の高等教育機関の日本語学科であった。

長崎県教育委員会は 1981 年から日本語教師派遣事業を始めた。毎年 5 人ずつ中国の 5 大学（東北師範大学、福建師範大学、復旦大学、北京外国語師範大学、山東師範大学、任期 2 年）に派遣していた。県教育委員会が派遣教師希望者募集を行い、論文と面接による第一次選考、第二次選考を経て合格者 5 人を決める。出発する前に派遣教師研修会を行い、中国事情、日本語指導、中国語指導の学習をする。終了後は帰国報告会を行うことになっている[13]。派遣教師たちは献身的に中国の日本語教育事業に没頭し、派遣校から高く評価されている。その教え子たちが日中両国の様々な分野で活躍しており、今も交流が続いているという。また長崎県知事、派遣教師たちは中国の大学に大量の日本語の図書を寄贈している。1986 年には長崎県派遣教師の生活と体験を綴った『中国の二年』が刊行され、2005 年には長崎県日本語教師中国派遣 25 周年記念誌『一衣帯水～時空を超えて～』が刊行されている。その資料から派遣事業が途切れることなく行われたことが読み取れる。

5. 中国に日本語教材を送る会

1980 年代には行政府や民間の諸団体による日本の図書の寄贈も活発化した。1979 年に日中両国政府共同で立ち上げられた中国赴日本国留学生予備学校（東北師範大学）の関連事業として、日本政府は 4,700 万円の視聴覚設備と約 8,000 冊の資料を提供している（源元 2010）。1980 年華国鋒首相が日本公式訪問時、国際交流基金は一億円分の日本語教材を中国の 37 大学の日本語学科に寄贈した（椎名 2009）。

民間団体の「中国に日本語教材を送る会（代表：横尾正信）」の役割も大きかった。「送る会」は日本全国に使用済みの書籍（小学校から高等学校までの教科書・絵本・辞典・年鑑・日本の風俗や文化を紹介した図書・料理や旅行案内書・専門書など）の寄付を呼びかけ、収集した書籍を、日中間を往来する「友好の船」や「青年の船」で郵送した。1980 年

8 月の時点で 25 万冊の発送が完了し、1985 年 6 月の時点で寄贈図書は 130 万冊に達した。届けられた書籍は、大連外国語学院を窓口として中国全土（27 省約 300 箇所）に配布された（田中 2015）。

おわりに

日中国交回復、特に日中平和友好条約の締結により日中の交流が盛んになり、日本語人材の養成が急務となった。日本語学科を設置する大学が増え、日本語学習者も急増した。しかし、当時の中国の日本語教育はまだ発展途上であった。そこで、日本による支援事業が大きな役割を果たしたが、その規模は中国の日本語教育史上例を見ないものであった。大平学校は研修事業を通して、中国における日本語教育の基礎を固め、改革開放以来の新しい日本語教育のモデルを確立した。大平学校は中国の日本語教育及び研究のリーダーを育成し、研修生たちは後に中国の日本語教育において中心的な役割を果たした。留日予備校は学部生、大学院生、訪問学者などに対する留学予備教育だけでなく、他の日本語教育機関の教員養成の機能も果たした。そして、その教授法は中国の大学における日本語教育にも大きな影響を与えている。教育委員会による日本語教師派遣は中国高等教育の日本語教育の促進に大きな役割を果たし、高く評価された。日本の社会や文化事情に精通したネイティブ教師として、国語教育のエキスパートとして活躍し、日本語教材作成にも貢献した。中国に日本語教材を送る会の活動は日本語の書籍の不足で大学の教材さえも海賊版[14]或いはガリ版が使われていた当時においては大変貴重なもので、非常に大きな役割を果たした。

改革開放直後中等教育における朝鮮族学校の日本語教育は「満州国」時代に日本語を習得した知識人らにより支えられるという特殊な時代背景の反映である。当時の中等教育における日本語教育に大きな役割を果たしている。

改革開放後の「確立期」は日中交流の深化と共に、日本からの教師派遣、機材や図書の寄贈等が活発化し、日本語教育の現場では急速に環境が充実していった時期であり、中国の日本語教育においてかつてない凄まじい発展を遂げた時期でもある。

注

1）国際交流基金(2020)『海外の日本語教育現状 2018 年度日本語教育機関調査より』

2）王岩（2012)「中国の日本語教科書に見られる日本「文化」とその変遷」『京都大学大学院人間・環境学研究科共生人間学専攻外国語教育論講座修士論文』

3）2018 年時点で、中国の高等教育、初等・中等教育、学校教育以外の学習者がそれぞれ 575,455 人、94,001 人、335,169 人である。

4）前掲国際交流基金(2020)による。

5）1970 年から 1976 年の間、工場労働者、農民、兵士の中から推薦で大学に入学し、卒業した

学生のことを指す。

6）原文は『关于加强民族教育工作的意见』

7）歴史的経緯もあり、在満朝鮮人は「満洲国国民」であると同時に「日本帝国臣民」でもあった。従って，学校教育においても「国語」としての日本語教育を受け、ネイティブに近い日本語能力を有していた。

8）1989 年から 1994 年にかけての英語と日本語の文理別平均点を比較した結果。小川(1997)p. 90

9）高等教育の学習者が 529,508 人に対して初等・中等教育の学習者は 53,955 人である。

10）大連外国語学院は創設された(1964 年)当初、日本共産党の援助を受けて、派遣されてきた日本人教師を中心に、日本語教科書編成と日本語教育を始めたが、1966 年には撤退したという（李培建 2007)。

11）「中国における日本語教育の移り変わり」（特集「日本語と中国語--語学教育を考える」）佐治 圭三，李 翠霞，顧 明耀他『中国 21』(愛知大学現代中国学会編 27) 2007-03 pp. 3-18

12）大塚豊(1986)「第 10 章日中文化交流」『中国総覧 1986 年版』霞山会 p. 474

13）長崎県中国派遣教師の会「二十五周年記念誌」編集委員会(2005)『一衣帯水～時空を超えて～』ゆるり書房

14）筆者らが大学で使った教科書は粗末な紙に印刷された海賊版の『日本語』Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ（東京外国語大学付属日本語学校編）

参考文献

王宏(1994)「1990 年中国日本語教育アンケート調査結果報告」『世界の日本語教育　日本語教育事情報告編』第 1 号、39-46 頁

王雪萍(2004)「改革開放期の中国政府派遣留学生--日本への国費派遣学部留学生を中心に」『富士ゼロックス小林節太郎記念基金 2002/2003 年度研究助成論文』、1-68 頁

王雪萍(2009)「中国留日国費学生に対する予備教育の実態調査（1979-1984）--東北師範大学における赴日学部留学生教育を中心に」『華僑華人研究』第 6 号、40-62 頁

小川佳万(1997)「中国の大学入試における「民族平等」論争--延辺朝鮮族自治州を事例として」『比較教育学研究』23 号、81-96 頁

金紅梅(2009)「中国朝鮮族学校における外国語教育の展開」『政策科学』16(2)（立命館大学政策科学会編）、51-63 頁

酒井順一郎(2012)『改革開放の申し子たち--そこに日本式教育があった』冬至書房

佐治圭三(1987)「日本語研修センターの五年」北京語言学院日語教師培訓班『記念文集日語教師培訓班的五年』国際交流基金、13-19 頁

篠崎摂子・曹大峰(2006)「中国における非母語話者日本語教師教育の展開--「大平学校」と北京日本学研究センター」『国際交流基金日本語教育紀要』2　国際交流基金編、135-140 頁

徐敏民・高野保夫(2004)「中国における日本語教育および日本研究について」『福島大学教育実践研究紀要』46、83-88 頁

蘇徳昌(1980)「中国における日本語教育」『日本語教育』第 41 号、25-38 頁

孫暁英(2018)『「大平学校」と戦後日中教育文化交流』日本華僑出版社

孫暁英(2019)「1980 年代中国国費留日大学院生に関する考察」『アジア教育』第 13 巻、93-65 頁

田中祐輔(2013)「中国の大学専攻日本語教育における「国語教育」--教育委員会中国日本語教師派遣事業から見る国語科教諭の教育実践と求められた役割」『国語科教育』74 巻、22-29 頁

田中祐輔(2015)『現代中国の日本語教育史（大学専攻教育と教科書をめぐって)』国書刊行会

平井勝利(1981)「中国便り-2-日本語“らしさ”を教えるために」『言語生活』356 筑摩書房、82-86 頁

堀口純子(2003)「中国の大学における日本語教育の最近の動向」『明海日本語』（8)、11-19 頁

松岡弘(1982)「中国赴日留学生予備学校における日本語教育」『日本語教育論集』第 9 号、97-110 頁

源元圭吾(2010)「中国における日本語教育--大連、長春の大学を事例に」『神奈川大学大学院言語と文化論集』16、83-121 頁

李培建(2007)「中国における日本語教育と日本語教材の編成及び使用について」『中央学院大学社会システム研究所紀要』 8(1)、 209-244 頁

国際交流基金(2020)『海外の日本語教育現状 2018 年度日本語教育機関調査より』

国際交流基金 - 2018 年度　海外日本語教育機関調査（jpf.go.jp）

Japanese Language Education in China’s Reform and Opening-up and Japan’s Support Activities

ZHENG,Hengkui

Abstract

Japanese education in China has developed rapidly during the period of reform and opening-up. This is due to China's reform and opening-up policy as well as the new foreign language education policy and Japan’s support activities. This paper investigates the change and development of Japanese education in colleges and universities during the period of reform and opening-up. The Japanese language education in Korean Middle Schools and Japanese support activities. OOHIRA School has consolidated the foundation of Japanese education in China and established a new Japanese education model. The preparatory school for studying in Japan not only carries out preparatory education for college students, postgraduates and visiting scholars, but also has great influence on Japanese education in Chinese colleges and universities. The Education Commission's dispatch of Japanese teachers has played an important role in promoting Japanese education in Chinese institutions of higher learning and has contributed to compiling Japanese textbooks. The

activities "Meeting of Presenting Japanese textbooks to China" was very valuable at that time when Japanese textbooks were scarce. At the beginning of reform and opening-up, Japanese education in Korean Middle School was supported by old teachers who learned Japanese during the period of "Manchu" which reflected the background of the special times, but played a great role in the Japanese teaching in secondary education at that time.

Keywords : Reform and Opening-up, Japanese Language Education, Support Activities, dispatch of Japanese teachers, Japanese textbooks

『特定技能１号 外食業技能測定試験 学習用テキスト【接客全般】』の分析
―漢字・語彙の日本語レベルを中心に―

飯嶋 美知子（北海道情報大学）

要旨

2019 年 4 月より外国人労働者を受け入れるための特定技能制度が導入された。「特定技能」1 号の在留資格を得るには日本語能力試験 N4 以上等に合格し、技能測定試験にも合格する必要がある。特定産業分野の教材は介護以外ではほとんど市販されておらず、多数の労働者の受け入れが見込まれる外食業分野の学習支援体制も未整備のままである。

外食業技能測定試験は非公開だが、日本フードサービス協会が試験に準拠した「接客全般」「飲食物調理」「衛生管理」の 3 冊の学習用テキストを公開している。学習用テキストは日本語版のほかに外国語版もあるが、試験は日本語で実施されるため受験者は学習用テキストの内容を日本語で理解する必要がある。そこで、学習用テキストの日本語レベルがどの程度かを調査することにした。本研究では専門用語が最も少ない「接客全般」の学習用テキストを調査対象とした。テキストマイニングの手法で出現頻度の高い単語を抽出し、出現頻度の上位 30 語と索引にある単語の出現頻度の上位 30 語の漢字と語彙の日本語レベルを調査したところ、いずれにも N4 を超えるレベルの単語が多数含まれていることが判明した。受験者はテキストの内容を理解するために、N4 を超える日本語能力が必要とされることになる。試験に対応するためには受験者はより高いレベルの日本語能力を身につけなければならず、受験者に対する細やかな学習支援が必要である。

キーワード： 特定技能制度、技能測定試験、外食業、日本語レベル、テキストマイニング

はじめに

2019 年 4 月より外国人労働者を受け入れるための特定技能制度が導入された。「特定技能」は介護、外食業、宿泊業等 14 の特定産業分野において、一定程度の技能を有する外国人労働者のための新たな在留資格である。「特定技能」1 号の在留資格を得るには、国際交流基金日本語基礎テストまたは日本語能力試験 N4 以上に合格するとともに、就労を希望する分野で実施される技能測定試験に合格する必要がある [1)]。出入国在留管理庁(2019)によ

ると、特定技能制度の導入開始後 5 年間に 14 分野で最大 345,150 人の受け入れが見込まれており、最多が介護の 60,000 人で、外食業はそれに次ぐ 53,000 人となっている。

特定技能制度については、田尻(2017)で外国人労働者受け入れの一連の流れと問題点が指摘されている。また、布尾(2019)では特定技能制度導入までの国会の動向が詳述されている。特定産業分野の日本語学習支援については、西郡(2020)で介護分野をめぐる日本語教育が多方面から論じられている。また、布尾・平井(2020)では外国人介護・看護労働者のキャリア形成と問題点について、インタビューの結果を踏まえて検討がなされている。外食業については、松尾(2019)のように外食業企業での日本語研修の問題点と対応に関する研究等が散見されるものの、技能測定試験に関する研究はほとんど見られない。また、特定産業分野の教材は介護分野では良質なものが数多く開発され市販されているが、それ以外ではほとんど市販されておらず、各分野の技能測定試験の主催関連団体が作成している教材があるのみである。介護に次いで多くの外国人労働者の受け入れが見込まれる外食業分野でも就労希望の外国人に対する学習支援体制は十分整備されているとはいいがたく、外食業技能測定試験の合格率は 2019 年度は 61%、2020 年度は 48%にとどまっている。

外食業技能測定試験は非公開だが、日本フードサービス協会がサンプル問題と試験に準拠した『特定技能 1 号 外食業技能測定試験 学習用テキスト【接客全般】』『特定技能 1 号 外食業技能測定試験 学習用テキスト【飲食物調理】』『特定技能 1 号 外食業技能測定試験 学習用テキスト【衛生管理】』の 3 冊をホームページで公開している。これらの学習用テキストは総ルビ付きの日本語版の他、英語版、ベトナム語版、クメール語版、ミャンマー語版があり、日本語版にのみ索引がついている。外食業技能測定試験の受験者はこれらの学習用テキストで試験の学習を進めていくことになるが、試験は日本語で実施されるため受験者は学習用テキストの内容を日本語で理解する必要がある。そこで、学習用テキストで使用されている日本語のレベルがどの程度かを調査することにした。

Ⅰ. 調査対象と調査方法

1. 調査対象

本研究では、3 分野の学習用テキストのうち『特定技能 1 号 外食業技能測定試験 学習用テキスト【接客全般】』（以下、『学習用テキスト【接客】』）を調査することとした。3 分野の中で専門用語が最も少ないため、日本語能力試験 N4 レベルの受験者が比較的取り組みやすい内容であると考えたためである。

2. 調査方法

石井・野村ほか(2018)を参考に、テキストマイニングの手法で調査対象より出現頻度の高い単語を抽出し、それらの単語が日本語能力試験のどのレベルにあたるかを調査・分析した。テキストマイニングとはテキストをコンピュータで探索する技術で、文章を単語に

分割し、それらの出現頻度や相関関係を分析することによって、有益な情報を抽出するものである。本研究では KH Coder3 を使用した。これは文章型データを統計的に分析するためのフリーソフトウェアである。

テキストマイニングの具体的な手順としては、まず、PDF で公開されている『学習用テキスト【接客】』をテキストファイルに変換した。続いて、テキストマイニングの分析を実行する際に障害となるテキストファイル中の図表、記号、感嘆符、ルビ等を削除した。その後、テキストファイルを KH Coder3 に取り込み、プログラムの指示に従ってテキストマイニングを実施した。

テキストマイニングの結果、『学習用テキスト【接客】』は 10,824 語に分割された。そのうち出現頻度の上位 30 語と、索引にある 201 の単語のうち出現頻度の上位 30 語について、国際交流基金(1994)を参考に語彙及び漢字の日本語レベルを調査した[2)]。

Ⅱ．調査結果

1．出現頻度の上位 30 語

表 1　出現頻度の上位 30 語

順位	単語	出現回数	語彙レベル	漢字レベル	順位	単語	出現回数	語彙レベル	漢字レベル
1	◇お客様	116	N5+N5	N2,3+N2,3	15	自分	18	N5	N4+N5
2	お店	58	N5	N5	17	食事	17	N4	N5+N2,3
3	する	51	N5	－	18	種類	16	N2,3	N2,3+N2,3
3	場合	51	N4	N4+N4	18	正しい	16	N4	N4
5	料理	50	N5	N4+N4	18	もつ	16	N5	－
6	対応	45	N1	N2,3+N1	21	場所	15	N4	N4+N4
7	人	38	N5	N5	21	発生	15	N1	N4+N4
8	なる	33	N5	－	21	方法	15	N2,3	N4+N2,3
9	清掃	32	N2,3	N2,3+N2,3	24	◇飲食店	14	外＋N5	N5+N5+N5
10	提供	29	N1	N1+N2,3	24	◇心	14	N4	N4
11	大切	28	N5	N5+N4	24	すぐ	14	N5	－
12	食べる	25	N5	N5	24	責任者	14	N2,3+N2,3	N2,3+N2,3+N4
13	いう	24	N5	－	24	次	14	N5	N2,3
13	できる	24	N5	－	24	必要	14	N4	N2,3+N2,3
15	確認	18	N2,3	N2,3+N2,3	30	主	13	N2,3	N4

※単語の冒頭の「◇」は索引にある単語

出現頻度の上位 30 語とその日本語レベルをまとめたものが表 1 である。日本語能力試験 N4（以下、日本語能力試験のレベルの前の「日本語能力試験」は略）を超えるレベルのものは、網掛けにしている。語彙レベルの欄の「＋」はその単語が合成語であることを示しており、例えば「飲食店（外+N5）」は「飲食」が級外、「店」が N5 であることを意味す

る[3)]。漢字レベルの欄の「＋」はその単語が 2 つ以上の漢字を含むことを示しており、例えば「大切（N5＋N4）」は「大」が N5、「切」が N4 であることを意味する。

表 1 の通り、出現頻度の上位 30 語のうち語彙レベルが N4 を超えるものは 10 語、漢字レベルが N4 を超えるものは 11 語であった。語彙または漢字のいずれかが N4 を超えるレベルのものは 14 語で、出現頻度の上位 30 語のうちの 46.7%を占めていた。そのうち索引にある単語は「お客様」と「飲食店」の 2 語のみであるため、『学習用テキスト【接客】』においては索引の単語以外にも、日本語レベルが高い単語が複数、高い頻度で使用されているということになる。『学習用テキスト【接客】』の漢字には全てルビが付いており、受験者の漢字を学ぶ負担は軽減されているといえるが、語彙レベルが N4 を超える単語には特に注意を向ける必要があると考えられる。語彙レベルが N4 を超える単語は級外の「飲食店」、N1 の「対応」「提供」「発生」、N2,3 の「清掃」「確認」「種類」「方法」「責任者」「主」の 10 語である。そのうち「対応」は 45 回、「提供」は 29 回と、出現回数も特に多かった。

2. N4 レベルを超える単語の『学習用テキスト【接客】』での使用例

本節では、使用頻度の上位 10 語のうち語彙レベルが N4 を大きく上回る N1 の「対応」と「提供」が、『学習用テキスト【接客】』でどのように使われているのかを見ていくことにする[4)]。

(1) 「対応」の使用例

①次で示すような配慮が必要なお客様が来店した場合は、「何かお手伝いしましょうか」という気持ちをもちながら対応することが大切です。

『学習用テキスト【接客】』13 頁

②どの程度配慮する必要があるか、人それぞれであるため、思い込みの対応は不要です。

『学習用テキスト【接客】』13 頁

③電話対応は、相手もこちらも、お互いの表情や様子を見ることができません。

『学習用テキスト【接客】』18 頁

「対応」は、①の「対応する」というサ行変格動詞、②の「対応」という名詞、③の「電話対応」という合成語の一部など、さまざまな形で使用されていた。全使用例 45 のうちサ行変格動詞が 17、名詞が 18、合成語の一部が 10 であった。合成語は③の「電話対応」のほか、「対応方針」「対応方法」「クレーム対応」などの例もあった。

また、それぞれの例文において、①では級外の「来店」、N1 の「配慮」、N2,3 の「示す」、②では級外の「思い込み」、N1 の「配慮」、N2,3 の「程度」「それぞれ」、③では N2,3 の「相手」「お互い」「表情」「様子」等、語彙レベルが N4 を超える単語が使用されていた。なお、①と②の「配慮」は索引にある単語である。

④間違った情報を提供すると、お客様に大変な迷惑をかける場合もありますので、問合せに対応できない場合は、お店の責任者などに対応を変わってもらいましょう。

『学習用テキスト【接客】』19 頁

⑤グループのお客様の場合には、ハンドルキーパーの方を確認します。対応が難しい場合は、お店の責任者などに対応を変わってもらいましょう。

『学習用テキスト【接客】』20 頁

⑥ベジタリアンやヴィーガンは、その人の考え方によって制限する食事が変わりますので、対応する場合は、お客様のニーズを確認することが大切です。対応が難しい場合は、お店の責任者などに対応を変わってもらいましょう。

『学習用テキスト【接客】』22 頁

④～⑥は「対応」が、「お店の責任者などに対応を変わってもらいましょう」という同一の表現中に使用されていた例である。その直前も⑤と⑥は「対応が難しい場合は」と同一の表現で、④も「問合せに対応できない場合は」と、⑤と⑥に意味的に近い内容となっている。同一の表現はこの 3 例のみであるため、受験者は暗記するなどの対応ができると思われる。

また、それぞれの例文において、④では級外の「問合せ」、N1 の「提供」、N2,3 の「間違う」「情報」「迷惑」「責任者」、⑤では級外の「ハンドルキーパー」、N2,3 の「グループ」「確認」「責任者」、⑥では級外の「ベジタリアン」「ヴィーガン」「ニーズ」、N2,3 の「制限」「責任者」等、語彙レベルが N4 を超える単語が使用されていた。なお、⑤の「ハンドルキーパー」、⑥の「ベジタリアン」と「ヴィーガン」は索引にある単語である。

(2) 「提供」の使用例

⑦どんなに美味しい料理を提供するお店でも、不潔なお店、異臭がするお店で食事をしたいと思うお客様はいません。

『学習用テキスト【接客】』3 頁

⑧車両等（車、自転車など）を運転することが分かっている人にお酒を提供することも、法律で禁止されています。

『学習用テキスト【接客】』19 頁

⑨お客様によいサービスを提供するためには、お店を営業するための準備がとても大切です。

『学習用テキスト【接客】』23 頁

「提供」は、⑦の「料理」、⑧の「お酒」、⑨の「サービス」のように、具体的な何かとともに使用されている例が多いのが特徴的であった。全使用例 29 のうち、ともに使われていた単語は「料理」が 9、「お酒」が 5、「サービス」が 4、「水」が 3、「情報」が 2、「価値」が 2、「飲み物」が 1、「タオル」が 1 であり、残り 2 例はともに使われている単語はなかった。「料理」「お酒」「水」「飲み物」など具体的な物を出す場合に使用され

ている例が多かったため、もし教室等で教師が説明する場合は、「提供する」を「出す」に置き換えて示すことも可能であろう。

また、それぞれの例文において、⑦では級外の「異臭」と N2,3 の「不潔」、⑧では級外の「車両」と N2,3 の「禁止」、⑨では N2,3 の「営業」等、語彙レベルが N4 を超える単語が使用されていた。なお、⑧の「車両」「お酒」「法律」は索引にある単語である。

3. 索引にある単語の出現頻度の上位 30 語

次に、索引にある 201 の単語の出現頻度の上位 30 語について見ていく。索引にある単語の出現頻度の上位 30 語は表 2 の通りである。N4 を超えるレベルのものは網掛けにしており、表中のレベル表示方法は表 1 と同様である。

表 2　索引にある単語の出現頻度の上位 30 語

順位	単語	出現回数	語彙レベル	漢字レベル	順位	単語	出現回数	語彙レベル	漢字レベル
1	お客様	116	N5+N5	N2,3+N2,3	15	雰囲気	9	N2,3	N1+N2,3+N5
2	飲食店	14	外＋N5	N5+N5+N5	17	笑顔	8	N2,3	N2,3+N4
3	心	14	N4	N4	18	グラス	8	N2,3	－
3	接客	12	外	N2,3+N2,3	18	クレーム	8	外	－
5	おもてなし	11	外	－	18	接客サービス	8	外+N2,3	N2,3+N2,3
6	お酒	11	N5	N2,3	21	フォーク	8	N5	－
7	かに	11	外	－	21	お辞儀	7	N2,3	N2,3+N1
8	補助犬	11	N1+N5	N2,3+N2,3+N4	21	食物アレルギー	7	N2,3＋外	N5+N4
9	満足	11	N2,3	N2,3+N5	24	テイクアウト	7	外	－
10	異物	10	外	N1+N4	24	トレイ	7	外	－
11	キャッシュレス決済	10	外＋外	N2,3+N2,3	24	箸	7	N5	N1
12	車椅子	10	N5+N5	N5+N1+N5	24	不満	7	N2,3	N4+N2,3
13	あいさつ	9	N4	－	24	マナー	7	外	－
13	ナイフ	9	N5	－	24	苦情	6	N2,3	N2,3+N2,3
15	避難	9	N1	N1+N2,3	30	ごはん	6	N5	－

表 2 の通り、索引にある単語の出現頻度の上位 30 語のうち語彙レベルが N4 を超えるものは 21 語、漢字レベルが N4 を超えるものは 16 語であった。語彙または漢字のいずれかが N4 を超えるレベルのものは 25 語で、索引にある単語の出現頻度の上位 30 語のうちの 83.3%を占めていた。

語彙レベルが N4 を超える 21 語のうち、級外の単語は「飲食店」「接客」「おもてなし」「かに」「異物」「キャッシュレス決済」「クレーム」「接客サービス」「食物アレルギー」「テイクアウト」「トレイ」「マナー」の 12 語で、索引にある単語の出現頻度の上位 30 語の 40%を占めていた。

索引の単語は元々注意を要するものとして別途取り上げられているが、日本語レベルも高いことがわかった。ただし、索引があるのは日本語版のみで、外国語版を使用して学ぶ受験者にはどの単語が注意を要するものかが判断できなくなるため問題である。

Ⅲ．まとめ

以上のことから、『学習用テキスト【接客】』には索引にある単語以外にも N4 を超えるレベルの単語が多く、文中での使用方法も複雑なものがあることが判明した。「特定技能」1 号の資格を得るには N4 以上の日本語能力が必要とされているが、そのレベルでは『学習用テキスト【接客】』の日本語を理解することは難しいと考えられる。しかし、『学習用テキスト【接客】』は外食業技能測定試験に準拠した内容であり、試験も日本語で行われるため、受験者は外国語版だけではなく、日本語版で学ぶ必要がある。教室等の授業であれば、教師がやさしい日本語に置き換えて説明するなどの工夫が必要であろう。

また、索引の単語も N4 を超えるレベルのものが多いことが判明した。索引の単語は元々注意を要する重要語として取り上げられているものだが、索引は日本語版にあるのみで外国語版にはない。索引部分の翻訳や、単語帳の作成等が必要であると考える。

なお、外食業技能測定試験については受験者の日本語レベルに配慮した内容に改めるよう、試験の主催団体である外国人食品産業技能評価機構には検討を望みたい。『学習用テキスト【接客】』は試験に準拠した内容であり、試験でも受験者が理解しにくいレベルの日本語が使用されていると推測されるからである。外食業技能測定試験は近年新たに実施が始まったばかりであるため、柔軟な対応を求めたいところである。

おわりに

今回は『学習用テキスト【接客】』のみを調査対象としたが、『特定技能 1 号 外食業技能測定試験 学習用テキスト【飲食物調理】』『特定技能 1 号 外食業技能測定試験 学習用テキスト【衛生管理】』の日本語レベルの分析も試みたい。また、語彙と漢字に加え、文法の日本語レベルの調査も必要である。そして、その分析結果を教授法、教材開発につなげることにより、外食業技能測定試験の受験者への学習支援体制を整えていきたいと考える。

注

1) 「特定技能」には 1 号と 2 号があり、「特定技能」2 号は特定産業分野で熟練した技能を有する外国人労働者のための在留資格で、日本語能力に関する試験は不要とされている。

2) 国際交流基金(1994)は旧日本語能力試験の出題基準である。しかし、現行の日本語能力試験の出題基準が公開されていないため、国際交流基金(1994)を参照することとする。旧日本語能力試験の 1 級は現行の日本語能力試験の N1、2 級は N2 または N3、3 級は N4、4 級は N5 にほぼ相当するとされているため、本研究の日本語のレベル表示もそれにしたがう。なお、

旧日本語能力試験で 2 級にあたるものは、本研究では「N2,3」と表示する。

3) 合成語を構成する各単語の語彙レベルが同一の場合は、それをその合成語の語彙レベルとする。例えば「責任者」は「責任」と「者」がいずれも N2,3 であるため、その語彙レベルは N2,3 とする。合成語を構成する各単語の語彙レベルが異なる場合は、レベルが高い方をその合成語の語彙レベルとする。例えば「飲食店」は「飲食」が級外、「店」が N5 であるが、N5 より級外の方がレベルが上であるため、語彙レベルは級外とする。

4) 『学習用テキスト【接客】』の漢字には全てルビが付いているが、本稿では削除している。また、例文中の下線は筆者が記したものである。

参考文献

石井清志・野村愛・奥村匡子・奥村恵子・加藤真美子(2018)「作業療法分野における専門日本語教育の試み--国家試験問題を対象としたテキストマイニング分析」『日本語教育方法研究会誌』24(2)、10-11 頁。

国際交流基金(1994)『日本語能力試験 出題基準〔改訂版〕』凡人社。

田尻英三(2017)「外国人労働者受け入れ施策と日本語教育」『外国人労働者受け入れと日本語教育』ひつじ書房、19-75 頁。

西郡仁朗(2020)「介護福祉の日本語教育の現状と支援者の育成--介護の日本語 Can-do ステートメントを中心に」『日本語教育』175 号、18-32 頁。

布尾勝一郎(2019)「在留資格「特定技能」創設をめぐる国会での議論」『佐賀大学全学教育機構紀要』第 7 号、117-128 頁。

布尾勝一郎・平井辰也(2020)「外国人介護・看護労働者のキャリア形成」『日本語教育』175 号、34-48 頁。

松尾仁美(2019)「外国人社員向け企業内日本語研修の実践報告--外食業企業の例」『日本語教育方法研究会誌』26(1)、2-3 頁。

出入国在留管理庁(2019)『新たな外国人材の受入れ及び共生社会実現に向けた取組』
https://www.moj.go.jp/isa/content/001335263.pdf(2021 年 9 月 10 日閲覧)。

用例出典

日本フードサービス協会(2019)『特定技能 1 号 外食業技能測定試験 学習用テキスト【接客全般】』
https://www.jfnet.or.jp/contents/gaikokujinzai/#text(2021 年 8 月 15 日閲覧)。

Analysis of Specified Skilled Worker(ⅰ) Study Materials for Skills Assessment Test for Food Service Industry "Customer Service": Focusing on the Japanese Level of Kanji and Vocabulary

IIJIMA, Michiko

Abstract

In April 2019, the specific skills system was introduced to accept foreign workers to Japan. In order to obtain the residence status of Specified Skilled Worker (ⅰ), it is necessary to pass both the Japanese Language Proficiency Test N4 or higher and the skills assessment test. Study materials in specific industrial fields are hardly commercially available except in nursing care, and the learning support system in the food service industry, which is expected to accept a large number of workers, remains undeveloped. Although the food service industry skills assessment test is not made public, the Japan Food Service Association has released three study material texts in connection with the test: "Customer Service", "Preparation of Food and Drink", and "Hygiene Controls". There are foreign language versions of the study materials in addition to the Japanese versions, but since the examination is conducted in Japanese, examinees need to understand the contents of the study materials in Japanese. We therefore decided to investigate the Japanese level of the study materials. In this study, the textbook for "Customer Service" with the least technical terms was investigated. When we extracted frequently occurring words using text mining methods and investigated the Japanese levels of kanji and vocabulary in the 30 most commonly occurring words throughout and in the 30 most frequently occurring words in the index, it was found that many were at levels above N4. Candidates therefore need to have higher than N4 Japanese language skills in order to understand the textbook. Therefore, to even attempt to answer the examination questions, examinees must first acquire a high level of Japanese language ability, making detailed and extensive learning support for candidates necessary.

Keywords: Specific skills system, skills assessment test, food service industry, Japanese level, text mining

日本語の「〔乗り物〕で」と「〔乗り物〕に乗って」の選択について

杉村 泰（名古屋大学）

要旨

本稿ではコーパス調査とアンケート調査を利用して、次のような「〔乗り物〕で」と「〔乗り物〕に乗って」の選択について考察した。

(1)　私は毎日自転車｛で/に乗って｝学校に行きます。

(2)　駅まで自転車｛で/?に乗って｝15 分ぐらいです。

その結果、後に移動動詞や所要時間を表す述語が来る場合に、基本的には「で」が選択されやすいが、①特別な乗り物に乗る場合、②交通機関を乗り継ぐ場合、③特別な移動をする場合には相対的に「に乗って」が選択されやすくなることを明らかにした。

キーワード：　乗り物、「で」、「に乗って」、移動動詞、所要時間

はじめに

本研究は日本語の「〔乗り物〕で」と「〔乗り物〕に乗って」の選択について考察したものである。例(1)の中国語は日本語で「で」にも「に乗って」にも訳せるが、普通なら「で」が使われると思われる。また、例(2)の中国語は普通は「で」を使って訳し、「に乗って」を使うと許容度が落ちると思われる。

(1) a.　我每天骑自行车去学校。

　　b.　私は毎日自転車｛で/に乗って｝学校に行きます。

(2) a.　到火　　骑自行车用十五分钟左右。

　　b.　駅まで自転車｛で/?に乗って｝15 分ぐらいです。

中国でよく使われている『新編日語（第一冊）』（第６課、第７課）や『総合日語（修訂版 第一冊）』（第 10 課）などでは、初級前半で「自転車で行く」のような表現が教えられている。しかし、中国語では“骑自行车去”と言うため、中国人日本語学習者は「自転車で」の方がいい場合にも、中国語を直訳した「自転車に乗って行く」という言い方をすることがある。例えば、国立国語研究所の「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」を見ると、次のような表現がある。いずれも「に乗って」でも間違いではないが、日本語話者

なら「で」を使いやすいと思われる。

(3)　あ普通ーバスに乗ってー学校に行きます（中国/19 歳女/综合日语/SPOT 80 点）
(4)　ここからそのーバスに乗って三時間ぐらいかかります
（中国/21 歳/女･综合日语/SPOT 85 点）

しかし、このような「で」と「に乗って」の選択については、先行研究には記述が見られない。そこで本研究ではコーパス調査とアンケート調査を利用して、両者の選択傾向の違いについて見ていくことにする。

Ⅰ．コーパス調査

まず、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（BCCWJ）を使って「〔乗り物〕で」と「〔乗り物〕に乗って」の出現数を比較する。実際に調べた乗り物は自転車、バス、電車、タクシー、車、列車、船、飛行機など様々であるが、紙幅の都合上、本稿では「自転車」「バス」「電車」の３項目の検索結果だけを見ることにする。

1. コーパス調査の概要

本研究では検索ソフト「中納言」を使って BCCWJ から「〔乗り物〕で」と「〔乗り物〕に乗って」の用例を抽出した。検索対象は「全データ」で、次の①および②の設定で短単位検索を行った。これによって出現した用例の中から「自転車」「バス」「電車」の用例を抽出した[1)]。

①前方共起１（キーから１語以内）　書字出現形が〔車／バス／電車〕
　キー（---）　書字出現形が〔で〕
②前方共起１（キーから１語以内）　書字出現形が〔に〕
　キー（---）　書字出現形が〔乗っ〕
　後方共起１（キーから１語以内）　書字出現形が〔て〕

2. コーパス調査の結果と考察

次に、上で抽出した用例を述語の違いによって分類し、「で」と「によって」の割合を調べたが、その結果を以下の表に示す。表の「(時間)」は「自転車で 20 分」のような所要時間が述語となる表現を指す。また、「来る」には「やって来る」を含む。移動動詞のうち「通う」「通学する」「登校する」「通勤する」「出勤する」は「〔通勤・通学〕類」としてまとめられるため、これらを合わせた数字が示してある。また、「で」の割合が 80%未満のものには網掛けをした。

表　「で」と「に乗って」の用例数と「で」の割合

移動手段	述語	で		に乗って		「で」の割合
自転車	行く	67		9		88.2 %
	来る	18		8		69.2 %
	帰る	11		7		61.1 %
	移動する	18		0		100.0 %
	通う	15	40	0	2	95.2 %
	通学する	11		0		
	登校する	6		1		
	通勤する	8		1		
	出勤する	0		0		
	帰宅する	18		0		100.0 %
	(時間)	21		1		95.5 %
バス	行く	88		27		76.5 %
	来る	18		5		78.3 %
	帰る	19		13		59.4 %
	移動する	33		2		94.3 %
	通う	10	25	2	5	83.3 %
	通学する	15		0		
	登校する	0		1		
	通勤する	0		0		
	出勤する	0		2		
	帰宅する	3		0		100.0 %
	(時間)	100		4		96.2 %
電車	行く	83		23		78.3 %
	来る	13		6		68.4 %
	帰る	23		1		95.8 %
	移動する	18		0		100.0 %
	通う	12	24	1	6	80.0 %
	通学する	2		2		
	登校する	1		0		
	通勤する	8		2		
	出勤する	1		1		
	帰宅する	2		0		100.0 %
	(時間)	40		1		97.6 %

この表を見ると、次のような特徴があることが分かる。

・どの場合も「に乗って」より「で」の割合の方が高い。

・全体的に「行く」「来る」「帰る」に比べ、「移動する」「〔通勤・通学〕類」「帰宅する」の方が「で」の割合が高い。

・「移動する」は「で」の割合がほぼ100%になっている。

・所要時間が述語となる場合は「で」の割合がほぼ100%になっている。

今回 BCCWJ から抽出した「〔乗り物〕{で/に乗って} ＋移動動詞」の用例を見ると、ほとんどの場合に「で」と「に乗って」が互いに置き換えられる。ただし、例(5)や例(6)のように交通手段の選択に焦点がある場合は「で」が選ばれ、例(7)や例(8)のように特に何かの乗り物に乗りこんだことに焦点がある場合は「に乗って」が選ばれる傾向が見られた。

(5)　私と娘は車、主人は自転車で行くことにしました。(Yahoo!知恵袋)
(6)　毎朝七時十分のバスで出かけ、十一時半の深夜バスで帰ってくる。(森真沙子『人生のもう一つの扉』)
(7)　みんなで都バスに乗って、いつもよりはちょっと遠くの公園へ行き、アスレチックなどを楽しんできた（Yahoo!ブログ)
(8)　裏づけが取れたのは九時三十分に大阪空港からタクシーに乗って帰宅した、という点だけでした。（有栖川有栖『本格ミステリ』）

通勤・通学の場合に「で」が使われやすいのは、交通手段の選択に焦点が置かれ、特に乗り物への乗車に焦点が置かれるわけではないためであると考えられる。ただし、例(9)のように特別な乗り物に乗ることを表す場合には「に乗って」が使われる。

(9)　若者らの間に美しいミニ　ベロ自転車に乗って出勤することが流行のように広がっており，（Yahoo!ブログ)

また、例(10)や例(11)のように交通機関を乗り継ぐ場合にも「に乗って」が使われやすいことが分かる。

(10)　飛んだのもこの１機のみ。シャトルバスに乗って移動。（Yahoo!ブログ)
(11)　何から書いていいかわからないけど、電車乗って、高速バスに乗って大阪行くところから♪（Yahoo!ブログ)

なお、述語が「移動する」の場合はほぼ「で」が使われており、「に乗って」は「シャトルバスに乗って」と「舞台あいさつ専用バスに乗って」の２例のみであった。この２例は特別な乗り物への乗車を表している。

また、「〔乗り物〕{で/に乗って} ＋所要時間」の場合、「で」を使うと単に所要時間を表すだけであるのに対し、例(12)や例(13)のように「に乗って」を使うと乗り物への乗車に焦点が当たり、所要時間かつ乗車時間の意味になる。ただし、特に乗り物への乗車に焦点が当たる場合でなければ、普通は「で」が使われている。

(12)　モンパルナスから汽車でウーダンという駅まで行き、そこから自転車に乗って二、三十分だったというが、（石田　修大『幻の美術館』）

(13)　東京駅から電車に乗って五十数分。そこから歩いて二十分（山口瞳「旦那の意見」）

Ⅱ．アンケート調査

上のコーパス調査を受けて、次は、①特別な乗り物に乗る場合、②交通機関を乗り継ぐ場合、③特別な移動をする場合には「に乗って」が選択されやすくなるという仮説を立て、日本語母語話者の「で」と「に乗って」の選択意識について見る。

1. アンケートの概要

本研究では 2021 年 10 月 5-7 日に、アンケート形式で下記のような「で」と「に乗って」の二者択一テストを実施した。被験者は日本語母語話者（大学生）95 人で、設問は全部で 22 問であった。設問の形式は以下の通りで、具体例は次の節で示す。

問　次の「で」と「に乗って」のうち、より適当だと思うものに〇を付けてください。

１．宇宙人が円盤（で／に乗って）地球にやってきた。

（中略）

22．ここから駅まで自転車（で／に乗って）20 分だ。

2. アンケートの結果と考察

まず、交通手段の違いによる「で」と「に乗って」の選択率の違いを見る。例(14)～(17)を比較すると、同じ通勤・通学の場合でも「タクシー」「自家用車」「電車」「自転車」のように日常使われる交通手段の場合は「で」の割合が 90%以上と高く、「馬」や「象」のように日本語話者にとって特殊な乗り物の場合は 40%未満と低くなっている。（例(14)～(37)のパーセンテージは「で」の選択率を示す。）

(14)　彼はタクシー（　　）通勤する。　(98.9%) ←「で」の選択率、以下同様

(15)　彼は自家用車（　　）通勤する。　(96.8%)

(16)　彼は電車（　　）学校に通う。　(94.7%)

(17)　彼は自転車（　　）学校に通う。　(93.7%)

(18)　彼は馬（　　）学校に通う。　(36.8%)

(19)　彼は象（　　）学校に通う。　(29.5%)

次に例(20)と例(21)を比較すると、同じバス通勤の場合でも「駅から」がないと「で」の割合が 98.9%と高いが、「駅から」があると「で」の割合が 69.5%と低くなる。例(21)の場合、「駅までは電車を使い、駅からはバスを使う」というように交通機関を乗り継ぐイメージがあるため、相対的に「に乗る」が選択されやすくなると考えられる。

(20)　彼はバス（　　）通勤する。　　(98.9%)
(21)　彼は駅からバス（　　）通勤する。　(69.5%)

次に例(22)と例(23)を比較すると、「学校に通う」でも「公園に行く」でも「で」の割合が 90%以上と高くなっている。これはどちらも日常的な移動であるためであると考えられる。

(22)　彼は自転車（　　）学校に通う。　　(93.7)（＝例(17)）
(23)　彼は自転車（　　）公園に行った。　(90.5%)

一方、例(24)～例(27)を比較すると、「学校に通う」→「買い物に行く」→「旅に出る」→「家出をする」のように事態実現の頻度が低くなるにつれて、「に乗って」の割合が上がっていく傾向が見られる。これはわざわざ電車に乗って行動するという乗車のイメージが強くなるためであると考えられる。上の「学校に通う」と「公園に行く」の場合も、わずかながらも「公園に行く」の方が「に乗って」の割合が高くなっている。

(24)　彼は電車（　　）学校に通う。　　(94.7%)（＝例(16)）
(25)　彼は電車（　　）買い物に行った。　(88.4%)
(26)　彼は電車（　　）旅に出た。　　(85.3%)
(27)　彼は電車（　　）家出をした。　　(71.6%)

次の例(28)と例(29)、例(30)と例(31)を比較すると、前者は調査前に予想したほど差は出なかったものの[2)]、後者は「飛行機」より「戦闘機」の方が非日常的なイメージがあるため「に乗って」の選択率が高くなっていると考えられる。

(28)　彼はタクシー（　　）犯行現場に行った。　(77.9%)
(29)　彼はバイク（　　）犯行現場に行った。　　(75.8%)
(30)　彼は飛行機（　　）ハワイに行った。　　(94.7%)
(31)　彼は戦闘機（　　）ハワイに行った。　　(56.8%)

例(32)～例(35)の「筋斗雲」や「円盤」のように特殊な乗り物の場合も、わざわざそれに乗って行動するというイメージが強くなるため、「に乗って」の選択率が高くなると考えられる。ただし、例(34)は「円盤」を人さらいの手段・道具として捉えられるため、相対的に具格を表す「で」の選択率が高くなっていると考えられる。

(32)　孫悟空が筋斗雲（　　）やってきた。　(29.5%)
(33)　孫悟空が筋斗雲（　　）空を飛んでいる。　(21.1%)
(34)　宇宙人が円盤（　　）人間をさらっていった。　(76.8%)
(35)　宇宙人が円盤（　　）地球にやってきた。　(35.8%)

最後に例(36)、例(37) を見ると、所要時間を表す場合は「で」の割合がほぼ100%となっている。

(36)　ここから駅まで自転車（　　）20分だ。　(98.9%)
(37)　ここから東京までバス（　　）２時間だ。　(95.8%)

おわりに

以上、本稿ではコーパス調査とアンケート調査を利用して、「〔乗り物〕で」と「〔乗り物〕に乗って」の選択について考察した。その結果、後に移動動詞や所要時間を表す述語が来る場合、普通は「で」が選択されやすいが、①特別な乗り物に乗る場合、②交通機関を乗り継ぐ場合、③特別な移動をする場合には相対的に「に乗って」が選択されやすくなることを明らかにした。このことから、通常は交通手段の選択に焦点が当たるため具格を表す「で」の選択率が高くなるが、特別に何かの交通手段に乗り込んで行動するということが言いたい場合には「に乗って」の選択率が高くなることが分かる。

今後は乗り物を自分で動かす場合と客として乗る場合の違い、自動運転の場合と手動運転の場合の違いなど、様々な場合を調べることにより、さらに「で」と「に乗って」の違いを分析していきたい。また、日本語母語話者と日本語学習者の選択傾向の違いを見ることにより、移動行為に対する捉え方の違いについても明らかにしていきたい。

注

1) 例えば「近鉄電車」は「電車」という要素が付いているため考察対象としたが、「山手線」や「急行」などは「電車」という要素が付いていないため考察対象とはしなかった。
2) 予想では「バイク」より「タクシー」の方が特別な感じがするため「に乗って」の割合が高くなると考えたが、被験者はどちらも同じく非日常的な事態と捉え、75%前後の数字になったものと思われる。ここは「彼」ではなく「警官」、「バイク」ではなく「白バイ」とした方

がよかったかもしれない。

参考文献

周平・陈小芬编（1993)『新编日语（第一册)』上海外语教育出版社。

彭广陆・守屋三千代（总主编）、李奇楠・押尾和美（主编）(2009)『综合日语（第一册)』(修订版）北京大学出版社。

Choice of Japanese ”〔vehicle〕*de*” and ”〔vehicle〕*ni notte*”

SUGIMURA, Yasushi

Abstract

This article discusses the choice of ”〔vehicle〕*de*” and ”〔vehicle〕*ni notte*” like (1) or (2), using corpus survey and questionnaire survey (true-false test).

(1) *Watashi wa mainichi jitensha* { *de* / *ni notte* } *gakkou ni ikimasu.*

(2) *Eki made jitensha* { *de* /?*ni notte* } 15 *fun gurai desu.*

The survey results suggested as follow: When verbs of motion or predicates which represent time required follow with these two expressions, it has a tendency to choose “〔vehicle〕*de*”, on the other hand, (1) in the case ride special vehicles, (2) in the case make one's connection with the next vehicle, (3) in the case do special move, it has a tendency to choose “〔vehicle〕*ni notte*”.

Keywords： vehicle, “*e*”, “*ni notte*”, verbs of motion, time required

為政者の歴史的演説に対する印象評価の変容と日本語能力に関する一考察
―中国人大学生を対象に―

橋本 恵子（福岡工業大学短期大学部）

要旨

本稿は、好ましいスピーチスタイルに関する参考資料の一つとして、為政者の歴史的演説を評定対象とし、中国人大学生（日本語学習者）による印象評定結果が、日本語能力によって、どのように変容するのかを明らかにするものである。本調査で使用した演説資料（音声データ）は、大隈重信の「憲政ニ於ケル輿論ノ勢力」である。

調査の結果、次の点が明らかとなった。①「好悪」「上手さ」「速さ感」「活動性」「スタイル」の内、「活動性」「スタイル」が演説の印象を左右する高い要素であること、②日本語能力が高くなるほど、「活動性」「スタイル」に対する評価が高くなること、③1 回目と 2 回目の調査平均値の結果の伸び率から、文字起こし資料を提供したことにより最もプラスの影響を受けた項目は「好悪」「スタイル」であり、マイナスの影響を受けた項目は「速さ感」であること、④調査項目 20 項目中 16 項目で、2 回目調査結果の評価が上がったのに対し、「たどたどしい―流暢な」（上手さ）、「遅い―速い」（速さ感）、「ゆったりした―スピード感のある」（速さ感）、「落ち着きのない―落ち着きのある」（速さ感）の 4 項目のみ、評価が下がったこと、⑤2 年生と 3 年生は同傾向を示し、2 回目の調査の伸び率が高かったのに対し、1 年生では、全 2 回の調査で余り傾向に変化が認められなかったこと等である。

キーワード：　演説資料、印象評価、日本語能力

はじめに

本稿は、為政者の歴史的演説に対して、日本語学科の中国人大学生がどのような印象を持つのか、また、日本語学習歴によって評価にどのような変容が生じるのかを明らかにすることを目的とした調査結果について論ずるものである。

本稿で調査に使用した歴史的演説は、大隈重信の「憲政ニ於ケル輿論ノ勢力」である。本演説は、1915（大正 4）年 3 月に、帝国議会の解散総選挙に向けて行われたものである。時の内閣総理大臣大隈重信 77 歳の時のもので、蓄音機に吹き込まれ、地方遊説の代わり

に各地に回送されたものとされる。本演説を選択した理由として、106 年前の大隈重信の声を聴くことが出来ることは貴重な体験であること、大隈重信が演説の神様とも称され、聴衆を魅了する演説に長けた人物であること、また、遊説を目的とした一般市民向けになされた演説であることが挙げられる。

Ⅰ．調査内容及び方法

調査内容及び方法、調査対象者の属性は次の通りである。今回の調査対象者である華東政法大学外語学院日語系の学生は、大学入学以前に日本語教育を受けた経験がなく、入学後に初めて日本語を学び始めた学生である。1 年生 35 名、2 年生 38 名、3 年生 30 名が調査対象者である。

実施日：2019 年 3 月 25 日
場　所：華東政法大学
科目名：日本語聴力Ⅰ
調査対象者：華東政法大学外語学院日語系 1 年生 35 名（男性 10 名、女性 25 名）
日本語習熟度：日本語学習歴 平均 0.5 年、日本語能力試験 N2 合格者 1 名
日本滞在年数：0 年

実施日：2019 年 3 月 29 日
場　所：華東政法大学
科目名：日本語聴力Ⅲ
調査対象者：華東政法大学外語学院日語系 2 年生 38 名（男性 11 名、女性 27 名）
日本語習熟度：日本語学習歴 平均 1.8 年、日本語能力試験 N1 合格者 8 名、N2 合格者 11 名、J.TEST 実用日本語検定 C レベル合格者 2 名、J.TEST 実用日本語検定 D レベル合格者 2 名、J.TEST 実用日本語検定 E レベル合格者 1 名
日本滞在年数：0 年

実施日：2019 年 3 月 25 日
場　所：華東政法大学
科目名：日本語視聴覚Ⅱ
調査対象者：華東政法大学外語学院日語系 3 年生 30 名（男性 11 名、女性 19 名）
日本語習熟度：日本語学習歴 平均 3.1 年、日本語能力試験 N1 合格者 17 名、N2 合格者 11 名、J.TEST 実用日本語検定準 A レベル合格者 2 名
日本滞在年数：0.5 年 2 名、2.5 年 1 名

調査は、同じ調査対象者に 2 回実施した。1 回目の調査は、大隈重信と本演説資料（第 12 回総選挙演説レコード）に対する簡単な説明を行った上で、「憲政ニ於ケル輿論ノ勢力」を学生に聴かせ、印象評価アンケートを実施した。

演説内では難解な用語も多用されていることから、内容理解が難しい場合もあると考え、2 回目の調査では、筆者が文字起こしした資料（音声言語の文字化と全文翻刻）を配付し、学生は内容を目で確認しながら、同演説を聴き、再度、同様の印象評価アンケートを実施した。1 回目と 2 回目の調査は時間を空けず、続けて行った。なお、2 回目の調査の際、筆者は配付資料の内容について説明は行わず、演説を聴く前に予め黙読する時間は取らなかった。

調査対象者である学生は、演説の音声データを聴いた直後に、その印象を対義語からなる形容詞 20 対（表 1 参照）を SD 法（Semantic Differential Method）[1] を用い、7 段階（1.非常に、2.かなり、3.やや、4.どちらでもない、5.やや、6.かなり、7.非常）で回答した。本調査では、数値が大きくなる程、より好ましい印象を持っていることを示す。

表 1 の評定語は、自発音声や会話等の印象評定を行っている籠宮他(2003)、鈴木他(2008)、森本他（2012）を参考に抽出したものを使用した。籠宮他（2003）の因子分析の結果、講演や会話等に影響を与える項目として、「好悪」「上手さ」「速さ感」「活動性」「スタイル」の五つの因子が抽出されている（表 2、表 3 参照)。具体的には、表 1 の評定語の内、「嫌いなー好きな」「不快なー心地よい」「感じの悪いー感じの良い」「親しみにくいー親しみやすい」は、話し方に対する感性的な価値判断を表すものとして「好悪」の項目とされている。「たどたどしいー流暢な」「話し慣れていないー話し慣れた」「しどろもどろなーなめらかな」「下手なー上手な」は、話し方の技巧的側面を捉えたものとして、「上手さ」の項目にまとめられる。「声の小さい―声の大きい」「弱々しい―力強い」「元気のない―元気のある」「消極的な―積極的な」は、話し方の力動的側面を捉えたものとして、「活動性」の項目である。「遅い―速い」「ゆったりした―スピード感のある」「のんきな―せわしげな」「落ち着きのない―落ち着きのある」は、「速さ感」の項目、「無礼な―礼儀正しい」「不真面目な―真面目な」「ぞんざいな―丁寧な」「下品な―上品な」は、「スタイル」の項目とされている（籠宮 2003：305-306)。

表 1　評定語

嫌いなー好きな、不快なー心地よい、感じの悪いー感じの良い、親しみにくいー親しみやすい、たどたどしいー流暢な、話し慣れていないー話し慣れた、しどろもどろなーなめらかな、下手なー上手な、遅いー速い、ゆったりしたースピード感のある、のんきなーせわしげな、落ち着きのあるー落ち着きのない、声の小さいー声の大きい、弱々しいー力強い、元気のないー元気のある、消極的なー積極的な、無礼なー礼儀正しい、不真面目なー真面目な、ぞんざいなー丁寧な、下品なー上品な

Ⅱ．集計結果

集計結果は、表2、表3の通りである。表2の網掛け部分は、7段階評価の内、平均値5以上のものである。また表3の薄い網掛け部分は、伸び率が1回目調査平均値と比較して2回目調査平均値が10%を超えたものを示しており、濃い網かけ部分は、2回目調査平均値がマイナスとなったものを示している。

今回の調査では、全体の傾向として、「活動性」「スタイル」が他の評定語に比べ、高い値を示していることが明らかとなった（表2参照）。また、「活動性」の1回目調査平均値は、評定語毎に、1年生4.1、4.7、4.3、4.7（平均4.5）、2年生4.2、4.8、4.5、4.7（平均4.6）、3年生4.3、5.5、5.1、5.0（平均5.0）であった。2回目調査平均値は、1年生4.4、4.8、4.5、4.8（平均4.6）、2年生4.4、5.1、5.0、5.1（平均4.9）、3年生4.6、5.8、5.4、5.6（平均5.4）であった。「スタイル」の1回目調査平均値は、1年生4.7、4.9、4.8、4.3（平均4.7）、2年生5.1、5.3、4.9、4.7（平均5.0）、3年生4.7、5.7、4.7、4.7（平均5.0）であった。2回目調査平均値は1年生5.3、5.1、5.0、4.9（平均5.1）、2年生5.3、5.4、5.3、5.2（平均5.3）、3年生5.4、6.0、5.4、5.3（平均5.5）であった。このことから、日本語能力が高くなるほど、「活動性」「スタイル」に対する評価が高くなることが分かった。

1回目調査平均値と2回目調査平均値の差が統計的に有意か確認するため、有意水準5%で両側検定のt検定を行ったところ、$p<.01$であり、調査の前後の平均値の差が有意であることが示された。

表２　調査結果平均値

	評定語	1回目調査平均値			2回目調査平均値		
		1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	3年生
好　悪	嫌いな―好きな	3.4	3.5	3.2	4.0	4.0	3.9
	不快な―心地よい	3.6	3.6	3.2	3.9	3.9	3.7
	感じの悪い―感じの良い	3.6	3.6	3.2	4.1	4.2	3.8
	親しみにくい―親しみやすい	3.7	4.1	3.1	3.8	4.1	3.4
上手さ	たどたどしい―流暢な	4.5	4.0	4.1	4.4	4.5	4.2
	話し慣れていない―話し慣れた	2.9	3.2	2.5	3.8	3.9	3.3
	しどろもどろな―なめらかな	3.9	4.1	4.2	4.2	4.5	4.6
	下手な―上手い	4.1	4.4	4.4	4.5	4.8	4.9
速さ感	遅い―速い	3.6	3.5	3.6	3.9	3.5	3.5

	ゆったりした―スピード感のある	4.0	3.9	3.9	3.9	4.0	4.1
	のんきな―せわしげな	3.8	3.6	3.4	4.3	3.9	3.6
	落ち着きのない―落ち着きのある	3.7	3.6	3.5	4.1	3.8	3.0
活動性	声の小さい―声の大きい	4.1	4.2	4.3	4.4	4.4	4.6
	弱々しい―力強い	4.7	4.8	5.5	4.8	5.1	5.8
	元気のない―元気のある	4.3	4.5	5.1	4.5	5.0	5.4
	消極的な―積極的な	4.7	4.7	5.0	4.8	5.1	5.6
スタイル	無礼な―礼儀正しい	4.7	5.1	4.7	5.3	5.3	5.4
	不真面目な―真面目な	4.9	5.3	5.7	5.1	5.4	6.0
	ぞんざいな―丁寧な	4.8	4.9	4.7	5.0	5.3	5.4
	下品な―上品な	4.3	4.7	4.7	4.9	5.2	5.3

$^{**}p<0.01$

2 回目の調査の方が、演説内容を確認しながら聴くことができるため、1 回目の調査結果よりも良い印象を示すのではないかと考え、伸び率を確認した。その結果をまとめたものが表 3 である。その結果、全 20 項目中、4 項目を除き、2 回目調査結果の平均値の方が高かったことが明らかとなった。特に、「好悪」「上手さ」「スタイル」については、10%を超える伸び率を示した。

一方で、「たどたどしい―流暢な」（上手さ）、「遅い―速い」（速さ感）、「ゆったりした―スピード感のある」（速さ感）、「落ち着きのある―落ち着きのない」（速さ感）の 4 項目の伸び率がマイナスとなった。伸び率がマイナスとなった項目では、「速さ感」に関するものが多かった。なお、1 年生だけが他学年と異なる傾向を示す等、学年による差が認められることから、日本語能力による影響が考えられる。また、当初、演説スピードは「速い」が「落ち着きがある」との印象を持っていた 3 年生が、2 回目の調査で、演説スピードが「遅く」「落ち着きがない」という印象に変わった理由についても、更に検討を加える必要がある。特に、「落ち着きのある―落ち着きのない」（速さ感）については、1 年生が大きくプラスの印象に変化したのに対し、3 年生は大きくマイナスの印象に変化している。文字起こし資料の配付により、その内容を理解できる日本語能力の有無によって、印象に変化が生じたとも推察される。

表３　１回目調査と２回目調査の平均値伸び率

	評定語	伸び率		
		１年生	２年生	３年生
好　悪	嫌いな―好きな	17.6%	12.7%	20.8%
	不快な―心地よい	8.7%	11.1%	16.7%
	感じの悪い―感じの良い	14.4%	14.5%	21.1%
	親しみにくい―親しみやすい	4.7%	0.6%	9.6%
上手さ	たどたどしい―流暢な	-1.3%	11.8%	2.4%
	話し慣れていない―話し慣れた	30.7%	24.0%	28.9%
	しどろもどろな―なめらかな	7.2%	11.7%	7.9%
	下手な―上手い	9.7%	9.6%	12.1%
速さ感	遅い―速い	8.0%	-0.7%	-1.9%
	ゆったりした―スピード感のある	-2.9%	2.0%	3.4%
	のんきな―せわしげな	11.2%	8.1%	6.9%
	落ち着きのない―落ち着きのある	10.9%	5.1%	-14.3%
活動性	声の小さい―声の大きい	6.9%	7.0%	8.6%
	弱々しい―力強い	3.7%	6.1%	6.7%
	元気のない―元気のある	3.3%	11.0%	4.5%
	消極的な―積極的な	3.0%	7.3%	10.6%
スタイル	無礼な―礼儀正しい	12.9%	5.2%	14.1%
	不真面目な―真面目な	4.1%	3.0%	4.7%
	ぞんざいな―丁寧な	4.8%	8.0%	14.2%
	下品な―上品な	13.2%	9.4%	12.7%

Ⅲ．考察

今回の調査で「好悪」「上手さ」「速さ感」「活動性」「スタイル」の内、「活動性」「スタイル」が中国人大学生にとって、弁論の印象を左右する高い要素であることが明らかとなった。また、1 回目調査の平均値と 2 回目調査の平均値の結果の伸び率から、文字起こし資料を提供したことにより最もプラスの影響を受けた項目は「好悪」「スタイル」であり、マイナスの影響を受けた項目は「速さ感」であった。更に、20 項目中 16 項目で、2 回目調査結果の方が、評価が上がったのに対し、「たどたどしい―流暢な」（上手さ）、「遅い―速い」（速さ感）、「ゆったりした―スピード感のある」（速さ感）、「落ち着きのない―落ち着きのある」（速さ感）の 4 項目のみ、評価が下がった。2 年生と 3 年生は似た傾向を示し、

2 回目の調査の伸び率が高かったのに対し、１年生では、全 2 回の調査で、余り傾向に変化が認められなかった。これは、日本語能力によって、文字起こしした配付資料の理解力が異なるため、1 年生にとっては、配付資料が演説資料（音声データ）に対する内容理解への助けとなることが余りなかったことが理由と推察される。日本語能力による印象評価結果の変容については、更なる検討が必要である。

おわりに

本稿では、中国人大学生を対象とした調査を実施し、日本語能力による印象評価結果の違いに焦点を当てた。今後の課題としては、為政者に対する印象評価の中日比較、国による好ましい演説の在り方にどのような違いがあるのかの検証、日本語能力による印象評価結果の変容に関する検討について、更に研究を進めていく予定である。

注

1）SD 法（Semantic Differential Method）とは、「良い」「悪い」「速い」「遅い」というように対となる形容詞を両極に取り、その間をスケール化したものである。イメージ調査等に利用される。言語による尺度を用い、ある概念の構造を定量的に明らかにするための実験手法として心理学や官能評価の分野等で用いられてきたが、現在では建築計画や商品開発、アンケート調査の分野においても、評価手法として広く用いられている。

参考文献

揚妻祐樹（2009)、「言語資料として見た大隈重信の演説 「憲政に於ける輿論の勢力」（１）--SP レコードと速記の紹介」『藤女子大学国文学雑誌』81、1-23 頁。

籠宮隆之・山住賢司・槙洋一・前川喜久雄（2003)、「講演音声に対する印象評定尺度の作成」『第 17 回日本音声学会全国大会予稿集』、135-140 頁。

島義高（2010)、『佐賀偉人伝-02 大隈重信』、46-49 頁。

鈴木加奈・水上悦雄・森本育代・大塚裕子・柏岡秀紀（2008)、「相互行為としてのグループディスカッションを評価する--7 つの評価項目の提案」『人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会』、29-34 頁。

橋本恵子（2012)、「日本人弁論者に対する印象評価」『東アジア日本語教育・日本文化研究学会 2012 年度国際学術大会予稿集』、75 頁。

橋本恵子（2014a)、「中国人留学生による「日本人弁論者」に対する印象評価」『中朝韓日文化比較研究叢書 日本語言文化研究第三輯（上)』、579-586 頁。

橋本恵子（2014b)、「短大生による「日本人弁論者」に対する印象評定」『日本比較文化学会第 26 回九州支部大会』。

橋本恵子（2017)、「大隈重信の演説資料の分析--「憲政ニ於ケル輿論ノ勢力」」『「東アジアにおける日本

学研究」国際フォーラム資料集』、26 頁。

橋本恵子（2018）、「肥前語話者のコード切り替え--大隈重信「憲政ニ於ケル輿論ノ勢力」の音声資料をもとに」『日本比較文化学会 2017 年度関西・中国史国・九州 3 支部合同研究会』。

橋本恵子（2018）、「大隈重信の演説資料に関する一考察」『東アジア日本学研究学会第 1 回国際シンポジウム予稿集』、71 頁。

橋本恵子（2019）、「大隈重信の演説資料の分析--「憲政ニ於ケル輿論ノ勢力」--」『言語の研究--言語学、日本語学、日本語教育学、言語コミュニケーション学からの視座』、157-166 頁、花書院。

橋本恵子・張浩帆（2020）、「中国人学生による為政者の歴史的演説に対する印象評価」『日本比較文化学会 2019 年度第 32 回九州支部大会』。

森本育代・水上悦雄・桝田直美（2012）、「日本語学習者のグループディスカッションに対する評価とその評価に影響を及ぼす会話行動--日本人大学生と留学生の印象評定の比較から」『社会言語科学会第 29 回大会発表論文集』、116-119 頁。

早稲田大学編（2016）、『大隈重信演説談話集』、262-270 頁、岩波書店。

資料

大隈重信（1915）、『憲政ニ於ケル輿論ノ勢力』、コロムビア・レコード。

Consideration on changes in the impression evaluation of historical speeches given by politician and Japanese language ability (of Chinese university students)

HASHIMOTO, Keiko

Abstract

This paper, which focuses on a politician's historical speech as a reference material of favorable speech styles, aims to clarify how the impressions of Chinese university students (Japanese language learners) change according to their Japanese language ability. The material (voice data) used in this study is the speech "Kensei ni okeru Yoron no Seiryoku" (The Power of Public Opinion in Constitutional Government) by Shigenobu Okuma.

The major findings are as follows. 1) Out of five elements (preference/skill/sense of speed/activity/style), "activity" and "style" greatly affect the Chinese college students' impressions about the speech; 2) the students evaluate "activity" and "style" more highly as their language ability increases; 3) changes in the average scores between the first and second surveys show that the most positively affected elements after the texts provided are "preference" and "style," while the most adversely affected element is "sense of speed;" 4) 16 out of 20 survey items received higher scores

in the second survey while only four items—“halting/broken–fluent” (skill), “slow–fast” (sense of speed), “slowly–speedily” (sense of speed) and “restless–calm” (sense of speed)—received lower scores; and 5) the second and third graders showed a similar tendency, with greater change in the second survey, while the first graders did not show any noticeable change between the two survey results.

Keywords： speech, impression evaluation, Japanese language ability

応答文における「けど」の言いさし表現の談話機能
―「のだ」との連接を中心に―

胡 蘇紅（中国社会科学院語言研究所）

要旨

「けど」は逆接を表す接続助詞の用法のほかに、言いさし表現の用法を持つ。これまで、「けど」と「のだ」との連接を対象とした研究はいくつかあるが、応答文における「けど」の言いさし表現にどのような機能があるのかを、「のだ」との連接の観点から考察した研究は管見の限りほとんどない。本研究は、『BTSJによる日本語話し言葉コーパス(トランスクリプト・音声)2011年版』の日本語母語話者を対象とした合計245個3149分4秒（約53時間）のファイルを用い、応答文における「けど」の言いさし表現の談話機能を、「のだ」との連接の観点から明らかにした。本研究の結論は以下の3点である。(1)「けど」の言いさし表現が出現している応答文の種類には「直接応答」、「間接応答」、「直接応答前の準備」、「応答の後ろに必要以上の情報を追加する」の4つのタイプがある。(2)「直接応答」以外の応答文では、「Yes-No」式の質問に対しても、「Open」式の質問に対しても、「のだ」が前接している件数が多い。しかし、「直接応答」における「Yes-No」式の質問に対しては「のだ」が前接していない件数が多いが、「Open」式の質問に対しては「のだ」が前接しているものが多い。(3) 応答文においては、「けど」の言いさし表現は「話題回帰」、「話題展開」、「聞き手に心理的な準備をさせる」という3つの機能を果たすことができる。

キーワード：　けど、言いさし、応答文、談話機能、のだ

はじめに

会話組織の最も基本的な単位である隣接対は、2 つの発話が行う行為のカップリングによる連鎖である（Schegloff 1968; Schegloff & Sacks 1973; 串田など 2017）。例えば、（ｉ）のような「質問－応答」は隣接対の一種である。

（ｉ）01 Noriko: Soo desu ka?
　　02 Jun:　Hai. Hanasenai desu ne.
　　03　　Hanashitai <u>kedo</u>. (Onodera 2004:65[1])

Onodera (2004:63)は、「質問―応答連鎖や議論のような談話においては、談話内の個々の発話が、その機能的な役割にどのように関連しているかを見て取ることが比較的容易で

ある。」と述べている（訳は筆者）。また、Onodera（2004）は、応答文における「けど」には、（ｉ）のように、倒置文の形で話し手の質問に対して、必要以上の情報を提供する機能があると論じている。白川（2009）によれば、「けど」は、（ｉ）のような倒置用法のほかに、（ⅱ）のように文末に生起し、いわば従属節が主節化した「言いさし」文を形成することがある。さらに、（ⅲ）のように「のだ」と共起している場合も多い（李・吉田 2002:224）。

（ⅱ）01 M03：なに、「人名 10」さんもその場にいたの?

02 M04：<いなかった<u>けど</u>>{<}。

03 M03：<あ、でも「人名 10」さん>{>}、打ち上げどこにいた?（『BTSJ』[2]）

（ⅲ）01 JBI06：場所<とか>{<},,

02 JSK06：<その>{>}人と話し合うんですか?

03 JBI06：はい、遠い<u>んですけど</u>。（『BTSJ』）

これまで、多くの研究者が「けど」の言いさし表現の機能に関して考察をしている。しかし、応答文における「けど」の言いさし表現にどのような機能があるのかを、「のだ」との連接の観点から考察した研究はまだ少ない。そこで、本研究は、『BTSJ による日本語話し言葉コーパス(トランスクリプト・音声)2011 年版』（以下『BTSJ』）の日本語母語話者を対象とした合計 245 個 3149 分 4 秒（約 53 時間）のファイルを用いて、応答文における「けど」の言いさし表現の談話機能を「のだ」との連接の観点から明らかにすることを目的にする[3]。

Ⅰ．先行研究

「けど」と「のだ」の連接を議論している代表的な研究として、野田（1995,1997）、李・吉田　（2002）が挙げられる。野田（1995,1997）は「んだけど」や「んですけど」には、終助詞的用法（本研究の「言いさし表現」に相当）があると主張している。李・吉田　（2002）は「んだ＋けど」の組み合わせは、一方では話し手の感情や気持ちを一通表し、もう一方では、それがあまり強すぎないように抑える二重的な働きを持つと主張している。しかし、上記の先行研究は応答文における言いさし表現の「けど」と「のだ」との連接および、その機能については触れていない。

そこで、自然会話のデータを用いて、応答文における「けど」の言いさし表現の談話機能を、「のだ」との連接の観点から考察する必要があると思われる。

Ⅱ．「けど」の言いさし表現が出現している応答文の種類

本章では、「けど」の言いさし表現が出現している応答文の種類、および「のだ」との連接を考察した結果について述べる。

1. 応答文の種類

本研究のデータでは、応答文における「けど」の言いさし表現の用例が合計 268 例収集できた。この 268 例の応答文の種類を分析した結果、大きく分けて「直接応答」、「間接応答」、「直接応答前の準備」、「応答の後ろに必要以上の情報を追加する」の 4 つのタイプがあることが分かった（表 1）。表 1 が示すように、「けど」の言いさし表現は「直接応答」として最も多く使われ、全体の 43%を占めている。

表 1　「けど」の言いさし表現が出現している応答文の種類

応答文の種類	用例数
直接応答	115（43%）
間接応答	57（21%）
直接応答前の準備	3（1%）
応答の後ろに必要以上の情報を追加する	93（35%）
合計	268（100%）

以下、上記の 4 種類の「けど」の言いさし表現が出現している応答文の詳細な例を確認していく。

(1)「直接応答」

「直接応答」とは、話者 B が話者 A の質問に対して直接に答えることである。例えば、（ⅳ）では、01 行目の M15 の質問「(研究の動機を）書いた？」に対して、M16 は 02 行目で「一応書いたけどな」と直接応答している。さらに、03 行目の M15 の発話内容と 02 行目の M16 の発話内容の間には逆接関係がないため、02 行目の「けど」は直接応答文における言いさし表現である。

（ⅳ）01 M15：〈軽く笑う笑い〉書いた?

02 M16：あ、一応書いた〈<u>けど</u>な〉{〈}。

03 M15：〈あー〉{〉}あー。(『BTSJ』)

(2)「間接応答」

「間接応答」とは、話者 B が話者 A の質問に対して直接に答えを述べるのではなく、ほかの言い方で婉曲に答えることである。例えば、（ⅴ）では、01 行目の JOK03 の質問「9 時に行けるのかな」に対して、JBI03 は 02 行目で直接的に行けるかどうか答えず、「なんか赤羽の西口のバスで 10 分らしいんですけど」と間接的に答え、JOK03 に JBI03 の意図を判断させている。さらに、06 行目の JBI03 の発話内容と 07 行目の JOK03 の発話内容の間には逆接関係がないため、06 行目の「けど」は間接応答文における言いさし表現である。

（ｖ）01 JOK03：《沈黙８秒》９時、９時に行けるのかな?

02 JBI03：<笑い>なんか赤羽、の,,

03 JOK03：うん。

04 JBI03：西口の,,

05 JOK03：うん。

06 JBI03：バスから、バスで10分、らしいんです<u>けど</u>,,

07 JOK03：うんー。(『BTSJ』)

(3)「直接応答前の準備」

「直接応答前の準備」とは、話者Bが話者Aの質問に対して直接に答える前に、答えに関連する内容を先に言って、話者Aに心理的準備をさせることである。例えば、（vi）では、01行目のJOK06の質問「お時間は何時なのかしら」に対して、JBI06は02行目では直ちに時間を教えることはせず、「早いんですけど」と言い、JOK06に具体的な回答に対する心理的準備をさせてから、04行目で「朝、9時から」と応答している。さらに、02行目のJBI06の発話内容と03行目のJOK06の発話内容および04行目のJBI06の発話内容には逆接関係がないため、02行目の「けど」は直接応答前の準備文としての言いさし表現である。

（vi）01 JOK06：えー、お時間は何時なのかしら?

02 JBI06：早いんです<u>けど</u>,,

03 JOK06：ええ。

04 JBI06：朝、９時から。(『BTSJ』)

(4)「応答の後ろに必要以上の情報を追加する」

「応答の後ろに必要以上の情報を追加する」とは、話者Ｂが話者Ａの質問に対して直接答えた後、必要以上の情報を追加することである。例えば、（vii）では、01 行目の JSK01 の質問「月曜日?」に対して、JBI01 は 02 行目で「月曜日の朝９時から」と直接応答した後、03 行目で「ちょっと遠いところなんだけど」という追加情報（場所）を補足している。さらに、「月曜日の朝９時から」と「ちょっと遠いところなんだけど」の位置は交換することができない。また、03 行目の JBI01 の発話内容と 04 行目の JSK01 の発話内容には逆接関係がないため、03 行目の「けど」は、必要以上の情報を追加する文における言いさし表現である。

（vii）01 JSK01：月曜日?

02 JBI01：月曜日の朝９時から、

03　　ちょっと遠いところなんだ<u>けど</u>。

04 JSK01：えっ、どこ?　(『BTSJ』)

2. 応答文における「けど」の言いさし表現と「のだ」との連接

本研究の応答文における「けど」の言いさし表現を「のだ」との連接の観点から分析した結果を表2にまとめる。表2が示すように、4つの全タイプにおいて「のだ」が前接している（＋のだ）件数（176例）が「のだ」が前接していない（－のだ）件数（92例）の約2倍である（表2太字）。さらに、興味深い点として、「直接応答」以外の応答文では、「Yes-No」式の質問に対しても、「Open」式の質問に対しても、「のだ」が前接している件数が多い。しかし、「直接応答」における「Yes-No」式の質問に対しては、「のだ」が前接していない件数が多いが、「Open」式の質問に対しては「のだ」が前接しているものが多い（表2下線部）。

具体的には、「直接応答」における「のだ」が前接していない「けど」の使用場面（49例）を分析した結果、過去に起こった事実や現在の客観的な状況に関する描写の場面で多く使われていた（34例）。Maynard(1992:585)は、「のだ」が現象をありのままに描写する文（「現象文」）では用いられないことを指摘している。例えば、(ⅱ)では、「「人名10」さんはその場にいたか」（質問）に対して、「いなかった」（過去に起こった事実）と回答し、「のだ」を用いていない。しかし、談話行為は前後の談話行為と連鎖的に行なわれる（Schegloff 2007）ため、「いなかった」のままで回答すると、コミュニケーションを円滑に進めることが難しい。そこで、(ⅱ)の「けど」は「相手に談話の進め方を委ねる」機能（永田 2001）を果たしているものと考えられる。

一方、「直接応答」以外の応答文では、話し手は自分の判断や考えなどの断定を避けるため、「のだけど」を用いると考えられる。例えば、（ⅴ）では、JBI03がJOK03の「9時に行けるのかな？」という質問に対して、「バスで10分、らしいんですけど,,」と回答している。「10分らしい」という判断が、あくまでJBI03の推測であり、それより長いあるいは短い可能性があるため、「んですけど」を用いて断定を避けていると考えられる。

表 2　応答文における「けど」の言いさし表現と「のだ」との連接

種類	質問の形式	＋のだ	－のだ	合計
直接応答	Yes-No式	16	38	54
	Open式	50	11	61
	合計	66	49	115（43%）
間接応答	Yes-No式	27	10	37
	Open式	16	4	20
	合計	43	14	57（21%）
直接応答前の準備	Yes-No式	1	0	1
	Open式	2	0	2
	合計	3	0	3（1%）

応答の後ろに必要以上の情報を追加する	Yes-No式	59	24	83
	Open式	6	4	10
	合計	65	28	93（35%）
総計		176	92	268（100%）

Ⅲ．応答文における「けど」の言いさし表現の談話機能

本章では、応答文における「けど」の言いさし表現の談話機能を考察した結果について述べる。本研究では、「けど」の言いさし表現の談話機能を考察した結果、応答文における「けど」の言いさし表現には、先行研究が指摘している「断定を避ける」（内田 2001）、「話し手の気持ち・意図を婉曲に示す」（許 2010）、「相手に談話の進め方を委ねる」（永田 2001）などの機能のほかに、「話題回帰」、「話題展開」、「聞き手に心理的な準備をさせる」機能があることが分った。以下、これらの機能の詳細な例を確認していく。

1.　「話題回帰」および「話題展開」機能について

李・吉田（2002）は、「けど」は「のだ」に後続し、「話し手の気持の強調」を和らげる効果を持つようになると論じている。本研究の用例から見ると、「けど」と「のだ」が連接して用いられる際には、話し手の態度を押しつけがましくないように聞き手に伝える用法があるのと同時に、「話題回帰」、「話題展開」の機能があると思われる。このような機能は特に「応答の後ろに必要以上の情報を追加する」段階での使用が典型的である。65例の中の48例が「応答の後ろに必要以上の情報を追加する」際に用いられるものである。

(1)「話題回帰」

「話題回帰」とは、発話の話題を元の話題に戻す機能である。（ⅲ）では、JBI06は01行目で「場所」という話題について話したいが、JSK06は02行目で「その人と話し合うんですか」と質問して、01行目のJBI06の発話に割り込んでしまう。JBI06は03行目で「はい」と直接応答した後、「遠いんですけど」という必要以上の情報を追加する形で、「場所」という元の話題に戻している。03行目の「けど」は「話題回帰」という機能を果たしていると思われる。

（ⅲ）再掲

01 JBI06：場所<とか>{<},,

02 JSK06：<その>{>}人と話し合うんですか?

03 JBI06：はい、遠い<u>んですけど</u>。（『BTSJ』）

(2)「話題展開」

「話題展開」とは、発話の話題をさらに詳しい内容に展開する機能である。（ⅷ）では、J1は01行目で「観光ですか」という質問の形で発話の話題である「観光」を提起している。J3は02行目で「そうです」と直接応答した後、03行目で「自転車で行ったんですけど」という

必要以上の情報を追加する形で話題を「観光の交通手段」に展開している。さらに、J1は04行目で「自転車」という交通手段を選んだ理由について話題を展開している。これらのことから、03行目の「けど」は「話題展開」という機能を果たしていると思われる。

（viii）　01 J1：え、観光ですか?

02 J3：そうです。

03　　なんか、自転車で行った<u>んですけど</u>＜笑い＞。

04 J1：え、なんで<笑い>?（『BTSJ』）

2.　「聞き手に心理的な準備をさせる」機能について

「聞き手に心理的な準備をさせる」機能とは、具体的な回答の前に「けど」の言いさし表現によって関連情報を提示し、聞き手に心理的な準備をさせる機能である。（vi）では、「お時間は何時なのかしら？」という質問に対して、「朝、9時から」と答える前に、「けど」によって、早いことを先に聞き手に伝え、心理的な準備させている。すなわち、02行目の「けど」は、話し手が既知情報（「朝、9時から」）への認識（「早い」）を聞き手に伝える機能を果たしていると思われる。

（vi）再掲

01 JOK06：えー、お時間は何時なのかしら?

02 JBI06：早い<u>んですけど</u>,,

03 JOK06：ええ。

04 JBI06：朝、9 時から。（『BTSJ』）

本章では、応答文における「けど」の言いさし表現の談話機能を明らかにした。

おわりに

本研究では、「けど」の言いさし表現が出現している応答文の種類、「のだ」との連接状況を明らかにした。さらに、応答文において、「けど」の言いさし表現が「のだ」と連接して用いられる際には「話題回帰」、「話題展開」、「聞き手に心理的な準備をさせる」機能を持つことを明らかにした。しかし、本研究は日本語母語話者の「けど」の言いさし表現の使用のみを対象として考察を行った。今後は、日本語学習者と日本語母語話者の「けど」の言いさし表現の使用状況に関する対照研究を行っていきたいと考える。さらに、「けど」の「聞き手に心理的な準備をさせる」機能に関しては、録音・録画のデータを用い、ピッチ、イントネーションなどの音声学的な観点、視線やジェスチャーなどの会話分析の観点などから、今後更なる考察を行っていきたいと考える。

注

1）先行研究とコーパスから例文を引用する際、行数、下線および太字などの追加を行った。

2）『BTSJ』は『BTSJによる日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト・音声）2011年版』を指す。話者記号：MがMale（男性）、JOKがJapanese Old Kotowari （日本人年長断り者）、JBIがJapanese Base Irai（日本人基盤依頼者）、JがNative Speaker（日本語母語話者）、JSK が Japanese Same-age Kotowari（日本人同齢断り者）を指す。詳細は http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj_corpus_explanation.htm を参照されたい。

3）本研究の研究対象は「のだけど」、「のですけど」、「んだけど」、「んですけど」である。「が」は書き言葉で頻繁に用いられることから、「のだが」などは本研究の研究対象外にした。

参考文献

許夏玲（2010）『意味論と語用論の接点からみる話し言葉の研究』白帝社。

串田秀也・平本毅・林誠（2017）『会話分析の入門』勁草書房。

李徳泳・吉田章子（2002）「会話における「んだ＋けど」についての一考察」『世界の日本語教育』12、223-237頁。

Maynard, S.K.（1992）“Cognitive and pragmatic messages of a syntactic choice: The case of the Japanese commentary predicate n(o) da,” Text,12（4）, pp.563-613.

永田良太（2001）「接続助詞ケドによる言いさし表現の談話展開機能」『社会言語科学』3(2)、17-26頁。

野田春美（1995）「ガとノダガ--前置きの表現」（宮島達夫・仁田義雄『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』くろしお出版）、565-572頁。

野田春美（1997）『の（だ）の機能』くろしお出版。

Onodera, Noriko Okada（2004）. Japanese Discourse Markers: Synchronic and Diachronic Discourse Analysis, Amsterdam: John Benjamins.

Schegloff, Emanuel Abraham（1968）“Sequencing in conversational openings,” American Anthropologist, 70（6）, pp.1075-1095.

Schegloff, Emanuel Abraham（2007）Sequence organization in interaction（A primer in conversation analysis 1）, Cambridge: Cambridge University Press.

Schegloff, Emanuel A. & Sacks, Harvey（1973）“Opening up closings, ” Semiotica,7, pp.289-327.

白川博之（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお出版。

内田安伊子（2001）「「けど」で終わる文についての一考察--談話機能の視点から」『日本語教育』109、40-49頁。

Discourse Functions of Utterance-final "*Kedo*" in Response Sentences: A Study on the Collocation with "*Noda*"

HU, Suhong

Abstract

As a conjunctive particle, "*kedo*" expresses the meaning of contrast. In Spoken Japanese, native speakers are often observed to end utterances with "*kedo*", the phenomenon traditionally referred to as "iisashi" (suspended clauses). So far, some researchers have considered the usage of "*nodakedo*". However, the discourse functions of utterance-final "*nodakedo*" have not received sufficient attention.

In this study, using 245 files from BTSJ Spoken Japanese Corpus, we clarified the discourse functions of utterance-final "*nodakedo*" in response sentences. The following three findings were made. (1) There are four types of response sentences in which utterance-final "*kedo*" appears: 1) direct response; 2) indirect response; 3) preparation of direct response; 4) additional information following response. (2) In direct response sentences, people tend to answer a yes-no question by using utterance-final "*kedo*" without "*noda*", while to answer an open question by using utterance-final "*kedo*" with "*noda*". (3) Finally, through analyzing the functions of utterance-final use of "*nodakedo*", we found that besides the function of speaking politely, there are other three functions which previous studies did not mention: 1) return to the main topic; 2) expand the topic; 3) let the listener have a psychological preparation of the speaker's answer.

Keywords : *kedo*, insubordination, response sentence, discourse function, *noda*

類似性に関わる判断形式
—日本語の「ヨウダ」と中国語の“好像”を中心に—

朴天弘（東京大学），宋天鴻（関西外国語大学）

要旨

本稿では、日本語の「ヨウダ」と中国語の“好像”との意味機能を見ながら、両形式における共通点に関して考察し、結論を次のようにまとめた。「ヨウダ」と“好像”は「類似性に関わる判断形式」であり、話し手が観察した「現状 P」を、それと類似した話し手が持っている BEST となる「知識 Q」を用いて説明することがその意味機能である。両形式は、＜比況＞、＜推定＞、＜婉曲＞という三つ用法において、「ヨウダ」は“好像”で訳すことができる。また、＜推定＞を表す「ヨウダ」と“好像”が用いられる際に、「いかなることであるか」というトリガーが必要である。そして、＜兆候＞と＜不確かな記憶＞という二つの用法においては、「ヨウダ」は使えないが、“好像”は使える。両形式の違いに関しては、それぞれの形式の意味拡張に深く関係していると予測されるが、通時的な研究はまた別の機会に議論したい。

キーワード：　ようだ、好像、類似性、BEST となる知識、トリガー

はじめに

本稿では、日本語の「ヨウダ」と中国語の“好像”との意味用法を見ながら、両形式における共通点に関して考察する。日本語の「ヨウダ」は中国語の“好像”と似通っている機能を持ち、(1) ～ (3) のように、＜比況＞、＜推定＞、＜婉曲＞の意味を表す場合において、「ヨウダ」は“好像”で訳すことができることが指摘されている（費燕 1995、吕叔湘 1999、呉蘭 2009、王其莉 2016 など）[1)]。

(1)（雲を見て）　＜比況＞

a. あの雲はまるでわたあめの［ようだ］[2)]。

b. 那朵云［好像］一颗棉花糖。

(2)（広い範囲で道路が濡れているのを見て）　＜推定＞

a. 雨が降った［ようだ］。

b. ［好像］下过雨了。

(3)（田中さんが図書館に行ったことを知っていて、どこにいるかを聞かれて）＜婉曲＞

a. 田中さんは図書館に行った［ようです］。

b. 田中［好像］去图书馆了。

(1) は「雲」の形を「わたあめ」の形に喩える場合である。(2) は、「道路が濡れている」のを見て、「雨が降った」と話し手が判断をする場合である。(3) は、話し手が「田中さんが図書館に行った」ことを事実として認識しているにもかかわらず、「ヨウダ」や“好像”を使う場合である。(1) ～ (3) の例は、先行研究に倣って、それぞれ＜比況＞、＜推定＞、＜婉曲＞と呼ぶが、「ヨウダ」も“好像”も同様に使えることが分かる。しかし、両形式は常に同じ機能を持っているわけではない。

(4) a.（よく覚えていないが、多分）その日は（私は）3 時に帰った［*ようだ］。

b.（よく覚えていないが、多分）那天我［好像］是三点回来的。

例えば、(4) は根拠がなく、自分の記憶を述べる（＜不確かな記憶＞）例である。(4) では、日本語の「ヨウダ」は言えないが、中国語の“好像”は使える。

これまでの研究では、日本語の「ヨウダ」や中国語の“好像”の用法を詳細に記述した研究が多い。一方、「類似性」の観点から説明を試みる研究もある。日本語の「ヨウダ」には、中村（2000）、三宅（2006）など、「類似性」という観点から各用法を統一的に説明する研究がある。中国語の“好像”に関しては、管見の限り、その各用法を「類似性」という観点から統一的に分析する研究はないが、王牧（2016）では、＜推定＞の用法はある種の「類似性」への認識を表していると述べている。「類似性」という観点は、(1) のような、＜比況＞の用法を適切に説明できると考えられる。しかし、先行研究では、「類似性」の観点から＜推定＞を表す「ヨウダ」や“好像”を分析しているものの、両形式が用いられる際に、「何と何が類似しているのか」については詳しく述べられていない。

本稿では、先行研究を踏まえた上で、日本語の「ヨウダ」を中国語の“好像”と対照し、類似性(similarity)という観点から、両形式の共通的な意味機能を説明できるかを検証し、考察する。そして、両形式の共通点を探りながらその相違点に関しても議論する。

1. 先行研究の問題点と本稿の目的

まず、日本語の「ヨウダ」に関しては、中村（2000：60）は、＜比況＞は「知覚した事物を、それと類似の事物の意味として持つ言葉で述べている」と述べ、「推量（本稿での＜推定＞）」は外形的な類似性・近さはないが、「知覚した事態と判断した事態は、前者から後者が事実であると考えられるという意味において、近接した関係にあると言える」と述べている。そして、三宅（2006）では、＜推定＞を表す「ヨウダ」を「実証的判断」

とし、「証拠からの、あるいは、証拠に基づく、推量、推論ではない」（三宅 2006：122）と定義している。また、「実証的判断と比況に共通する、ヨウダのスキーマは「類似性の表示」である。ヨウダによる実証的判断は、類似性の表示というスキーマが具体化したものである」（三宅 2006：135）と述べている。しかし、中村（2000）や三宅（2006）では、実際に知覚した事態と話し手が断定した事態の何が近いのかは詳しく述べられていない。

同様に、中国語の“好像”に関しては、王牧（2016）では、「類似性」という観点から、＜推定＞の用法を分析しているが、その主張について次のような問題点が見られる。

(5)　（教室里的灯亮着）［教室に明かりがついている］
　　教室里好像有人。［教室に誰かがいるようだ］
【王牧(2016:105)の例を一部修正　日本語訳は筆者による】

王牧（2016）では、(5) の“好像”は、話し手が観察した状況（教室に明かりがついている）と話し手が持っている知識（教室に人がいると明かりがついている）の間に存在するある種の「類似性」への認識を表していると説明している。しかし、「教室に明かりがついている」という状況が「電気を消し忘れる人がいる」という別の知識と類似しているとも考えられる。王牧（2016）の説明では、話し手が何を根拠に、「教室に明かりがついている」という状況と、「教室に人がいると明かりがついている」という知識が類似していると判断したのか、その点に関しては詳しく論じられていない。

本稿では、＜推定＞だけではなく、＜比況＞や＜婉曲＞の用法まで視野に入れた考察として、先行研究を踏まえて「類似性」という観点から「ヨウダ」と“好像”の意味機能を考察する。

2.　「類似性」の側面から見る「ヨウダ」と“好像”

まず、本稿の分析に使う用語を説明する。本稿では、「知識」は、「話し手がすでに保持している、内在している知識（経験的な知識、一般的な知識）であり、五感により知覚した、認知した情報の断片ではない。（朴 2021：39）」のような意味として使う。そして、以下の分析では、話し手が観察した状況を「現状 P」、話し手の知識を「知識 Q」と称する。

(6)（雲を見て）
　a.　あの雲はまるでわたあめの［ようだ］。
　b.　那朵云［好像］一颗棉花糖。　【(1) の再掲】
(7)（夜、田中さんの家の前を通り過ぎながら、部屋の明かりがついているのを見て）
　a. 田中さんは家にいる［ようだ］。
　b. 田中［好像］在家。

(8)（夜、散歩をしているとき、部屋の明かりがついている家を見て）

a. ??誰かがいる［ようだ］。

b. ??家里［好像］有人。

(6) は、「雲の形」を「わたあめの形」に喩えて、互いに類似していると結びつけることで「雲」のことを説明している。この＜比況＞の用法は、「類似性」の典型的な用法であると見られる。(7) は、夜、田中さんの家の前を通り過ぎながら、部屋の明かりがついているのを見て、「田中さんが家にいる」と述べる場合である。王牧（2016）の説明に従って (7) を説明すると、「部屋に明かりがついている」現状が「暗くなったら、電気をつけて生活する人がいる」という知識と類似しているという説明になる。

しかし、(8) は「観察した現状 P（明かりがついている）」と「知識 Q（暗くなったら、電気をつけて生活する人がいる）」が類似しており、(7) と同じ説明ができるはずであるが、(8) は唐突であり、不自然に思われる。これは、トリガーの不在が起因すると考えられる。(7) では、話し手は「田中さん」と知り合いの関係であり、「田中さん」の家の前を通り過ぎるとき、自然と「田中さん」に興味を持ち、部屋の明かりがついていることが何を意味するのか、つまり、「現状 P」を説明しようとするきっかけになりやすい。それに対して、(8) では、観察した「現状 P：夜、部屋の明かりがついている家があること」は日常生活でよく見られることであるがゆえに、話し手にとっては「現状 P」がいかなるものであるかと説明しようとする動機付けが弱い。そのため、(8) では「ヨウダ」も“好像”も用いられない。つまり、「ヨウダ」と“好像”が用いられる場合は、ただ現状を観察して推論するのではなく、トリガーの存在が必要である[3)]。一方、(7) では、「部屋に明かりがついている」という「現状 P」からでは、様々な可能性が考えられ、「人がいる」だけではなく、「消し忘れた」という可能性も存在する。話し手は何を根拠に、「現状 P：部屋に明かりがついている」と「知識 Q：暗くなったら、電気をつけて生活する人がいる」が類似していると判断したのかについて、次の (9) と (10) をもって説明する。

(9)（夜、田中さんの家の前を通り過ぎながら、部屋の明かりがついているのを見て）

a. ??田中さんは電気を消し忘れた［ようだ］。

b. ??田中［好像］忘记关灯了。

(10)（田中さんが出かけていることを知っている。夜、田中さんの家の前を通り過ぎながら、部屋の明かりがついているのを見て）

a. 田中さんはまた電気を消し忘れた［ようだ］。

b. 田中［好像］又忘记关灯了。

(9) の場合、「現状 P（明かりがついている）」と「田中さんは電気を消し忘れてつけ

っぱなしにすることが多い」という「知識Q」が類似していると説明するには、「ヨウダ」や“好像”の使用は不自然である。「現状P:明かりがついている」に関わる話し手の知識には、「人が家にいる」、「電気を消し忘れた」、「留守中の防犯対策」などが挙げられる。したがって、「ヨウダ」や“好像”が使われる場合は、単に話し手が観察した状況と知識を結びつけるだけではなく、(10) のような「現状P」に関して、当該の「現状P」と関連性の一番高い話し手の知識（本稿では、この知識のことを「BESTとなる知識」と称する。）が結び付けられることである。(9) では、田中さんが出かけているという前提がなく、ただ田中さんの部屋の明かりがついているという現状を見ただけでは、「電気を消し忘れた」などの知識まで連想されにくく、「ヨウダ」も“好像”も用いられない。しかし、(10) のように、「田中さんが出かけている」ということを知っており、その前提においては、「田中さんは電気を消し忘れてつけっぱなしにすることが多い」という「知識 Q」が「BEST となる知識」として選ばれ、それを用いて、「田中さんの部屋の明かりがついている」という現状Pを説明することができ、「ヨウダ」も“好像”も用いられる。続いて、次の (11) と (12) を参照されたい。

(11) (広い範囲で道路が濡れているのを見て)

a. 雨が降った［ようだ］。

b. ［好像］下过雨了。　【(2) の再掲】

(12) (最近、道路清掃が頻繁に行われていることを知っている。道路の一部が濡れているのを見て)

a. 散水車が通った［ようだ］。

b. 洒水车［好像］来过了。

(11) と (12) では、「普段乾いている道路が濡れている」のを見て、「これはいかなることだろうか」という疑問が生じやすい（トリガーが存在する）。(11) では、「広い範囲で道路が濡れている」という「現状P」は「雨が降れば道路が濡れる」という「知識Q」と類似していると捉えられやすく[4]、(12) では、「最近道路清掃が頻繁に行われていること」を合わせて考えると、「道路の一部が濡れている」という「現状P」は、「散水車が通った後は道路が濡れる」という「知識Q」と類似していると捉えられている。それぞれ「雨が降れば道路が濡れる」や「散水車が通った後は道路が濡れる」という知識が「BESTとなる知識」として選出されているわけである。

このように、「ヨウダ」や“好像”は、「現状P」と「BESTとなる知識」が類似していることを表すと主張したい。これは、＜比況＞の場合にも言える。例えば、(1)では、雲の形と似ている候補の中では他でもなく、「わたあめ」が似ていると捉えているのである。したがって、「ヨウダ」と“好像”は、「現状P」が「知識Q」の中での「BESTとなる知識」

と類似していることを説明する際に用いる形式であると考えられる[5)]。

次は、＜婉曲＞と「類似性判断」との関連性について考える。

(13)（田中さんが図書館に行ったことを知っていて、どこにいるかを聞かれて）

a. 田中さんは図書館に行った［ようです］。

b. 田中［好像］去图书馆了。　【(3) の再掲】

(13) では、「田中さんが図書館に行ったこと」をそのまま述べず、類似性という概念を用いて「答え」が「事実」と似ている、つまり、事実を事実ではないかのように捉えることで否定される余地を持たせ、語用論的用法として＜婉曲＞の意味が生まれるのではないかと考えられる。

3. 「ヨウダ」と“好像”の対照―置き換えられない場合

2 節では、日本語の「ヨウダ」を中国語の“好像”に訳せる例を中心に考察した。しかし、両形式は常に同じ機能を持っているわけではない。(14) と (15) を参照されたい。

(14) a.（雨が降る直前の空模様を見て）雨が降る［*ようだ］。

b.（雨が降る直前の空模様を見て）雨が降り［そうだ］。

c.（雨が降る直前の空模様を見て）［好像］要下雨了。

(15) a.（よく覚えていないが、多分）その日は（私は）3 時に帰った［*ようだ］。

b.（よく覚えていないが、多分）那天我［好像］是三点回来的。　【(4) の再掲】

(14b) の「ソウダ」と (14c) の“好像”は雨が降る直前の様子(＜兆候＞)、(15b) の“好像”は話し手の＜不確かな記憶＞を表している。(14a) と (15a) のように、＜兆候＞と＜不確かな記憶＞という二つの用法においては、「ヨウダ」は“好像”に訳せないことが分かる[6)]。(14c) の“好像”は、「雨が降る直前の様子」と「雨が降る」という二つの物事が時間的な近接関係を表している。動詞の“好像”は二つの物事が類似していることを表す。二つの物事が類似しているというのは、その二つの物事の間に何らかの側面において近い関係を持っているというようにも解釈できる。＜兆候＞を表す副詞の“好像”は、「近接関係」という側面において動詞の“好像”から拡張された用法ではないかと考えられる。(15b) の“好像”に関しては、「二つの物事が類似している」ということは、その二つの物事が完全に一致しないということを意味しており、そこから物事に対して議論される余地が残され、動詞の“好像”から「不確かさ」を表す副詞の用法まで拡張されたのではないかと考えられる。しかし、「ヨウダ」にはそのような拡張が見られず、(14a) と (15a) のように＜兆候＞や＜不確かな記憶＞の用法としては使えない。

おわりに

本稿では、「類似性」に基づいて日本語の「ヨウダ」と中国語の“好像”の意味機能を考察した。「ヨウダ」と“好像”は、話し手が観察した「現状 P」が、話し手が持っているBEST となる「知識 Q」と類似していることを説明する際に用いる形式である。両形式は、＜比況＞、＜推定＞、＜婉曲＞という三つ用法において、「ヨウダ」は“好像”で訳すことができる。しかし、＜兆候＞と＜不確かな記憶＞という二つの用法においては、「ヨウダ」は使えないが、“好像”は使える。両形式の違いに関しては、それぞれの形式の意味拡張に深く関係していると予測されるが、通時的な研究はまた別の機会に議論したい。

注

1) ＜比況＞を表す“好像”は動詞であり、＜推定＞＜婉曲＞を表す“好像”は副詞である。

2) 本稿で使う日本語と中国語の用例は、筆者の作例であるが、日本語と中国語の用例の誤用などの判断は、それぞれ 3 名のネイティブチェックを受けている。そして、本稿では、非文の場合は「*」、非文ではないが、不自然が感じられる文は「??」で表す。

3) 村の人が全員引っ越したことを知っているが、ある知らない誰かの家に明かりがついているとき、「誰かがいるようだ」や「好像有人」が言える。そのような状況においては、(7) の「田中さんの事例」と同様に、観察した「現状 P：家の明かりがついていること」は「いかがなものなのか」を説明しようとする動機付けが強くなる。つまり、トリガーが存在することから「ヨウダ」も“好像”も使える。

4) 「ヨウダ」を説明する際に、その因果関係から説明をする研究（C.Davis & H.Yurie 2014）もある。つまり、「雨が降ったこと」と「道路が濡れていること」は「因果関係」にあるとも解釈できる。確かに雨が降ることが原因で、必然的に道路が濡れるという結果が生じるため、「ヨウダ」は「原因」を推論することを表す表現のように見える。しかし、(7) では、人がいることが原因で、部屋の電気がついているという結果が生じるという論理的解釈が常に成立するわけではない。(7) では、「ヨウダ」と“好像”はあくまでも、観察した現状やそれに関連することを合わせて、「現状 P：部屋に明かりがついている」が、「BEST となる知識 Q：暗くなったら、電気をつけて生活する人がいる」と類似していると判断しただけである。同様に、(11) も、「ヨウダ」と“好像”は「現状 P：広い範囲で道路が濡れていること」は、「BEST となる知識 Q：雨が降れば道路が濡れる」と類似していると分析できる。したがって、「ヨウダ」と“好像”は「原因」を推論することを表す形式というより、「BEST となる知識」を用いて現状を説明するための、「類似性判断」に関わる形式と主張する。ただし、（11）のような「知識 Q：(雨が降れば）道路が濡れる」には、因果的関係が読み取れやすい場合もあるが、本稿ではあくまで副次的なものとして考える。

5) ＜推定＞を表す「ヨウダ」と“好像”が、「現状 P が知識 Q と類似している」と説明するためには、「いかなることであるか」というトリガー(動機付け）が必要である。しかし、＜比

況＞を表す「ヨウダ」と“好像”は、描写性が強いため、トリガーを必要としない。

6）「黒雲が空一面に広がっているのを見て、今から時間をおいてから雨が降る」と推測する場合や「自分の行動履歴が確認できる何かの資料を見ながら発話する」という場合には、「雨が降るようだ」と「3 時に帰ったようだ」が使える。

参考文献

王其莉（2016）、『判断のモダリティに関する日中対照研究』 ひつじ書房。

王牧（2016）、「現代漢語或然語気副詞的示証性角度考察--以“大概、恐怕、好像”等為対象」『現代中国語研究』18、99-110 頁。

呉蘭（2009）、『証拠性表現の日中対照研究--「ヨウダ」、「ラシイ」、「（シ）ソウダ」を中心に』東北大学修士学位論文。

中村亘（2000）、「「ようだ」「らしい」「そうだ」をめぐって--事態の捉え方の違いという視点から」『早稲田日本語研究』8、62-51 頁。

朴天弘（2021）、『現代日本語の「ハズダ」の研究』ひつじ書房。

費燕（1995）、「日本語の「ようだ」「みたいだ」「らしい」「そうだ」と中国語の「好象」」『大妻女子大学大学院文学研究科論集』5、87-108 頁。

三宅知宏（2006）、「「実証的判断」が表される諸形式--ヨウダ・ラシイをめぐって」（益岡隆志・野田尚史・森山卓郎『日本語文法の新地平 2--文論編』くろしお出版）、119-136 頁。

吕叔湘（1999）、『現代漢語八百詞(増訂版)』商務印書館。

Christopher Davis, Yurie Hara (2014), “Evidentiality as a Causal Relation: A Case Study from Japanese youda” Empirical Issues in Syntax and Semantics,10, pp.179-196.

A Study of “*youda*” in Japanese and “*haoxiang*" in Chinese with a Focus on Similarity

PARK, Chunhong, SONG, Tianhong

Abstract

This paper aims to analyze the semantic functions of "*youda*" in Japanese and "*haoxiang*" in Chinese. We considered the commonalities between the two forms and summarized the conclusions as follows. "*youda*" and "*haoxiang*" are "forms related to similarity" and the primary semantic function is to link the "current situation P" observed by the speaker with using the "BEST knowledge Q" possessed by the speaker. In both forms, "*youda*" can be translated as "*haoxiang*" in the three usages of <*hikyou* (similitude)>, <*suitei* (estimation)>, and <*enkyoku* (euphemism)>. In addition, we propose that the use of "*youda*" and "*haoxiang*" require sufficient triggers for someone

to take his/her knowledge as a basis to make a judgment on a certain state of affairs or event at the time of the utterance. And, in the two usages of <*tyoukou* (symptom)> and <*hutashikana kioku* (uncertain memories)>, "*youda*" cannot be used, but "*haoxiang*" can be used. The difference between the two forms is expected to be deeply related to the semantic expansion of each form, but diachronic studies will be discussed at another time.

Keywords： *youda*, *haoxiang*, Similarity, Best-Knowledge, trigger

句を包摂する接辞性字音形態素「系」について

連 菁（北京外国語大学北京日本学研究センター大学院生）

要旨

接辞性字音形態素は普通、形態素ないし語を対象とする語彙的な接辞要素として語構成に出現する。しかし、単独で自立することができない字音形態素には、その前接部分が句の単位にまで拡大する現象がしばしば見られる。本稿では、現代日本語において、句を包摂する接辞性字音形態素「系」を取り上げる。『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』を利用し、実際の用例を分析することによって、その形態的特徴および意味的特徴を明らかにすることを試みた。

その結果、「系」の前接要素には名詞句、動詞句、文相当句等があり、バラエティーが見られた。また、使用環境から見ると、「（語句形態）系」は名詞相当用法、連体修飾用法、述部となる用法を持つことがわかった。最後、このような句を包摂する新奇な用法は、電子メディアの言語活動に使われやすく、理解可能な「名付け」、または語用論的「あいまい化」、という表現効果があることを指摘した。

キーワード：　接辞性字音形態素、「X 系」、包摂、表現効果

はじめに

「接辞性字音形態素」は造語において、接辞的に使用され、他の形態素と結合して語の前接成分か後接成分となる字音形態素である。接辞性字音形態素はこれまで、日本語の語構成研究において重要な課題とされており、多くの研究が行われてきた（野村 1978、山下 2013 等）。本稿では研究対象として、その中から「系」を取り上げる。

「系」は元々「太陽系」「理科系」等のように、「お互いに関連を持ったりする多数のものからなるひとまとまり」を意味しているが、現在は「癒し系」「草食系」「猫系」のように、属性を表す新語をたくさん構成して使われている。一方、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ と略す）では、語レベルを超えた句や文を包摂する実例も観察される [1)]。本稿では、このような新奇な用法を「（語句形態）系」と呼ぶ。以下に例文を示す。

（1）友人の旦那は、普通の人なんだけど、<u>見た目が凄く、怖い人系</u>なので（以下省略）（Yahoo！知恵袋）

(2) ムカついたので林の中にあるという廃屋を探してみましたが見つかりませんでした…たぶん、見つけたら二度と戻って来れない系？　（Yahoo!ブログ）

(3) こんな田舎の幼稚園でもモンスターペアレントが出現するんでしょうか。「うちの子が一番じゃないと困るんです！」系？（Yahoo!ブログ）

接辞性字音形態素は、形態素ないし語を対象とする語彙的な接辞要素として語構成に出現するのが通常である。では、「系」は句や文とも結合できるのはどのように解釈すればよいだろうか。本稿は、この問題意識から出発し、(1)（2）(3）を代表としての「系」の新用法を、その形態的特徴と意味的特徴という 2 点から分析し、句を包摂する接辞性字音形態素「系」の使用実態を明らかにすることを目的とする。

Ⅰ．先行研究の検討

「系」は比較的に新しい研究対象であるが、様々な立場から分析されている。例えば、飯田（2009）と中島（2010）では語用論的な観点から考察されており、山下（2013，2015）では形態論及び意味論の観点から考察されており、滑川（2016）では通時的に考察されている。

その中で、飯田（2009）は若者の間で多用される「頑張る系？」等の表現は、断定を和らげソフトな言い方になると共に、集団の中に身を置くことで孤立を避ける配慮表現と捉えている。中島（2010）では、引用句相当の語基に後接する「系」は「ているような」等の曖昧表現に連なるものとしている。「系」に前接する要素の拡大状況について初めて指摘した文献として示唆に富むが、中島（2010）は十分な量の実例データに基づいた調査結果とは言えない。また、山下(2013)では、句や文に後接する「系」は「文法的機能」を果たしているのかを検討することは興味深い課題であると認めており、山下（2015）では、句を包摂する接辞としての「系」の用法に少し触れている。しかし、このような新奇な用法はどのような場合に用いられるのか、なぜ用いられるのか、ということはまだ不明のままである。

以上のことから、句を包摂する「系」に関する考察を論じる余地が十分残されていると考えられるだろう。もう少し具体的に言えば、「(語句形態）系」について、その前部要素となるものの形態的な特徴について究明する必要がある。そのうえで、当該の用法はどのような文脈で用いられ、それを用いることで話者が何を表現しようとしているのかということに着目しながら、その意味的な特徴について明らかにするということも期待される。

また、研究方法として、本稿では BCCWJ で「系」を後接成分とする例を検索する。その中から句を包摂するものを抽出し、研究対象とする。まず、形態論と統語論の観点から「系」の前接要素と「（語句形態）系」その全体の用法を考察する。また、語用論のアプローチから、句を包摂した「系」の造語の動機や表現効果について検討することを試みる。

Ⅱ.「系」に前接する句の特徴

BCCWJ では、「（語句形態）系」は 30 例が見られる。「系」の前接要素に着目した場合、句には統語的に差異があることが明らかとなった。その結果を表 1 にまとめる。

表 1　「（語句形態）系」の前接要素

前接要素	用例	延べ語数
①名詞句	「怖い特集」系、「野菜の裏ごし」系、浮く物系、ローカロリーなおやつ系、鯛焼き等が食べられるおやつ系、見た目が凄く、怖い人系	5
②動詞句	何かを考える系、垣根の向こうに行っちゃった系、S に行って勘違いしちゃった系、1 週間手間いらず系、身につける系、歯を白くする系、由緒のはっきりしない得体の知れない系、あまり TV に出ない系、美少女戦士つかまっちゃった系、～に行くと別れる系、見つけたら二度と戻って来れない系	12
③文相当句	おめでとうございます系、混雑しています系、“音楽やってます！”系、「採用してください」系、“お兄ちゃんやめて！”系、「ショーシャンクの空に」系、「電車で GO」系、「ヴァーン！」系、「片付けられない」系、「うちの子が一番じゃないと困るんです！」系	10
④その他	あり得ない系、別フレ別マ系	3
総計		30

①名詞句は核である名詞に連体修飾要素を加えることによって形成されるものである。その中、「『怖い特集』系、『野菜の裏ごし』系」のような、「［連体修飾語＋名詞］＋系」というパターンで構成し、明らかな「名詞句＋系」であるものがある。一方、「浮く物系、ローカロリーなおやつ系、鯛焼き等が食べられるおやつ系、見た目が凄く怖い人系」等のように、「連体修飾語＋名詞」が一つの結合体として「系」に接続するか、連体修飾語が「名詞＋系」という臨時的に形成された複合語につくかが明確ではないので、「名詞句＋系」であるかどうか、それほど明らかに区別しやすくない例も見られる。しかし、「物系」や「おやつ系」、「人系」は普通、あまり言わないので、筆者はそれらを「名詞句＋系」と見なす。

②動詞句は連体形である動詞を核とし、基本的に格助詞を含むものである。単独で述語を持つ文になれるので、青木（2016:410）では「述語句」と呼ばれる。よって、「系」の前部要素はさらに「格助詞を含んだ述語句へと拡張している」といえよう。

③文相当句は文に相当する単位である。文末表現はます形や、命令形・感嘆符（「！」）といったモダリティ表現を含むものがあり、引用文に用いられる「」“”で囲まれた文相当の形態や、雑誌等のタイトルの表記に用いられるものもある。

Ⅲ．句を包摂する「系」の用法

本節では、句を包摂した合成語の使用環境、つまり「（語句形態）系」の文中における位置を分析し、「系」の用法を考察する。表 2 はその結果をまとめて示すものである。

表 2　「（語句形態）系」の使用環境

使用環境	用例	延べ語数
①単独で使用する	「～に行くと別れる」系、美少女戦士つかまっちゃった系	2
②複合語の一部を構成する	ローカロリーなおやつ系食品、鯛焼き等が食べられるおやつ系屋台	2
③格助詞をとり名詞句となる	何かを考える系多し、１週間手間いらず系を（後略）、身につける系は（後略）、１週間手間いらず系は（後略）、「ヴァーン！」系で（後略）、あまり TV に出ない系が（後略）	6
④「の」を伴い名詞を修飾する	「電車で GO」系のゲーム、「垣根の向こうに行っちゃった系」の政党、「ショーシャンクの空に」系の刑務所の映画、“音楽やってます！”系の人、あり得ない系のアクション映画、「片付けられない」系の親御さん、「怖い特集」系の収録、「採用してください」系のメール、“お兄ちゃんやめて！”系のホモ漫画、由緒のはっきりしない得体の知れない系のもの、別フレ別マ系の「学園恋愛系」、「野菜の裏ごし」系のメニュー、おめでとうございます系の話題、混雑しています系の画面、浮く物系のゴミ	15
⑤文が完結し、述語句となる	S に行って勘違いしちゃった系！？、歯を白くする系だと（後略）、見た目が凄く、怖い人系なので（後略）、見つけたら二度と戻って来れない系？、「うちの子が一番じゃないと困るんです！」系？	5
総計		30

表 2 で示すように、①類と②類の用例はいずれも少数と言えるが、①単独で使用するものは、他の言語単位と結合せずに、そのままタイトルで使用されている。一方、②複合語の一部を構成するものは「X系 N」という形で現れ、接辞性字音形態素「系」を含む単位がさらに大きな結合単位の部分となっている。また、③はより典型的な「〇〇系」に近く、名詞的な性格を持って格助詞をとることができる。つまり、名詞相当用法を持つものである。それに対して、④「の」を伴い名詞を修飾するものは連体修飾語に相当する機能を果たしており、②と同様に後接の名詞の属性を規定している。最後、⑤文が完結し、述語句

となるものは言い切りの形を取って述部用法を持つものである。

従って、以下では句を包摂する「(語句形態) 系」の用法を名詞相当用法、連体修飾用法、述部用法に分けて考察を進めていく。

1. 名詞相当用法

「(語句形態) 系」は典型的な「〇〇系」と同じ名詞的な性格を持ち、格助詞をとり名詞句となることができる。しかし、その際、両者の意味用法は同じとは言えない。

(4) ジャンプ（夢物語系多し）とマガジン（何かを考える系多し）のどちらが多いかと言われたら、学生向けのジャンプの方が売り上げは、多いでしょうね。(Yahoo!知恵袋)

(5) あまりＴＶに出ない系、アングラ系が好きな人は、メジャーなランクイン系を嫌うような気がするのです。(Yahoo!知恵袋)

(6) １週間手間いらず系・お茶の猫砂・炭の猫砂・オカラサンドを利用しています。(Yahoo!ブログ)

「系」は、例 (4) において「～タイプの雑誌」と意味し、(5) では「～タイプの曲」、(6) では「～タイプのもの」という意味を表す。いずれも格助詞を伴い、最も名詞らしい用法であるが、「太陽系」「文科系」に代表される「〇〇系」とは大きく違う。多数のものからなるシステムを指す意味はほとんどなくなり、ただ認識対象であるヒトやモノの特徴を前景化し、その属性を述べている。

2. 連体修飾用法

「語句形態＋系」のほとんどは「の」をとり、名詞を修飾する、連体修飾語となる。

(7) 流木は浮く物系のゴミと寄り合って、まるでゴミの集積所のよう。(『ビーチコーミング学』2005)

(8) 「片付けられない」系の親御さんには、イイ言い訳になりそうだけど。(Yahoo!ブログ)

(9) 企業から結果待ちの間、企業へ「採用してください」系のメールを送ることは有効であると思いますか？ (Yahoo!知恵袋)

前接部分の形態的特徴から見ると、例 (7) ～ (9) はそれぞれ名詞句、動詞句、文相当句であり、バラエティーが見られる。しかし、後接成分との意味的関係から考えれば、いずれも「どのような」という側面から後接する名詞の属性を叙述し、名詞のタイプを限定

している。こういった点は派生語「〇〇系」にも見られ、名詞と接点を持ちながら「第三形容詞」を作る特性である（村木 2012:200）。

3. 述部となる用法

「(語句形態) 系」は「だ」を伴ったり文末に現れたりして述語句にもなる。冒頭の例 (1) ～ (3) はその例である。

このとき、「系」は認識された対象の属性を提示し、時には語用論的な機能を果たしている。例えば、(1) では、「見た目が凄く、怖い人系」は「YはX系だ」という名詞文の述語となり、Yの属性を述べるものである。ただし、「見た目が凄く、怖い人」というだけでも友人の旦那の特徴を表せるが、あえて「系」をつけてカテゴリー名とするのは、語用論的な効果があると考えられ、次節で説明していく。また、(2) (3) において、「(語句形態) 系」は明示的な「だ」を伴っていないが、疑問符「？」と共起し文を完結させ、述部となる。

Ⅳ. 語用論から見る「(語句形態) 系」の表現効果

本論で考察した句を包摂する「系」は BCCWJ から抽出されたものであるが、レジスターからみれば、上記の例は殆ど知恵袋、ブログ、雑誌等の出典である。知恵袋、ブログ、雑誌では、対話式の口語体の「です」体や話し言葉が多用されている。それを考えると、「系」は従来、字音形態素として漢語を構成し、書き言葉的に硬い印象を与えているが、現在では「(語句形態) 系」という形で多用され、よりくだけた文体的特徴を持つようになった。

では、このような俗語的な「系」によって、話者が何を表現しようとしているのか。ここでは、句を包摂する「系」の意味用法を「(語句形態) 系」の全体の表現効果によって大きく二分類する。一つ目は「名付け」の用法であり、もう一つは語用論的用法である。

1. 「名付け」の用法

一つ目は、「系」の一般的な用法の範囲内のものと見なされ、「系」を省略することのできないものである。

例 (3) ～ (6) のように、「『うちの子が一番じゃないと困るんです！』系」「何かを考える系」「あまり TV に出ない系」「１週間手間いらず系」は「系」によってある種の言動・内容・行動・特性からヒトやモノをパタン化したものである。つまり、語基を表す属性を持つ対象をグループ分けすることを通して把握し、それに対して「名付け」を行う。

しかし、一般的な造語の動機には、表現の短縮化傾向がよく見られる。「(語句形態) 系」は逆に、説明的で長い語句を前接要素とするのはなぜだろうか。中島 (2010 : 162) ではこういう言語現象には、「表現を構築するプロセスの簡略化」という動機があり、「別のレベ

ルで短縮化が働いている」としている。つまり、表現自体を短くすることではなく、明確な描写を試みる、という表現を構築するプロセスの簡略化である。

例えば、例（3）では、幼稚園の親の極端な言動を表現しようとするが、「モンスターペアレント」という新語は百科事典的知識の持たない聴者に理解されない一方、他の既存の語彙では的確に言い表せない。この場合、「系」の使用によって臨時的に対象に対し、いわゆる「名付け」を行うことで概念化する。「系」に前接する発話内容が実際に発言されたものかどうかについては不問であり、発話内容を引用形態で「系」に前接させることによって、聴者がその人物のイメージを想起しやすくなるという意味用法上の特徴を有する。

よって、ブログ等の電子メディアのように、不特定多数の読者が見込まれ、読者の意識を惹きつけようとする場合、理解に難しい新語や長い描写をする代わりに、「(語句形態）系」が用いられる。それは話者同士が共有する簡易な表現を並べることによって、多くを連想させるメトニミー（換喩）として表現する効果があるからであると考えられる。

2. 語用論的用法

二つ目は、「系」の意味を逸脱した、一般的な用法の範囲外に位置付けられるものである。この用法の下で作られた「(語句形態）系」は、述部となることが多く、「系」がなくても十分意味が通じる。これはさらに二つに分けることができる。

まず、例（1）のように、他人に対する評価に付ける「系」である。この種の「系」は従来の用法の「システム」とは区別されており、配慮表現としての機能を果たす。例えば、例（1）では、「見た目が凄く、怖い人」と言うだけでも友人の旦那の特徴を表せるが、あえて「系」をつけてカテゴリー名とするのは、「友人の旦那は見た目が凄く、怖い人だ」とストレートに言わない分、和らげた言い回しになるからである。即ち、「見た目が凄く、怖い」人間は他にもおり、友人の旦那さんはその中の一人にすぎないという語感が出て友人の旦那さんへの攻撃力を弱めることができる。飯田（2009）で挙げられた「まじ、いらない系だよ」や「もしかして、日本語弱い系」の例もこの用法として認められる。

つまり、この場合は直接的に「見た目が凄く、怖い人」「いらない」「日本語弱い」と言うことを避け、遠まわしに相手に対する否定的評価を伝えることで、他者への非難を最小限にしているということである。

次に、例（2）のように、話者自身の行動に付ける「系」である。この場合、「系」は本来持っていた「システム」という意味を失い、「～のような」という意味あいが生じ、不確定、曖昧さを表す。つまり、語用論的機能を果たしている。例えば、例（2）では、話し手は、自分が探しているモノを見つけたらまたその部屋に戻らない人であるかどうか問っているのではなく、単にその瞬間頭に浮かんできた考えを問っている。冒頭に立っている「たぶん」や文末の「？」等の文脈の記述から、「系」は助辞的な機能を果たしており、「みたいな」「的な」「って感じ」等の物事を断定しない曖昧な言い方であるぼかし表現に相当し、

モダリティのような役割を果たしていると考えられる。

よって、この場合では話者は「系」をぼかし表現として付けることで、直截的な断定を回避し、表現をやわらげられる表現効果を期待している。すなわち、「(語句形態）系」は断定回避の意味を利用し、自己意志をはっきりと提示しない、という語用的発話効果を生み出すと考えられる。

おわりに

本稿では、句を包摂する接辞性字音形態素「系」を取り上げ、例に基づき、その形態的特徴と意味的特徴に関して考察を行った。その結果、「系」は名詞句、動詞句、文相当句等を前接要素に持つことが可能であり、造語力が相当的に高いことがわかった。また、「(語句形態）系」については名詞相当用法、連体修飾用法、述部となる用法という 3 つの用法に分けられ、「多数のものからなるひとまとまり」との意味からはずれ、人・物を表す名詞のタイプを限定することになっているということを明らかにした。最後、語用論的アプローチから、「(語句形態）系」は電子メディアの言語活動に使われやすく、対象に対して臨時的に行われた「名付け」、そして「あいまい化」との語用論的用法、という表現効果があることがわかった。

今後は、新たなデータをさらに収集し、今回のような新奇的な用法がほかの接辞性字音形態素にも見られるのかについて探究したいと考えている。

注

1）影山（1993）は語の内部に句が包み込まれる現象を「句の包摂」と呼んでいる。例えば、「～風」が「[西洋の中世時代]風」等の拡張用法を生むのである。一方、青木（2016）では、包摂する句は名詞句から述語句へと変わることを指摘している。

参考文献

青木博史（2016)「語から句への拡張と収縮」(藤田耕司・西村義樹『文法と語彙への統合的アプローチ 日英対照 生成文法・認知言語学と日本語学』開拓社)、408-422 頁。

飯田晴巳（2009)「「系」は若者の配慮の表現か」(中山緑朗 ・陳力衛・木村義之・飯田晴巳『みんなの日本語事典--言葉の疑問・不思議に答える』明治書院)、12-13 頁。

影山太郎（1993)『文法と語形成』 ひつじ書房。

中島晶子（2010)「新造語における「度」「系」「力」の用法」(大島弘子『漢語の言語学』くろしお出版)、159-176 頁。

滑川恭平（2016)「漢語系接辞「系」の意味・用法の変遷--新聞の調査をもとに」茨城キリスト教大学。

野村雅昭（1978)「接辞性字音語基の性格」(国立国語研究所報告 61『電子計算機による国語研究 VI』9 秀英出版)、102-138 頁。

村木新次郎（2012）『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房。
山下喜代（2013）「接辞性字音形態素の造語機能」（野村雅昭『現代日本漢語の探求』東京堂）、83-108 頁。
山下喜代（2015）「漢語接尾辞「系・派」について-人物を表す派生語の分析を中心にして-」『青山語文』45、112-125 頁。

使用データベース

「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」（中納言 2.4.5，データバージョン 2021.03）
https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search（2021 年 4 月 1 日確認）

On the Phrasal Compound of the Affixed Sino-Japanese Morpheme "*Kei*"

Lian, Jing

Abstract

Grammatically, affixed Sino-Japanese morpheme appears as a word-formation element such as suffix by attaching to another bound morpheme or word. Sino-Japanese morpheme cannot express meaning alone, but actual examples of such morphemes following words, phrases and even sentences can be observed. This paper examines the phrasal compound of the affixed Sino-Japanese morpheme "*Kei*". Based on actual examples from "Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese", this paper aims to clarify the morphological and semantic characteristics of "X-*Kei*" having phrases and sentences as initial elements.

Investigation has revealed that "*Kei*" can use noun phrases, verb phrases, and even sentences as its initial element. In addition, from the viewpoint of the syntactic functions of "X-*Kei*" in sentences, it was found that the term can be used as a noun, as well as a substantive modifier or a predicate. Finally, this paper points out that the new usage of "X-*Kei*" is more likely to be used by people in Internet communication. And the term has the expressive effects of understandable naming and pragmatic ambiguity.

Keywords： affixed Sino-Japanese morpheme, "X-*Kei*", phrasal compound, expressive effect

日本昭和期のファルス研究
—坂口安吾「風博士」と三島由紀夫「卵」を中心に—

滕夢澂（東京外国語大学大学院生）、張一弛（東京外国語大学大学院生）

要旨

日本近代文学におけるファルス（笑劇）には、伝統芸能である狂言の影響が見られる一方、探偵小説と共に輸入された西欧のファルスと深く関わっており、そこにはエドガー・A・ポーの影響が垣間見られる。戦後、日本におけるファルスは不条理劇とも融合し、その定義が曖昧になった。本論では、坂口安吾の「風博士」（1931）と三島由紀夫の「卵」（1953）を通して、日本昭和期のファルスを考察し、それぞれの特徴を見極めることを目的とする。

「風博士」は、昭和初期「エロ・グロ・ナンセンス」の流行を背景に書かれた作品である。本論では、「風博士」における、謎解きという探偵小説の形式を取りながら、話がそこから脱線していく展開、音声を喚起するメカニズム、異質な要素をコラージュする方法といった特徴について考察した。また、戦後高度成長期を背景に書かれた三島由紀夫の「卵」について、ポーの影響による非現実性と疑似科学的議論、音声の形式と思想、また思想の暴力性に対する問罪、そしてセンスを解体し、対立関係を超えるノンセンスとの面から分析した。

本論では、昭和期戦前、戦後の二つのファルス作品を取り上げ、探偵小説形式の援用と非合理的な展開、言語とは異なる音声の前景化、異質な素材を統合されないままコラージュする方法の面から、両作品のファルスとしての特徴を考察した。

キーワード：　昭和期ファルス、坂口安吾、「風博士」、三島由紀夫、「卵」

はじめに

ファルスはフランス語farceのカタカナ表記であり、日本語では通常笑劇と訳される。この言葉は、詰め込むことを意味するラテン語のfarcireに由来し、劇の間を〈詰める〉幕間劇をも意味するようになった。幕間劇interludeは、〈間〉を意味するinterと〈遊び〉を意味するludus からなり、間でずらされた異質なもの、真面目な劇の間に詰め込まれる道化的娯楽をさす。『世界文学大事典』によると、ファルスは、「フランス中世に成立した喜劇の一ジャンル」であり、「宗教の幕間劇を起源とする」説が一般的である。「卑俗な滑稽劇」とされるが、「風刺性」や「非現実的機構的な展開」「誇張された演技の身体性」などを特

質とするファルスは、現代社会を批判する切実な手法としても利用される[1]。「笑劇（ファルス）は喜劇の非模倣（ミメーシス）的な形式」であるとノースロップ・フライは述べている[2]。つまり、ファルスはある対象を範型として模倣するのではなく、それから逸脱することで笑いを招くのだ。

実際に、日本近代文学におけるファルスには、伝統芸能である狂言の影響が見られる。共に幕間劇であるファルスと狂言には、喜劇の普遍的な要素が見られる。坂口安吾は、「FARCE に就て」（『青い馬』、1932）のなかで、「観念」を重視する精神、「ロヂカル」な構成、「意味を利用して逆に無意味を強める」傾向などに触れながらファルスを説明し、日本古典の「道化」文学として狂言を挙げ、両者の共通性を指摘している[3]。また、三島由紀夫の『鰯売恋曳網』（『演劇界』、1954）は歌舞伎の形式で書かれたファルスであり、その娯楽性によって歌舞伎狂言とも呼ばれている。一方、日本近代文学におけるファルスは、探偵小説と共に輸入された西欧のファルスと深く関わっており、そこにはエドガー・A・ポーの影響が垣間見られる。戦後、日本におけるファルスは不条理劇とも融合し、その定義が曖昧になった。本論では、坂口の「風博士」（1931）と三島の「卵」（1953）を中心に、日本昭和期のファルスを考察し、それぞれの特徴を見極めることを目的とする。

Ⅰ.「風博士」

1. 解放と平等

エッセイ「FARCE に就て」のなかで、坂口安吾は「荒唐無稽」な「乱痴気騒ぎ」を演じることで「全的に人間存在を肯定」するファルスが「剽逸自在、横行闊歩を極めるもの」であると述べた[4]。本論は、坂口のファルス観を踏まえ、手法と文体的特徴から、1931 年に発表された坂口によるファルスの代表作「風博士」を考察する。

「風博士」は論理的な展開を持たない作品である。作品の冒頭で、風博士の自殺と遺書に対する警察の疑いについて、語り手の「僕」は「諸君」に訴える。つまり、風博士の自殺は事実ではなく、その遺書も蛸博士を誹謗中傷するための偽物であるという警察の疑いである。この嫌疑を解くために、「僕」は風博士の遺書を読み上げる。遺書では、蛸博士が禿頭を隠していることの指弾と風博士の妻を奪ったことに対する批判が述べられているが、風博士が自殺する必然性も、自殺の事実を確認できる内容も存在しない。続いて、「僕」は博士の死の経緯を説明すると宣言するが、それと全く無関係な話をする。結婚式のことを失念した風博士が、不可解な叫びを残して風となったと「僕」は述べるが、その証拠として同じ日に蛸博士がインフルエンザに冒されたという詭弁で話を終える。「風博士」は、自殺の真相を紐解くミステリーの形をとりながら、「僕」の抗弁を裏付ける証拠や理にかなった論証に欠け、決め付けとこじつけによって、論理的な進行から逸脱していく構成になっている。

このような非合理的な展開には二つの効果があると想定される。一つは、語る内容の飛躍と不可解さによってもたらされる解放感である。蛸博士の狡猾さを暴くことで風博士の潔白を証明する本来の目的から脱線することが、二人の対立がもたらす緊張感を軽減する。

また、「風博士」の背景として、いわゆる「エロ・グロ・ナンセンス」の流行[5]に注目する必要があるだろう。その流行におけるナンセンスについて、小関三平は「無害な笑いのナンセンスがもたらす安心と慰め」に注目し、そこには「優劣の感情をこえた『共感』の快楽」と「『平等』の思想がある」と述べている[6]。つまり、語る内容の非常識さと非現実性によって、「理解できる／できない」という選別的に階層構造化された文脈から「理解のしようがない」という非選別的で平等な文脈への変化が生じる[7]。風博士と蛸博士に優劣をつける素振りを見せつつ、テキストは、意味からナンセンスへの飛躍によって論理性を破綻させるのである。明確な因果関係を欠くエピソードの並置によって生み出される全的な「肯定」こそ、「風博士」のファルスの方法である。

2. コラージュという方法

「風博士」に見られる、整合性のないエピソードを並置する方法はダダ運動によく見られるものである。ダダの創始者であるトリスタン・ツァラの創作方法が「言語のコラージュ」であると塚原史は指摘し、その最大の特徴が、素材としての言語を原作、或いは元となる何らかの「コンテクストとは無関係につなぎあわ」せることであると述べている[8]。また、同時期の絵画にもコラージュ的な手法が見られる[9]。「風博士」の創作はダダ運動の影響を受けており[10]、異なる文脈から切り取られた素材を一つの作品に再構成するコラージュ的な方法をとっていると言えよう。

宮澤隆義が既に指摘しているように、「時計はいそがしく十三時を打ち」という一節が、ポーの「鐘楼の悪魔（The Devil in the Belfry）」を想起させる[11]。ただ、ポーの短編における「十三時」という時間への配慮は、「風博士」のものとは異なっている。その他、「源義経は成吉思汗となった」、「否否否」がそれぞれ、小谷部全一郎の「源義経＝成吉思汗」論と[12]福本和夫の演説を基にしている[13]。しかし、坂口のこの作品では、国民的な英雄を感傷的にドラマ化する歴史解釈や福本イズム的政治闘争の文脈から外れる形で、これらの素材が利用されている。「風博士」は、他作品の要素や同時代の言説を元の主題のままで再利用して論理的な説得を行うのではなく、コラージュ的な方法によって素材をただ付け足していき、それらをファルス的な「つめもの」として提示する。異なる文脈から取られた素材を一貫性のないパッチワークとして作品化するコラージュの方法を用いる場合、作品の執筆に先立つ全体の構想はあまり意味をなさない。この方法は、任意の素材を作品に継ぎ足し、無限に拡張させる可能性を持つ。素材を元の文脈からずらして足せば足すほど、却ってファルスの荒唐無稽さが強まっていく。つまり、この方法自体に排他的な性格は存在しない。「無毛赤色の突起体」という「赤」の表象、飲み込まれる「コップ」によって暗に言及される日本プロレタリア文化聯盟（コップ＝KOPF）など、1930 年代に問題含みとされた共産主義に関わるイメージも作品の一部として「肯定」される。コラージュは、坂口が述べたように、ファルスの全的肯定を達成する一つの方法となっている。

3. 音声喚起のメカニズム

「風博士」は説話的な特徴を持つ作品である。笠原伸夫は、「風博士」の「奇想天外な語りくちこそ、説話的な方法」であると指摘し、この作品が「自在な語りくちに支えられたファルス」であると述べている[14)]。作品は「僕」の「諸君」への呼びかけからはじまり、自問自答の形で語りが進行し、物語の場所、人物、状況が全て「僕」の語りによって創造される感覚を作り出す。

「僕」のモノローグは口承的な文体によって喚起される「声」によって支えられている。「風博士」の文体には口承文化との相似性が見られ、音声を喚起するメカニズムが機能している。ウォルター・オングが纏めた口承文化の九つの表現の特徴のなかでも、「累積的」「冗長的」「闘技的」という三つの特徴が「風博士」に見られる[15)]。これらの特徴は冒頭部分と遺書の部分において顕著であるが、後半部分において次第に薄れてゆき、書き言葉の印象が強くなる。しかし、書き言葉的な文章は、別種の「声」を際立たせる効果を持つ。風博士は消える前に「POPOPO！」と「TATATATATAH！」という叫び声を発する。この叫びはファルスの性格を良く表している。まず、そこに意味を読みとることは不可能である。風博士の遺書にはまだ自己弁明の意図が認められるが、彼が実際に声に出して発する言葉は、説得力を一切持たない無意味の叫びである。また、その叫びは彼自身の権威の解体に繋がり、蛸博士との対抗関係から離脱する出口にもなる。意味に制約されない単純な音の響きは、意味を構築する権威から逃れる解放感の肯定でもある。通常肯定的に捉えられる意味作用も、そこから排除されるナンセンスによって否定される。この否定と肯定の相互作用によるナンセンスの効果がファルスの全的肯定のもう一つの側面である。

Ⅱ．「卵」

1. ポーの影響

三島由紀夫の「卵」は、1953 年 6 月『群像』の増刊号に発表された SF 風の短編小説である。1955 年 7 月、短編集『ラディゲの死』に「卵」を収録する際、この作品を「ポオの「十三時」や「ペスト王」や「ボンボン」などのファルスの模作である」と認め、「私はこの作品におそろしく自信があり、愛着も抱いてゐるのに、誰一人みとめてくれた人がない」[16)]と述べている。

三島はポーの作品を愛読し、「知性の断末魔」で、ポーの作品を「屍臭の漂ふ優雅な物語群」と「ファルス」に分類し、「卵」で「ポオ風なファルスを企てた」[17)]と述べている。長沢隆子は、ポーの「鐘楼の悪魔」と「卵」を比較し、「ポーの想像力がリアリスティックに発揮された」のに対し、三島の想像力が「観念的にしか発揮され」ず、ポーの原作に比べると、「卵」は「人工的で、不自然で、つくり話し然とした観を免れない」[18)]と指摘している。しかし、ここでは、ポーの作品に見られる多様な形式とテーマが無視され、ファルスという形式の意味合いが十分に考慮されていない。前述したように、ファルスには、非模

倣的、非現実的な性格がある。また三島は、ファルスを「荒唐無稽」と定義する坂口の感覚を共有している[19]。長沢が指摘する人工性や不自然さこそ、三島がファルスをもって目指したものであろう。純文学作家とされる三島は、写実に基づく文学の主流から逸脱する「乱痴気騒ぎ」のファルスを書くことで、日本近代文学の従来とは異なった可能性を提示しようとしたのではないだろうか[20]。

三島は、ポーの 2 種類の作品に影響されたと述べているが、「卵」に見られる裁判の場面や、警官、弁護士の登場などに、探偵小説の創始者としても知られるポーの影響が窺える。そもそも、「卵」は裁判小説[21]の形をとっており、法と文学を連結する探偵小説に類似している。作品では、学生の処罰をめぐって疑似科学的議論が展開されている。毎日卵を食べている学生は、「卵的成分をそのタンパク質に含有」しているため、彼らに「卵的処刑が化学的に可能である」と検事の卵は主張する。そして、弁護人の卵は、「人間の体内に分解された卵がまた卵になる可能性」を問う。超自然現象を科学で説明することは 19 世紀実証主義の時代に見られる傾向であり、ポーの小説もその一例である。ポーの作品では、科学的議論は真実を保証するものではなく、語りを真実と結びつける「コード」である[22]。「卵」に見られる「科学的真相」をめぐる議論は、おそらくポーの作品の意識的、無意識的な借用であり、科学的なコードによってノンセンスを増大させる役割を果たしている。

2. 音声の形式と思想

音声は「卵」における重要なテーマである。五人の学生は、「行儀正しいガラガラ声で、いただきますと一せいに怒鳴る」と、「卵を小丼の端に一せいに打ちあてて割り、さてそれを一どきに呑む」という生卵を呑む儀式を日課とする。「毎朝の卵の儀式の野蛮な大音響は、一里四万に隈なく届く」のだ。ある晩、端艇部の先輩の家から帰る五人は、ボート部の応援歌を歌いながら、見知らぬところに入ってしまう。突然に現れてきた卵警官に逮捕された五人は、「円形の建築」に連れられていき、大音響の罪によって裁判にかけられる。そして、フライパンになった建築を引っくり返す五人は、「轟然たる音を立てて」数千の卵を一気に割ることで元の世界に帰す。混じり合った卵を油槽車で運んで帰り、卵を一つずつ割ることができない学生たちは、卵を割る音を立てなくなる。この作品は、種々の音声をめぐって展開されていると言えよう。

五人の学生の罪を述べる際、検事の卵は、卵の儀式での「音響」の問題を指摘している。卵の儀式で立てられる「怖ろしい唸り声とそれにつづく魂切るばかりの破裂音」は、暴力性を明らかに帯びている。しかし、ここで強調されているのは、騒音の問題ではなく、「音響を以て、卵を食用に供することの普及宣伝」である。「われわれは形式に於て卓越してゐるにもかかはらず、被告等は思想に於て卓越してゐる。思想は多少に不拘、暴力的性質を帯びるものである」と検事の卵は説き、「かれらは、卵は食用に供しうる、といふ思想にみちびかれて、腕力を揮つた」と語る。卵を食べる行為自体は暴力とはならないが、「卵は食用に供しうる」との思想は暴力である。従って、その暴力的な思想を音響で「普及宣伝」する学生たちは処刑されるべきである。卵を割る音、唸り声、歌声など、五人の学生が発

する音声は、いずれも人間の力や意志を伴い、何かの内容を伝える思想をもつ音声である。五人の学生を裁く卵たちは、思想を伴う音声の暴力性を暴き出して問罪するのである。

個性がない円形の卵と建築などによって象徴されるように、卵の世界は非具象の「形式」の世界である。彼らが話す時は「内にこもつてきこえる黄いろい声」を出し、集まっている時は「衣摺れの代わりに、象牙の牌の触れあふやうな音」が起こり、喜ぶ時は「チカチカとぶつかりあふ音」を出し、歓呼の代わりに「殻を打ち合はせてガチャガチャ言つた」とされる。五人の学生が発する思想をもつ音声に対して、卵たちが発するのは具体化されていない形式的な音声である。卵たちの形式的な音声は、意味内容の伝達を優先する五人の音声とは異なり、一種のノンセンスの音声として理解できる。

3. 諷刺を越えたノンセンス

新潮文庫の「解説」で、「私の狙いは諷刺を越えたノンセンスにあって、私の筆はめったにこういう「純粋なばからしさ」の高みにまで達することがない」と三島は説明している。「ノンセンス」が、何かを批判する「諷刺」と異なることを、三島は強調している。「センス」と「ノンセンス」を対立関係に置くとすれば、通常意味とされるものが肯定、特権化される。三島にとってのノンセンスはそうした対立関係を越えたものであり、ア・プリオリに存在する「センス」の根拠を認めず、それ自体を無意味に帰するようなものである。

「卵」の主人公にあたる五人の学生の名前は、冒頭の一文で紹介されている。「偸吉に、邪太郎に、妄介に、殺雄に、飲五郎と来たら、飛切朗らかな学生だ」。彼らの名は仏教の五戒にそれぞれ対応している。続いて、財布を交番へ届けに行く偸吉、女に威嚇されて逃げ出した邪太郎、真実の言葉に対しても誰も信じる友達がいない妄介、校長に対する乱暴が逆にその禿とつんぼをなおし褒賞をもらう殺雄、酒樽の中へ落ちて酒を呑み干して生き延びた飲五郎と、五人の経歴が紹介されている。つまり、不偸盗、不邪淫、不妄語、不殺生、不飲酒の五戒を破った彼らに「悪名」が与えられていることは、ノンセンスになるのだ。

五人の学生は、「競争で朝寝坊をし、規律正しく万年床を守つて」おり、「この陽気さと朗らかさと傍迷惑の無窮動を保持するために、衛生的な配慮をも怠らなかつた」。「確信を措いて、世界は存在しない」という認識を共有する五人は、社会通念を基準とせず、それを無意味なものにする。五人の学生を処刑するために集まる卵は、逆に五人によって一気に割られることになる。その結果、五人の学生は、毎日食べても卵が尽きず、卵を割る楽しみをも失うのだ。卵たちの裁判も、五人の学生の反抗も無意味に帰してしまう。

築山尚美は、『ふしぎの国のアリス』や『鏡の国のアリス』、メーデー事件や「慶大五選手」の新聞記事に「卵」の原型的な要素を見出し、作品において「表層的」に消費された文学の素材や当時の言説は「即物的な忠実」であり、「文脈の完全な切断である」と指摘している[23)]。このように文脈を無視し、様々な要素をコラージュして一つの作品に詰め込むことは、「ノンセンス」に先立つ「センス」を解体するのである。これこそ三島が求めた「諷刺を超えたノンセンス」かもしれない。「風博士」には、1930 年代におけるマルクス主義弾圧に抵抗する一面が読み取られる。一方、1950 年から激化した GHQ によるレッド・パージを背景に書かれた「卵」は、天皇制の解体などにより諷刺の対象を失い、抵抗のため

の明確な主体性を喪失しつつあった敗戦後の日本社会を、諷刺ではなく「ノンセンス」によってファルスに仮託して表現する三島の態度を示している。
あああああ。

おわりに

坂口安吾の「風博士」と三島由紀夫の「卵」は、共に昭和期のファルス作品である。昭和初期「エロ・グロ・ノンセンス」の流行と戦後高度成長期がそれぞれの背景になっているが、ファルスとしての特徴や創作の手法において、両作品にいくつかの共通点が認められる。まず、探偵小説的な要素を持ちながら、話の筋が謎解きや推理に収束されず、そこから外れて非合理的に展開されている。次に、音声の力を強く意識し、言語とは異なる音を前景化することで、ノンセンスを強める方法が見られる。両作品はそれぞれ非写実的な言葉と形式的な音声によって、意味を優先する言語観と、それに基づくリアリズム文学の伝統を転倒しようとする傾向が見られる[24)]。最後に、両作品は共にファルスという形式を意識して書かれたものであり、非現実的、道化的な要素、異質的な素材を詰め込む性格が顕著である。探偵小説的要素と同時代の言説、音声の前景化と前衛美術の創作方法、オリジナルの意味や文脈が無視された様々な素材や方法が作品のなかでコラージュされている。異質な素材を統合されないまま一つの作品に詰め込むこの方法が、「矛盾を解決」せずに「全的に人間存在を肯定しやうとする」坂口と「諷刺を超えたノンセンス」を企てる三島のファルスの底流をなしている。

注

1）『世界文学大事典』編集委員会（1997）『集英社　世界文学大事典 5』集英社、383～384 頁。
2）ノースロップ・フライ（1980）『批評の解剖』海老根宏他訳、法政大学出版局、411 頁。
3）坂口安吾（1967）「FARCE に就て」『定本　坂口安吾全集　第七巻』冬樹社、15,21,22 頁。
4）同書、18～19 頁。
5）久保田芳太郎（1972）によると、「エロ・グロ・ナンセンス」という言葉が流行し始めるのは 1930 年である（「エロ・グロ・ナンセンス」『国文学：解釈と鑑賞』36(9)、105 頁）。
6）小関三平（1973）「エロ・グロ・ナンセンス退廃と娯楽」『現代娯楽の構造』文和書房、190～191 頁。
7）ファルスは元々庶民が登場する民衆相手の演劇であり、ミハイール・バフチーンが論じた、社会の階層構造を転倒させるヨーロッパ中世民衆文化の一部であるとも考えられる。
8）塚原史（2003）『ダダ・シュルレアリスムの時代』筑摩書房、95 頁。
9）例えば、マックス・エルンスト 1929 年のロマン・コラージュ作品『百頭女』がある。
10）坂口はツァラの『我等の鳥類』を翻訳している（筑摩書房『坂口安吾全集』第一巻収録）。
11）宮澤隆義（2016）「未知なるもののなかでの戦い：坂口安吾とエリック・サティ」『ユリイカ』47(18) 、232 頁。

12）山根龍一（2007）「坂口安吾『風博士』論―福本イズム、小谷部全一郎・浪漫的英雄主義の内在批判―」『日本近代文学』（77）、65 頁。

13）花田俊典（1986）「『風博士』解読：あるいは蛸博士の奸計」『語文研究』（66・67）、82 頁。

14）笠原伸夫（1973）「説話的発想」『国文学：解釈と鑑賞』38（10）、37 頁。

15）オングによると、形容句やきまり文句など修飾の累積（累積的）、繰り返しや水まし（冗長的）、罵倒や毒舌（闘技的）などの表現が口承文化において多様される。（ウォルター・オング（1991）『声の文化と文字の文化』藤原書店、86, 89, 99 頁）。

16）三島由紀夫（2003）「あとがき」『決定版 三島由紀夫全集 28』新潮社、497 頁。

17）三島由紀夫（2003）「知性の断末魔」『決定版 三島由紀夫全集 32』新潮社、632 頁。

18）長沢隆子（1976）「ポーと三島由紀夫－三島作品「卵」を中心に―」『武蔵野女子大学紀要（11）』153～161 頁。

19）「知性の断末魔」で三島はポーのファルスを「坂口安吾氏が溺愛してゐた」と述べている。

20）ファルスの形式は、写実によって看過された喜劇的、非模倣的な要素を表現するという意味で、三島に多大な影響を与えたニーチェの「ディオニュソス的」なものに近い。

21）20 世紀には、欧米の自然主義小説の影響により、小説作品で裁判の過程が取り上げられることがあった。例えば、カミュの『異邦人』や井上靖の『氷壁』などがある。

22）Roland Barthes, “Textual Analysis: Poe’s ‘Valdemar,’” *Modern Criticism and Theory: A Reader*, in David Lodge ed., London: Longman, 1988, pp.172-195. を参照。

23）築山尚美（2005）「三島由紀夫『卵』論」『昭和文学研究 51』、13～27 頁。

24）これはポーの作品によく見られる特質であり、二人の作家へのポーの影響が窺える。非合理的な展開は「『ブラックウッド』誌流の作品の書き方」がその例であり、非言語的な音声は『モルグ街の殺人』に見られる。

・「風博士」の引用は冬樹社『定本　坂口安吾全集　第一巻』（1968 年）による。

・「卵」の引用は新潮社『決定版　三島由紀夫全集 19』（2002 年）による。

A Study on Shōwa Farce

: Focusing on Sakaguchi Ango’s “Kaze Hakase” and Mishima Yukio’s “Tamago”

TENG Mengwei, ZHANG Yichi

Abstract

Farce in modern Japanese literature is influenced by Kyōgen which is one of the Japanese traditional performance arts, but is also highly influenced by western farce such as Edgar Allan Poe’s works. However, the definition of farce in modern Japanese literature remains unexplored.

This paper aims to examine the traits of farce through the analysis of Sakaguchi Ango's "Kaze Hakase [Dr. Wind]" (1931) and Mishima Yukio's "Tamago [The Egg]" (1953).

"Kaze Hakase" was written in the background of the Shōwa "Ero Guro Nonsense" trend. In this part of the analysis, we examine the functions of the deviation in the storytelling, the mechanism of evoking the voice, and the collage of incompatible elements, and how these contribute to making this work by Sakaguchi a farcical composition. "Tamago," written in the background of Japan's after-war economic miracle, is analyzed here from the aspects of unreality and pseudo-scientific code that come from Poe's influence, the form and ideology of the voice, the denunciation of violence involved in ideology, and the nonsense that transcends the border between the opposites by deconstructing the sense.

This paper focuses on two farces before and after World War II and examines their characteristics that combine the detective novel style and irrational developments, foregrounding the audio that is distinguished from language and the method of collage.

Keywords： Shōwa farce, Sakaguchi Ango, "Kaze Hakase", Mishima Yukio, "Tamago"

漱石の「非人情」と漢文学

崔 雪梅（江西農業大学）

要旨

漱石の小説には当時でも今でも修辞上に読者の注意を引く特色を持っている。軽妙な言文一致体で描いた西洋風の生活スタイルや、漢文調交じりの文章を以て描いた幻想世界と主人公の心の世界は、独特な持ち味を作り出している。漢詩や英詩を使わざるを得ない文章の構成には作者自身が追い求め続ける美的観念が働いている。漱石はこのようなスタイルを「俳句的」な表現とプロットのない構造と述べる。その論理を具体化したのは、つまり『草枕』である。本稿では、漢詩と「俳句的小説」という構造の相関関係を考察しながら、「非人情」という情緒、及び「非人情」の「表情」について検討する。

キーワード：　夏目漱石、非人情、漢詩、表情、漢文学

はじめに

『草枕』の始まりの部分に書いてある如く、画工の那古井の温泉場への旅は「淵明、王維の詩境を直接に自然から吸収して、すこしの間でも非人情の天地に逍遥したいからの願」により成り立ち、「一つの酔興」のような情動が旅の全体を貫いている。その一時的に激しくわき起こる怒り、恐怖、喜び、悲しみのうちのいずれの情動は、『草枕』では「顔」、「表情」を用いて画工の感ずる情緒の頂点を象徴的に表象し得ている。非人情の旅中、画工は画になりそうないくつかの「表情」を見出したが、またかれこれするうちに、ようやく那美の顔に表われた咄嗟の表情―「憐れ」を以て非人情の旅を成し遂げたことを宣言したのである。「非人情」といえる「憐れ」の表情は、一体どのように出来上がったのか。拙稿「漱石の「俳句的小説」と漢文学」において、筆者は、「俳句的小説」という構造を基にした『草枕』に加えられた陶淵明の『桃花源記』の行程について論じた。そのうえ、「俳句的小説」が詩的機能を生かした小説創作法として、漱石の模索のプロセス及び、作品中では漢文や漢詩的構造をいかに生かしたのかを問題視した。

本稿では、引き続き『草枕』における漢詩的な空間構造を中心としながら、「非人情」という情緒、及び「非人情」の「表情」について検討する。

Ⅰ.「非人情」と表情

詩と画の創作の問題をめぐって、漱石は『草枕』においてレッシングと異なる見解を示した。が、両者の表現の仕方において共通するところも見られる。これは、漱石が絵画と彫刻とをめぐるレッシングの考えを受容した証拠にもなるのである。

レッシングは、叙事詩と演劇とが時間の中に展開される芸術であり、絵画と彫刻が空間の中に展開されていると考えている。そして、詩歌の創作に関する認識は、芸術家が「表現において節度を守り、けっして行為の最高の瞬間を描こうとしない」という考えに基づいている[1)]。この認識が依拠されるのは、「ある感情の全体の流れのなかで、その最高段階」に達した「最高の瞬間」を表現した芸術作品は、鑑賞者の「空想の翼をしばる」ためであるという考えである。これを説明するために、レッシングはラオコオン像を例として挙げている。レッシングは、「最高の瞬間」をとらえて表現するラオコオン像が極点に達した苦痛を表現するので、鑑賞者に不快感を与えながら、美と調和し得ない作品になってしまうと言う。しかしながら、それより低い程度の感情に引き下げて表現する時、ラオコオン像は鑑賞者の同情の気持ちを汲み取ることができて、美に伴う苦痛を感じさせられる、とレッシングは言う。これに関して、レッシングは、「表情は芸術の第一原理すなわち美の法則に従うべきだ」という見解を提示した[2)]。また、この表情は強く押し出すべきものではなく、「画家が美にささげた一つの犠牲」として、描いてはならないものを鑑賞者の推量にゆだねて、調和した表情として呈すると述べる。そして、それによって、作品を通して表現しようとする芸術的効果は、持続するような形で鑑賞者に感じさせられると言う。異曲同工の如く、『草枕』で画工にとって最高の画材となっているのは、小説の終わりの部分に描かれた**那美の「表情」**である。（文中の傍線、ゴシックは筆者による。以下同じ。）

> 窓は一つ一つ、余等の前を通る。久一さんの顔が小さくなつて、最後の三等列車が、余の前を通るとき、窓の中から、また一つ顔が出た。
>
> 茶色のはげた中折帽の下から、髯だらけな野武士が名残り惜気に首を出した。そのとき、那美さんと野武士は思はず顔を見合せた。鉄車はごとりくと運転する。野武士の顔はすぐ消えた。<u>那美さんは茫然として、行く汽車を見送る。其茫然のうちには不思議にも今迄かつて見た事のない「憐れ」が一面に浮いてゐる</u>。
>
> 「それだ！　それだ！　それが出れば画になりますよ」
>
> と余は那美さんの肩を叩きながら小声に云つた。<u>余が胸中の画面は此咄嗟の際に成就したのである</u>[3)]。（『草枕』「十三」）

この部分では、那美と野武士の間の感情の流露が一方向的に描写されている。那美が汽車の中にいる野武士と対面した瞬間に、読者の目線は画工によって那美と一致させられ、野武士の「名残り惜気」な感情が現れる表情に注目するようになる。この時、野武士と対

面する那美の顔に現れた表情は、画工の目線によって遮られている。それからは汽車が離れていくなどの叙述が綴られる。そして、読者の目線は再び画工の目線に従い、那美の顔に戻る。この時の那美は、姿が消えていく野武士と汽車とを見送りながら茫然とした表情をしている。ここでは、野武士の「名残り惜気」な感情に対する描写から那美の呆気にとられた様子に対する描写に転換することによって、作品におけるクライマックスの場面が完成したと言える。それから間もなく、画工は那美の表情から「憐れ」というものを見つけたのである。そして、この「憐れ」な表情が現れた咄嗟に、画工は自らが求める最高の画を手に入れたと宣言する。車窓を隔てて偶然と野武士と対面した那美は驚きを禁じ得なかった末に茫然となるが、その驚きの裏には「憐れ」という感情が潜まれている。この「憐れ」は、レッシングによれば高まった感情が一段と引き下げられた時の感情である。

那美の顔から現れた「憐れ」といった感情は時間的推移が現れる感情の経過や結果の局部として捉えられ、画工の目線を通してその感情の性質や特色が記述されている。

Ⅱ．画材とする「表情」

全編において「表情」をめぐる叙述は 9 か所ある。それはすべて血の通った顔に見出した表情である。旅をして間もなく、画工は非人情の画材を見出した [4)]。第【二】回では、画工の目にした**茶店の婆さんの「表情」**について詳しく描いている。

> 二三年前宝生の舞台で高砂を見た事がある。その時これはうつくしい活人画だと思つた。箒を担いだ爺さんが橋懸りを五六歩来て、そろりと後向になつて、婆さんと向ひ合ふ。その向ひ合ふた姿勢が今でも眼につく。余の席からは婆さんの顔が殆んど真むきに見えたから、あゝうつくしいと思つた時に、その**表情**はぴしゃりと心のカメラへ焼き付いて仕舞つた。茶店の婆さんの顔は此写真に血を通はした程似て居る（中略）宝生の別会能を観るに及んで、成程老女にもこんな優しい**表情**があり得るものかと驚ろいた。あの面は定めて名人の刻んだものだらう。惜しい事に作者の名は聞き落したが、老人もこうあらわせば、豊かに、穏やかに、あたゝかに見える（中略）袖無し姿の婆さんを、春の山路の景物として恰好なものだと考へた。余が写生帖を取り上げて、今暫くといふ途端に、婆さんの姿勢は崩れた。（『草枕』「二」）

「二三年前宝生の舞台で高砂を見た事がある」という部分の記述をめぐって、増田正造『能と近代文学』では、漱石の思い違いによるものだと指摘している [5)]。増田は能の鉄則として、ツレがシテより先に出てくるゆえ、「爺さん」と「婆さん」の出場の順番を漱石が誤って覚えたと述べる。ここで、漱石は能の演目「高砂」に登場する人物を持ち出したが、非人情の画材は幽霊や神などが登場する幽玄な世界から見出そうとしていない。それは、「此写真に血を通はした程似て居る」という茶店の婆さんの表情に注目したところから読

み取れる。しかしながら、それは画になる寸前に、形が崩れてしまう。そして、画になる画材を求め、画工は那古井の宿に泊まる。この温泉場で、画工の見た**那美の「表情」**次のように書かれている。

> 昔から小説家は必ず主人公の容貌を極力描写することに相場が極つてる。（中略）然し生れて三十余年の今日に至るまで未だかつて、かゝる**表情**を見た事がない（中略）所が此女の**表情**を見ると、余はいづれとも判断に迷つた。口は一文字を結んで静である。（中略）画にしたら美しかろう。かやうに別れ／＼の道具が皆一癖あつて、乱調にどや／＼と余の双眼に飛び込んだのだから迷ふのも無理はない（中略）どうしても**表情**に一致がない。悟りと迷が一軒の家に喧嘩をしながらも同居して居る体だ。此女の顔に統一の感じのないのは、心に統一のない証拠で、心に統一がないのは、此女の世界に統一がなかつたのだらう。（『草枕』「三」）

那古井の宿に泊まる最初の夜、画工は統一した感じのない那美の表情を「悟りと迷が一軒の家に喧嘩をしながらも同居して居る体」と表現し、それこそ「心に統一のない証拠」だと述べる。そのため、画工は那美の「表情」を自らの画材にしようと思いながらもためらいを禁じ得なかった。そこで、**画工は自ら求める表情**について、次のように語る。

> 成程此調子で考へると、土左衛門は風流である。スヰンバーンの何とか云ふ詩に（中略）どんな顔をかいたら成功するだらう。ミレーのオフェリヤは成功かも知れないが、彼の精神は余と同じ所に存するか疑はしい。ミレーはミレー、余は余であるから、余は余の興味を以て、一つ風流な土左衛門をかいて見たい。然し思ふ様な顔はさう容易く心に浮んで来さうもない。（『草枕』「七」）

熊坂敦子は、那美の表情に表われた「憐れ」と水の底で往生する土左衛門、及びミレーのオフェリヤのイメージを一つの構図の中に置き、「その『憐れ』を漂わせた水中死の情景こそ、画工が求め続けた「非人情」の美学の構図」だと述べる。さらに、画工の探った幻境は、「生きてはそこに行けない水中の『清浄界』」にあると考えている[6)]。それに対して、前田愛は画工が表情の構想に「死美人のイメージ」、つまり、オフィーリアのイメージがわだかまっていると熊坂と似た主張を示しながら、そのうえ、「那美さんをモデルにした画像には、浄化の兆しが期待されなければならない」という意見を示した[7)]。ところが、拙稿「漱石の「俳句的小説」と漢文学」に述べたように、『桃花源記』のような行程を『草枕』に加えることは、前田の言うような「死の翳り」を浄化する意味は含まれない。それは、画工の「非人情の旅」に必要とされるゴール、つまり、「非人情の天地」を象徴する部分になっているためである。さらに、画工が画の画材にしようとした表情の中には、那美とオ

フィーリアの表情があるのみならず、茶店の婆さんの表情もあったためでもある。画工の求めるものは、ミレーがオフィーリアに込めた創作意図と相違がある。そのため、画工が「ミレーはミレー、余は余であるから」と述べ、その興味にあう表情を求め続けていたのである。**非人情の「表情」**をめぐって、第「十」回では、次のように書かれている。

> 第一顔に困る。あの顔を借りるにしても、あの**表情**では駄目だ。（中略）御那美さんの**表情**のうちには此憐れの念が少しもあらはれて居らぬ。そこが物足らぬのである。ある咄嗟の衝動で、此情があの女の眉宇にひらめいた瞬時に、わが画は成就するであろう。然し――何時それが見られるか解らない。あの女の顔に普段充満して居るものは、人を馬鹿にする微笑と、勝たう、勝たうと焦る八の字のみである。あれ丈では、とても物にならない。(『草枕』「十」)

上記の通り、『草枕』の「一三」回で描かれた那美の顔に表われる「非人情」の「表情」の様子は、すでに「十」回のところで予期されている。しかし、『草枕』では、なぜ「非人情」の表情の登場を「一三」回まで引き伸ばしただろうか。それは、『草枕』の冒頭の部分に書かれているように、画工が山中の旅の中で、陶淵明と王維の詩のような出世間的で非人情な詩と画とを作り上げようとした設定とかかわる。言い換えれば、それは「非人情」の情緒がみなぎる漢詩作品の誕生を待ち受けるための処置である。

Ⅲ．非人情の漢詩

作品の冒頭の部分から出世間的な詩味を表わす漢詩として、陶淵明の「飲酒」と王維の「竹里館」とが取り上げられている。画工の詠った最初の作品として、作品の中に掲げたのは、漱石自らが明治三一年三月に作った 67 番の「春日静坐」である。しかし、画工はこの作品に関して「索然として物足りない」と感じ、第【十一】回でもう一度チャレンジをしたのである。ところが、二回目のチャレンジでは、「仰数春星一二三」という一句のみを得たまま、失敗に終わったのである。そして、画工がようやく自らが思う出世間的で非人情な漢詩を作り出したのは、『草枕』のクライマックスに達する直前の【十二】回である。この時、作品に加えた漢詩は、漱石が 1898 年 3 月に作った 65 番の「春興」である。これは、また、レッシングの作詩方法を否定した方法で作られた漢詩で、『草枕』では成功例として提示されている。

詩と画の創作に関して、『草枕』では、漱石がレッシングと異なる見解を示しているが、表現の仕方において、レッシングと共通するところが見られる。また、「詩画は不一にして両様なり」に反対する意見の背後には、漱石の詩画一如という中国の伝統的な考えが現れている。この考え方には、詩画一如という漱石の態度が表われる。詩画一如は、北宋期に確立したと言われる。これについて、宇佐美文理は『中国絵画入門』において、次のよう

に述べる。

　詩と絵画は制作面でも鑑賞面でも同一の原理に基づくというこの発想は、のちに、山水画の場合、画面に詩が直接書き込まれていくが、もとはこの「秋塘図」のような絵を見て、そこに詩を感じとるところから始まったと考えられる。そして、それは小景画だけのことではなく、大きな画面の山水においても求められることになる[8)]。

つまり、漱石の言う「境界」と「心理の状況」、または、「一種のムード」に言い換えた着想は、漱石のオリジナルなものではなく、すでに中国の山水画の発展過程の中で出来上がった制作と鑑賞の仕方の一つである。ただ、それについて『草枕』では、出所を明確に示さなかったのみである。その原因は、たぶん漱石が作品の前半で、「非人情の天地」を「淵明、王維の詩境」であることを書いたので、それについてわざわざ言明しなくても読者は了解し得ると想定して、敢えて言わなかったのかもしれない。なお、『東坡題跋・書摩詰〈藍田烟雨図〉』に見える「味摩詰之詩、詩中有画。観摩詰之画、画中有詩」という蘇軾が王維の詩画に対する評は、よく知られていることである。

『草枕』で「初から窈然として同所に把住する趣き」を「よし之を普通の言語に翻訳」したものは、漱石の 67 番の漢詩である。

春日靜坐　1898 年 3 月

青春二三月、愁隨芳草長、閑花落空庭、素琴横虚堂、蠨蛸挂不動、篆烟繞竹梁、獨坐無隻語、方寸認微光。人間徒多事、此境孰可忘、會得一日靜、正知百年忙、遐懐寄何處、緬邈白雲郷。

画工は 67 番の漢詩について、「自分が今しがた入つた神境を写したものとすると、索然として物足りない」と思っているが、自らが描こうとする「抽象的な考」を表現し得ていると考えている。そして、前の六句について、「みな画になりさうな句許りである」と画工が分析する。前の六句では、芳草が生えている様子、花弁が落ちる様子、静かな虚堂に置かれている琴、天井にぶらさがっている蜘蛛、煙がうつばりの周囲に漂う様子などについて詠っている。いずれもひっそりした春の日の風景として、作品の中で絵画に描かれた景物のように配置されている。「独坐無隻語」という詩句は、作品に表現しようとする静かなムードを強調して表現し、「人間徒多事」は詩人の何の心残りもない心境を表現している。

65 番の「春興」は、画工が三度のチャレンジを経て、ようやく出世間的で非人情な「快味」を表わす漢詩として『草枕』に加えている。

春興　1898 年 3 月

出門多所思、春風吹吾衣、芳草生車轍、廢道入霞微、停筇而矚目、萬象帶晴暉、聽黄鳥

宛轉、覩落英紛霏、行盡平蕪遠、題詩古寺扉、孤愁高雲際、大空斷鴻歸、寸心何窈窕、縹緲忘是非、三十我欲老、韶光猶依依、逍遙隨物化、悠然對芬菲。

65 番の「春興」について、画工は「あゝ出来た、出来た。是で出来た。寐ながら木瓜を観て、世の中を忘れて居る感じがよく出た」と満足する喜びを示した。「世間には拙を守ると云ふ人がある」と、画工が指示する人は、画工自身であり、陶淵明でもあり、また、漱石でもある。画工が淵明や王維のような詩境と趣とを表象し得たと思ったこの作品には、画にしようとした刺激のない、「窈然として名状しがたい楽」が表現されている。春風に吹かれる衣、草、廃道、落英（落花）、野原、古寺の扉、雲、韶光（春の光）などの景色は、いずれも「初から窈然として同所に把住する趣き」を表現し、作品の中で絵画的な要素として配置されている。

斎藤希史は『漢文脈と近代日本』で、「漱石の初期の小説は、ちょうど『感傷』から『恋愛』への流れが近代小説を作っていったように、『閑適』という主題を近代小説へと転換することはできないか、という実験である」と述べる[9]。そして、『草枕』は、西洋への対抗原理としての漢文脈にある実験的作品である、という見解を示した。斎藤が述べたように、『草枕』は西洋への対抗原理としての漢文脈にある実験的作品としてとらえられるかもしれない。しかし、「俳句的小説」という方法から見る時、『草枕』は、東洋と西洋の文学と美術から抽出した共通構造、または、表現形式を取り入れた作品として作られていることが明白である。『草枕』は、画工の非人情の詩と画を創作する目的で始まり、また、創作が成功すると共に幕を閉じる。『草枕』に加えた漢詩は、『思ひ出す事など』と『虞美人草』に見られるような詩と文が互いに補足し、また、情緒やムードが共振する特徴を持っている。そのうえ、詩歌の創作における漢詩の構造について触れながら、出世間的な詩趣を表わす詩と画とを創り出すための旅を描き出している。

おわりに

「俳句的小説」という詩的機能を生かした小説創作法は、漢詩的な空間構造の中で「表情」と漢詩とを以て「非人情」の情緒を構成し、またそれを以て「俳句的小説」という理論の中身を膨らませた。『草枕』に加えた漢詩は、作品を展開する道具として作用するうえに、小説『草枕』の風格を定める重要な材料となっている。それは、「非人情」な旅と「非人情」な詩と画を求める作品の方向性に表わされる。そして、『草枕』における「非人情」の情緒を表す表情は、幽霊や神などのいる世界のものでもなければ、前田の考えるような「死」のイメージがまたがるものでもなかろう。それは、結局「憐れ」という古い情緒を受け皿としたが、そこからは失いつつあるものを保とうとし、新しい風を吹き込もうとする漱石の「情動」が読み取れるのではなかろうか。

【付記】本稿は、「江西省社会科学“十四五”（2021 年）基金項目」の研究プロジェクト「夏

目漱石漢詩における陶淵明詩歌の受容に関する研究」（研究代表者崔雪梅、基盤研究（A）21WX26）の成果の一部である。本稿の執筆にあたっては、研究プロジェクトのメンバーから精緻かつ建設的なコメントを多数頂いている。ここに記し感謝の意を表する。

注

1）レッシング・斎藤栄治訳『ラオコオン』岩波書店、2013 年 9 月、51 頁。

2）同前、38 頁。

3）以下本稿における作品の引用は次のものによる。『漱石全集』3 巻、岩波書店、1994 年 2 月、78-79 頁。『漱石全集』18 巻、岩波書店、1995 年 10 月、194-201 頁。

4）東郷克美は「この存在論的な重みから解脱した心身の無重力状態こそ、『非人情』の旅で希求されている『詩境』の中核にあるものであろう」（「『草枕』水・眠り・死」『別冊國文學・夏目漱石事典』竹盛天雄編、1982 年 5 月、118 頁）と述べているように、「非人情」はある美学的構造の下に構成された旅であり、画材であり、ある表情でもある。そして、『草枕』のドラマはある種の情緒を表現しうることを通して、画工の人生を補完するようなものとして読み取れるのである。また、熊坂敦子は「画工の『非人情』は那美さんを無縁として拒絶する世界ではなく、幽かに通い合う一筋の光明となって、それぞれの足許を示すことになる」（「幻境への模索－『草枕』論」『國文學』、學燈社、1976 年 11 月、68 頁）と述べたように、「非人情」は那美ばかりではなく、茶店の婆さんなどの登場人物らともかかわっている。

5）増田正造『能と近代文学』平凡社、1990 年 12 月、236-238 頁。

6）熊坂敦子「幻境への模索―『草枕』論」『国文学』11 号、1976 年 11 月、69 頁。

7）前田愛「世紀末と桃源郷　『草枕』をめぐって」『理想』3 月号、1985 年 3 月、213 頁。

8）宇佐美文理『中国絵画入門』岩波新書、2014 年 6 月、91-92 頁。

9）斎藤希史『漢文脈と近代日本』角川文庫、2014 年 5 月 25 日、235-236 頁。

参考文献

熊坂敦子（1976）、「幻境への模索--『草枕』論」『国文学』21 巻 14 号（11 号）、69 頁。

前田愛（1985）、「世紀末と桃源郷　『草枕』をめぐって」『理想』（3 月号）、213 頁。

増田正造（1990）、『能と近代文学』平凡社、236-238 頁。

夏目漱石（1994）、『漱石全集』岩波書店。

レッシング・斎藤栄治訳（2013）『ラオコオン』岩波書店、51 頁。

宇佐美文理（2014）、『中国絵画入門』岩波新書、91-92 頁。

崔雪梅（2021）「漱石の「俳句的小説」と漢文学」『東アジア日本学研究』6 号、125-140 頁。

斎藤希史（2014）『漢文脈と近代日本』角川文庫、235-236 頁。

Natsume Soseki's "Hininjyo" and Chinese Literature

CUI, Xuemei

Abstract

The language used in Natsume Soseki's novels appeals his readership from all time by his distinctive, strategic juxtaposing Chinese poetry and the parallelism between spoken and written language in a literary attempt to represent a westernized life style, fantasy worlds and hidden sides of the protagonist. This tentative juxtaposition of both Chinese and English poetic elements into fiction prose writing bespeaks an aesthetic intent unique to him own, which Natsume Soseki himself terms as a haiku-like, plotless construct. This very idea was first put into practice in one of his fictions *The Three Cornered World*. In this paper, I will discuss the correlation between Chinese poetry and the structure of "Haiku-style Novels", and examine the emotion of "Hininjyo" and the "expression" of "Hininjyo".

Keywords：Natsume Soseki; Hininjyo;Chinese poetry; The Three Cornered World；Chinese Literature

N・エリアスに基づく「日本－西欧」の比較研究に向けた予備的考察
—R・ガルシア『日本武道の歴史社会学』を手がかりとして—

村下 慣一（立命館大学大学院生）

要旨

本小稿は、ラウル・サンチェス・ガルシア（Raúl Sánchez García）の単著『日本武道の歴史社会学（原題: The Historical Sociology of Japanese Martial Arts)』を導きの糸として、N・エリアスに基づく「日本－西欧」の比較研究に向けた予備的考察を行うことを目的としている。特に、同著のサブ・セクション「社会－技術的装置としてのドイツの決闘クラブと日本の武術」（原題: German Duelling Fraternities and Japanese Martial Arts as Decivilising Socio-technical Devices）を検討の対象として取り上げ、その分析視角が持つ「近代日本」を捉えるうえでの有効性を確認した。

本稿から導きうる日本研究におけるN・エリアスの方法論の意義は、「近代日本」を比較文明論的視角に基づきながら、「社会発生」的見地から再考する機会を提供することにあるといえる。

キーワード：　エリアス学派、日本武道の歴史社会学、ガルシア、比較文明論

はじめに

ラウル・サンチェス・ガルシア（Raúl Sánchez García）は、今日のエリアス学派スポーツ研究者のなかで著名な研究者の一人であり、彼の近著である『日本武道の歴史社会学（原題: The Historical Sociology of Japanese Martial Arts)』は、エリアス学派の研究書としてのみならず、日本武道研究の領域においても大きなインパクトを与えたものであった。同著にて彼が主に試みたことは、エリアス学派の方法論を奈良時代から昭和時代までの日本武道史を事例に援用すること、そしてノルベルト・エリアス（Norbert Elias）の「文明化過程論」が西欧社会以外にどこまで応用可能かを問うことであった。

すでに同著に関するレビューとして、村下（2020）、Rozenfeld（2021）がある。

Rozenfeld（2021）は、すでに示されてきた歴史的な史実を、エリアスのフィギュレーション社会学の方法論に基づいて再構成し、日本武道史を「文明化の過程」の秩序、つまり国家形成と戦闘の力学に沿った動的なプロセスとして描き出したことを評価する（Rozenfeld,2021: 808)。また村下（2020）は、同著の意義について、個別の武道史を日

本社会の構造のもとで、すなわち「ドメスティックな政治的かつ社会的な構造との関係性から再構成しようとする」（村下,2020: 35）試みにある、と評価しており、このようなオルタナティヴな日本武道像を描き出しうる方法論として、「エリアス学派」の方法論は、国内外で注目を集めている。

またガルシアは、同著の目的が「全世界へと拡散された、非西洋の一連の身体文化が包摂された文明化の過程とスポータイゼーションについて、エリアス学派研究者の知識を試すこと」（García,2019: x=村下,2020: 35）にあるという。実際、同著では試金石としていくつかの比較を通して「日本－西洋（欧）」の文明化のパターンに言及されている。先述の村下（2020）は、合気道研究にとくに焦点化したレビューであり、これらの日本研究におけるガルシアの知見を取りこぼしていることが大きな課題である。

なぜなら、「西欧社会以外への応用可能性」というエリアス学派の方法論をめぐる課題への取り組みは、同著がエリアスの弟子筋を中心とするエリアス学派の研究者から構成されるノルベルト・エリアス財団（Norbert Elias Foundation）においてノルベルト・エリアス書籍賞 2020（The Norbert Elias Book Prize 2020）に選出されることになった受賞理由のひとつとなった（Norbert Elias Foundation,2020; web）。

本小稿では、ガルシアが同著の「エピローグ」にて提示した「社会－技術的装置としてのドイツの決闘クラブと日本の武術」（原題: German Duelling Fraternities and Japanese Martial Arts as Decivilising Socio-technical Devices）というサブ・セクションに示された事例を取り上げ、先行研究との相補性に着目し、N・エリアスの方法論に関する日本研究への援用の可能性を検討したい。

Ⅰ.「社会－技術的装置としてのドイツの決闘クラブと日本の武術」

ガルシアは「社会－技術的装置としてのドイツの決闘クラブと日本の武術」1）（García,2019: 227）において、独・日の文明化には大きな類似性があることを指摘する。それは戦士によって国家が統一された、という点である。両国では、19 世紀後半までに戦士階級が持ち合わせた軍国主義的なエートスが、その後の「われわれ＝アイデンティティ」の強化に大きな影響を与えることとなった、という。

ドイツの場合、中産階級の「脱文明化（著者補足: 文明化の過程における短期的な逆行（揺り戻し）を表す概念であり、類似概念として「野蛮化」がある）」は、1871 年以降の大学における決闘クラブへの参加を通じて、中産階級が「決闘を許された社会」に導入されたことと関連していた。ヒトラーは、このような中産階級へと拡散した戦士的気風を利用したことで、強力な指揮官の理想を具現化することに成功したばかりか、「アーリア人種」を国家的な「われわれ」のアイデンティティとして生成することで、ドイツ国民全体を「野蛮なものを民主化する（‘democratising’ the barbarization）」2）ことに成功したのである（上掲同頁）。

ガルシアによるこの分析は、エリアスの『ドイツ人論』に依拠している。「決闘を許された社会」とは、まさにエリアスが分析したドイツにおける「軍隊と決闘の掟を持つ学生団体（学友会）」（エリアス,2015: 57）を指している。なぜこの校友会（決闘クラブ）への参加が大きな意味を持つようになった理由は、これらの団体に共通の基準がドイツにおける「上流階級」の行動様式や将校教育の基準と密接に結びついており、「上流階級」に要求される行動様式の鋳型を教える「場」としての機能を持っていたことにある（上掲同頁）。この「場」を通してドイツの国家統合は急速に進んでいくのだが、そこには中産階級からのし上がろうとする人々も存在しており、「対照幅の縮小」という「文明化の過程」の規定的な力学のもとで、「上流階級」から「中産階級」へと行動様式が伝達したのである。それゆえ、ドイツにおける「決闘を許された社会」は、戦士的気風を拡散させる装置としても機能したのである。

これに対して日本の場合、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、いわゆる「大和魂」に代表されるように、武士の気風や美徳が、大衆へと拡散し始める。この原動力となったのは、大日本武徳会と学校システムであり、超国家主義体制へと移行するなかで、やがて「天皇」を支柱とし、「武徳」や「自己犠牲」を結びつけた武士道精神と結合した。全国民へ「武士道精神」への順応を推し進めたことで、戦士的気風を「われわれ」のアイデンティティとして生成することに成功し、超国家主義体制を実現したのである（García,2019: 227）。

ガルシアは、講道館柔道などの町道場は大日本武徳会と比較すると、この傾向は緩やかであったと評価している（上掲同頁）。とはいえ、かりにその傾向性が緩やかであろうと、軽視できるものではない、という点には留意が必要である。工藤龍太（2015）が明らかにしたように、二度にわたる「大本」の弾圧も、まさにこのような社会的事象と密接に関連しており、その影響は出口王仁三郎と合気道開祖植芝盛平の「弾圧」前後の言説から確認できる。種目ごとの差はあれ、当時の超国家主義体制へと向かう「脱文明化」のなかでは、たとえ町道場のような私的な武道団体であっても、「皇国」などの天皇制との関連を如実に伺わせる表現を自らの言説に組み込むようになっていく。このような社会的な国家統合の圧力が、日本武道の精神的特性に大きな影響を与えていたことは、明白である。

ガルシアは、このように両国の経験した「脱文明化」における支配構造の力学、つまり「ナショナリズム」と国民のアイデンティティの形成過程において、大きな類似性があることを簡潔に示し、西欧社会におけるひとつの文明化モデルであるドイツと東洋の日本の文明化モデルを対比させた。

両国の当該時代における軍国主義的な「われわれ＝アイデンティティ」は、国民を統合する強力な装置として機能することは自明の通りである。それまで上流階級として位置付けられてきた戦士階級が持ち合わせたエートスが、急速に拡散することで、国民が抱くドイツ人像・日本人像を象徴するシンボル、つまり、われわれを統合するシンボルとしてのヒトラーとアーリア人、天皇と武士（≒日本人）が、強固に意味を持つようになった。

エリアス学派のフレームでは、「スポーツ」や「武道」は、ルールに縛られた安全な活動の中で、楽しい緊張感のある興奮を与えてくれる場であり、感情の抑制と脱抑制の間の適切な「緊張のバランス」を備えている活動として捉えられてきた。このような「スポーツ」という文化が、とくに心因的な次元で機能する道徳的規範を伴う「社会－技術的」の発明として捉えられる。

この社会的な傾向性と、武道がどのように関係するかという点に関しては、まさに武道が、心因的な次元で機能する道徳的規範を伴う「社会－技術的」な装置として意味を持ったことに収斂される。日本では、後述の坂上康博（1986）が扱った校友会野球部のように、西洋的なスポーツでも「武士道野球」や「野球道」という言説に象徴されるよう、身体運動文化において武士的気風が道徳的な規範として重視されていた。その意味で校友会は、ドイツにおける「決闘クラブ」と同一の役割を担っていた、といえよう。

ガルシアは、このような分析視角を通して、当時の日本において武士階級以外への武術、武道の拡散は、なぜ起こったのか、またその現象は何を意味しているのか、という問題に対して、特殊「日本的」なケースとしてではなく、文明化の傾向性として、比較文明論的な見地から分析した。このような知見は、これまで「日本」の特殊性や固有性として説明され、それが自明視されていた事象を、学術的な課題として再検証する機会と余地を与えうる、と考えられる。

Ⅱ．ガルシア（2019）の意義：先行研究との相補性に着目して

村下（2020）は、合気道研究に焦点化するために、総論的に示されたガルシア（2019）をレビューし、合気道の分析視角として精緻化を試みた。村下（2020）がガルシア（2019）をレビューした意図は、合気道界内における「フィギュレーション」の概要を描き出すことにあるといえる。それゆえ、ガルシア（2019）の先駆性とインパクトを十分に描き出すことができなかった。

しかし、ガルシア（2019）自身の関心は、日本武道の各論的な歴史分析における応用可能性というより、むしろ日本武道史や日本史全体を包括する総論的な応用可能性を探究することにあった。本稿では、ガルシアの示した数あるうちの一つの事例に限定したレビューとなったが、村下（2020）が取りこぼした論点を扱ってきた。

上述の「近代日本」に関する事例に関連して、すでにいくつかの先行研究が存在している。最後に、特筆すべき先行研究である坂上（1986）との相補性について言及したい。

坂上（1986）は、1890-1905 年ごろの校友会野球部を事例に、「武士的野球」論の台頭が、「日清戦争の勝利」を契機に「ナショナリズム」の高揚のもとで現れる精神修練の効果と「武士的性格」を重視するようになるという、日本の社会的構造の変化のもとで現れる事象として描き出している（坂上: 430-431）。その目的は、「スポーツ活動における日本的変容」を決定づけるような通説を再検討し「スポーツの日本化と武道など日本の伝統文化の

近代化という二つの側面・過程を統合的に把握する」ことにある（上掲: 402-403)。坂上によれば、野球の精神的特性を武術や武士道に求めようとする「武士的野球」論が台頭する要因は、「日清戦争の勝利と三国干渉の打破を契機とする、排外主義的なナショナリズムの高揚」（上掲: 417-419）という。

坂上（1986）は、「伝統的な武士道精神の連続」として描かれてきた校友会野球部関係者の通説的な言説３）を批判的に検討し、それが「伝統の継承」ではなく、校友会野球部を取り巻く社会動態的な力学として現れていることを明らかにした。これは坂上（1986）の卓見である。やはり重要であるのは、この「武士的野球」論が主張され始める時期は、「野球部における士族の比重が相対的に低下」（上掲: 417）する時期にあたる、という点である。これは、まさにガルシアが「社会－技術的装置としてのドイツの決闘クラブと日本の武術」のなかで扱った、戦士的気風が「われわれ＝アイデンティティ」として強化されていくという過程を忠実に形容している、といっても過言ではない。

日本文化における「伝統」の継承と創造は、日本社会の経験する近代化・グローバル化のもとで、その影響に絶えず晒されながら発生する。武道を含む多くの日本文化論には、近代化のなかで継承される「伝統」が強調される反面、近代化のなかで現れる「順応」や「抵抗」の過程・力学は、十二分に検討されたとはいいがたい。

その点でこの課題に対する「エリアス学派」の態度は、注目に値する。スポーツのグローバル化過程における「バランスとブレンド」の問題を扱ったジョセフ・マグワイア（Maguire, 1999）や、マグワイアの分析視角を取り入れたガルシア（2019）らの方法論は、土着の文化を取り巻く変化の力学を重視し、それを解明することを目指している。

それゆえ、このようなエリアス学派の「社会発生的」見地から捉えようとする分析視角は、日本文化論などにおいて、とくに「伝統の連続」として語られるような通説的な見解を再検討する機会、また社会動態的な力学から再解明するための視座を与えうる、といえる。

おわりにかえて

ガルシアは、同著の「エピローグ」冒頭にて、次のように述べている。

> エリアスの「文明化」という概念の使用は、…（中略）…民族主義的な見解と対立するものとして用いたのであり、技法的、非目的論的、非決定論的、社会学的な概念として定義しようとした。当該概念に対するエリアスの技術的なアプローチは、西洋側と日本側の「文明化」という民族主義的な概念に注目することでは得られなかった比較分析のための実りある検証の場を提供しうるかもしれない（García, 2019: 219)。

ここでガルシアが言及している通り、エリアスの「文明化」概念は、社会進化論的な概

念ではない。つまりエリアスの分析視角は、「日本（東洋）－西欧」を「未開－文明」と見做すような、オリエンタリズム的な分析視角ではない。むしろ、「(特殊) 日本的」ないしは「東洋的」なものとして刻印されてきた「武術・武道」のような身体運動文化、宗教、社会（支配）構造といった様々な事象について、西欧社会との類似性と差異を描き出す手がかりとなりうる、といえる。

しばしば「日本」を含む「東アジア」の社会「発展」過程に西欧的な発展史観を直接適用させる試みが行われてきたが、そこには潜在的なオリエンタリズムが潜んでおり、行為者が自身の属性や、社会的なバイアスから十分に「距離化」した態度で「比較分析」に取り組みきれなかった事例も確認できる。

このような限界性を踏まえたうえで、グローバル化が進行する今日では、「日本－西欧」という国際関係を内含する「日本文化・社会」が分析対象となっている。それゆえ、N・エリアスの方法論を援用することは、「比較研究」において一考の余地がある、と考えている。

注

1) ここで使用されている「社会－技術的装置」という表現は、エリアスに準じた用法である、と考えられる。ガルシアが用いた「社会－技術的装置」は、エリアスにおける「社会連関」（人が人を支配することによる人間同士の連関）という含意の「社会」と、「自己制御」（自分が自分自身を制御する）という含意の「技術」を捉える分析視角を踏まえている、といえる。また、ガルシア自身は言及していないが、当該概念に関する分析視角として、エリアスとの親交の深かった社会学者であるミシェル・フーコー（Michel Foucault）の「自己のテクノロジー（Technologies of the Self)」という概念が、応用可能性に富んでいる、と推測される。とりわけ、心因的な次元として作用する「技術」という概念には、科学技術というニュアンス以上に、これらのニュアンスが含意されていることは、明白である。

2) ここで使用されている「民主化」という表現は、エリアスの「機能的民主化」という概念に基づく用法である。エリアスは、上流階級の行動様式が下層の社会階級へと拡散し、浸透する現象を「対照幅の縮小」として捉えており、「機能的民主化」という概念は、このような動態を含意している。

3) 坂上（1986）は、通説的な先行研究やそれを「補強」する論考として、日下裕弘（1985)「明治期における『武士』的、『武士道』的野球信条に関する文化社会学的研究」(『体育・スポーツ社会学研究（4)』収録）などを挙げている。

参考文献

工藤龍太(2015)、『近代武道・合気道の形成』早稲田大学出版部。

坂上康博（1986)、「日本近代におけるスポーツの受容と展開--明治期の校友会野球部を中心に」(伊藤高弘ほか『スポーツの自由と現代　下巻』、青木書店)、401-434 頁。

ノルベルト・エリアス（2015)、『ドイツ人論--文明化と暴力』（青木隆嘉、原著は 1989 年）法政大学出版局。

村下慣一(2020)、「エリアス学派による合気道研究の新規性と課題--サンチェス・ガルシア『日本武道の歴史社会学』の批判的考察」『現代スポーツ研究』4、30-43 頁。

Eugenia Rozenfeld(2021), The Historical Sociology of Japanese Martial Arts, by Raul Sanchez Garcia, The International Journal of the History of Sport 38(7), 808-810.

Joseph Maguire(1999), Global Sport: Identities, Societies, Civilizations, Oxford: Polity Press.

Raúl Sánchez García(2019), The Historical Sociology of Japanese Martial Arts, New York: Routledge.

Norbert Elias Foundation (2020) , The Norbert Elias Book Prize 2020, http://norbert-elias.com/the-norbert-elias-book-prize-2020/（閲覧日: 2021 年 9 月 27 日）.

Preliminary Considerations for a Comparative Study of "Japan–Western Europe" Based on N. Elias' Sociological Methodology: Taking the Cue from The Historical Sociology of Japanese Martial Arts by R. García

MURASHITA, Kanichi

Abstract

This paper aims to provide preliminary considerations for a comparative study of "Japan–Western Europe" based on Norbert Elias' sociological methodology. To achieve this purpose, I will use Raúl Sánchez García's *The Historical Sociology of Japanese Martial Arts* as a guiding thread. In particular, as an object of study, I will utilize the subsection "German Duelling Fraternities and Japanese Martial Arts as Decivilising Socio-technical Devices" of this book and examine the effectiveness of its analytical perspective in understanding "Modern Japan."

The significance of Elias' methodology in Japanese studies, which can be derived from this paper, is that it provides an opportunity to re-evaluate "Modern Japan" from the perspective of "sociogenesis," based on a comparative civilization theory.

Keywords: Elias School, The Historical Sociology of Japanese Martial Arts, García, comparative civilization theory

満洲に設立された鉄嶺日語学堂について

金 珽実（商丘師範学院・九州大学留学生センター訪問研究員）

要旨

日本はかつて鉄嶺を含む満洲と呼ばれた地域の支配に直接関与した。その関与に満鉄沿線付属地における教育があった。本稿では、満洲研究史料にはよく出てくるものの、実態の不明な「鉄嶺日語学堂」を取り上げて、主に鉄嶺県誌等と銀州文史史料の回顧録を使ってその実態を探った。日露戦争後、満洲に進出した日本は鉄嶺に於いて、通訳養成のために 1910 年 9 月に鉄嶺日語学堂を設立するが、その後、実業教育の一環として、鉄嶺商業学校に変え、日本の経済侵略に役立つ人材育成に乗り出した。この学校では、国旗掲揚式、東京方向の天皇に向かって礼拝、新京方向の皇帝に向かって礼拝、国民訓唱和、講師講話などを重視し、また日本語教育を中心に、精神的にも言語的にもあくまでも日本への忠誠心を培うことを優先とした。また太平洋戦争の最中、学生は勤労奉仕という名目で戦争協力に駆り出され、勤労奉仕に明け暮れていたことが本研究によって明らかになった。

キーワード：　満洲、日本、鉄嶺、日語学堂、教育

はじめに

鉄嶺は、中国遼寧省北東部にある渤海以来の古い町で、「鉄嶺粟」「金元大豆」「鉄嶺米」「鉄嶺綿布」を産する農業地帯であり、ロシアによる東清鉄道敷設以前は遼河による水運の拠点であった。日本の資料に於いて鉄嶺という地名が登場するのは日露戦争時からである。日露戦争時、満洲の広野に大風塵が起こった 9 日（1905 年 3 月、以下同様）、ロシアのクロパトキンが各軍に対して鉄嶺への退却を命令する。日本軍は後退するロシア軍を追う形で撫順、毛家屯北方に進出するが、追撃する余力は残されていなかった。10 日、日本軍は奉天を占領。翌日には第六師団に包囲されたロシア兵約一万が投降したが、敵主力の大部分は北方に逃すこととなってしまった。奉天を占領した日本軍はさらに北上を続け、13 日には興京を占領、16 日には鉄嶺を占領する。さらに、開原、昌図を占領し、22 日には秋山支隊[1)]が昌図城に、第三軍が法庫門城に入城した。しかし、奉天会戦で戦力を消耗した日本軍には、さらに決戦を行うだけの余力は残されていなかった。そのため、満洲軍は前進を止め、児玉（児玉源太郎）が帰国し本国での講和交渉を促すこととなる。奉天会戦

の戦場の一つとなった鉄嶺は、日露戦争後には日本領事館も設置され、日本人居留地が増加し、日本軍の駐屯も実施された地域でもあった。その後、日本はかつて鉄嶺を含む満洲と呼ばれた地域の支配に直接関与した。その関与に満鉄沿線付属地における教育があった。鉄嶺日語学堂もその中の一つの教育機関であり、満洲研究史料にはよく出てくるものの、その実態は不明のままである。本稿では、この鉄嶺日語学堂を取り上げてその実態を探る。

Ⅰ．鉄嶺

鉄嶺は、遼寧省北部、松遼平原の中央に位置し、南は瀋陽、撫順市、北は吉林省四平市、東は撫順市清原満族自治県、吉林省遼源市と接する。 西は瀋陽市法庫県、康平県、内モンゴル自治区科尓沁左翼后旗、通遼市である。現在の鉄嶺は、明朝に設置された鉄嶺衛を前身とし、清朝に於いて 1664 には鉄嶺県（満洲語：tiyeliyen）と改編され、奉天府の下に帰属することとされた。鉄嶺は軍事要衝で歴史上瀋陽の北門の鍵として歴代兵家の抗争の地であった。ロシア勢力の南下に備え、1877 年には、昌図庁が昌図府へと改編され、さらに 1907 年、奉天将軍が廃止され、奉天巡府が新設された。清末のころには、現在の市域にあたる鉄嶺県、開原県、昌図県、康平県、西豊県の 5 県は奉天省に帰属した。日露戦争後の 1906 年 6 月 1 日に奉天に於いて在奉天総領事館が設置された。1905 年 12 月 22 日に調印された「満洲に関する日清条約」により、遼陽・鉄嶺・長春・吉林・チチハル・満洲里など 14 都市を外国人に開放することが決定された。鉄嶺は、はじめ 1906 年 9 月 20 日に奉天総領事館の分館として設置されたが、1908 年 9 月 10 日に領事館に昇格した。その後、1916 年 10 月 4 日に海龍に分館を設け、同月 11 日に掏鹿に分館を設けた（後に両分館とも奉天総領事館に転属）。1933 年 6 月 1 日に遼陽領事館とともに閉鎖されるが、実際、奉天総領事館も 1937 年 12 月の「満洲国」における治外法権撤廃に伴い、1939 年 2 月 28 日に閉鎖されてしまう。また、鉄嶺領事館と共に、1906 年 10 月に奉天警務署鉄嶺警務支署が設置され、1908 年 5 月には鉄嶺警務署になり、その下に鉄嶺駅派出所、新台子駅派出所、平頂堡派出所、得勝台駅派出所、乱石山駅（乱石山駅は元々非営業駅で 1907 年 9 月 1 日に閉鎖されるが、1913 年 12 月 1 日に再び旅客営業が開始された）派出所を設け管轄した。因みに、1935 年の鉄嶺市総人口は 262,333 人で、その中で中国人が 218,872 人、日本人が 43,401 人（日本人 37,867 人、日本植民地治下の朝鮮人 5,595 人）、その他が 60 人であった[2)]。

Ⅱ．満鉄と教育

日露戦争の勝利によって、日本はロシアから遼東半島南端にある関東州の租借権と長春・大連間の東清鉄道南部線の利権などを譲り受けることになった。翌 1906 年 11 月、満洲における日本の経営開拓を担う中心的な機関として、半官半民の国策会社「南満洲鉄道株式会社」（以下「満鉄」）は大連に設立され、翌年 4 月 1 日より営業を開始した。その事

業は、大連・長春間の本線、旅順、営口、撫順の各支線、安奉線などの鉄道運輸はもちろん、鉱山開発、附属地経営など多岐に亘り、実に「満鉄王国」の名に相応しい規模と体系を具備していた。

満鉄は「逓信・大蔵・外務三大臣命令書」 第 5 条により、「鉄道及附帯事業ノ用地内ニオケル土木教育衛生等ニ関シ必要ナル施設ヲ為スヘシ」との命を受け、教育事業に着手した。1909 年満鉄は「付属地公学堂規則」を定め、「公学堂ハ支那人ノ子弟ニ日本語ヲ教へ、徳教ヲ施シ有用ナル良民ヲ養成スル」[3] と教育要旨を定めた。要旨の頭に「日本語ヲ教へ」を置き、日本語教育を重視した。1923 年に規則改正が行われ、条文から「日本語ヲ教へ」が外されるが、日本語は実際には教えられた。また、特別に実業教育・職業教育が重視された。地域によって鉱山学校、農業学校、鉄道学院、商業学校を設置した。その他、日語学堂、南満中学堂、南満医学堂、旅順工科大学、旅順医学専門学校等も設置された。満鉄が沿線付属地に多種多様な実業教育事業を展開した背景には、満洲を総合的に開発するために各分野で働く中堅技能者・専門家の養成が急務であったためである。1937 年付属地行政権が「満洲国」に移譲されたため、満鉄の教育事業も「満洲国」へ移管された。

「満洲国」建国後、「満洲国は王道を以て治国の大本とする…国を挙げて所を得ざる者なく、邑に徒食の民無く、全国民をして安居楽業ならしめるを以て王道の極地とする」[4]「新国家ノ教育ハ道徳教育ヲ根拠トシテ公民的知識ヲ授ケ親仁善隣ノ実ヲ挙ゲ人民生活ノ充実及国民生計ノ発展ヲ計リ以テ保境安民共存共栄ノ目的ヲ達スルニアリ」[5]であった。1937 年 10 月 10 日「満洲国」は新学制要綱を公布した。その中に「建国精神及訪日宣詔ノ趣旨ニ基キ、日満一徳一心不可分ノ関係及民族協和ノ精神ヲ体認セシメ東方道徳特ニ忠孝ノ大義ヲ明ニシテ旺盛ナル国民精神ヲ涵養シ徳性ヲ陶冶スル…」[6] と教育方針を述べた。1934 年満洲国皇帝に即位した溥儀の第一次訪日後、皇民化をめざす精神教育が新たに教育目標の第一に掲げられた。つまり、建国精神が王道から皇道へシフトしたとされる。1941 年 12 月 8 日の太平洋戦争勃発により、日本本土、植民地の教育は戦争協力体制に入り、軍事訓練などが実施された。1943 年 10 月「満洲国」は「我が国の教育は、惟神の道に則るをもって大本となすこと、祭政教の一徳たるに立つこと」[7] などを決定した。このことは、国の理念として、建国時の王道から皇道へ、そして皇道から神道へとますます神がかっていったことを示している[8]。

Ⅲ．鉄嶺日語学堂

1905 年日露戦争後、鉄嶺は商阜地になり、多くの日本人が定住しはじめ、1912 年鉄嶺の日本人の人口は 3,278 人であった。日本人は鉄嶺において多数の工場、商店、サービス業などを開いたため、多くの通訳が必要になった。そこで、日語学堂を開設し、中国人と朝鮮人学生を募集して日本語教育から開始するのが急務であった。

1908 年鉄嶺領事館領事村山正隆が任命されてから鉄嶺県徐麟瑞と日清語学校の設立を

相談した。協議の末、東洋日清語学校の設立を決め、設立場所を古城西門外の日本居留民が設立経営する鉄嶺小学校内にすることにした。1910 年 9 月 5 日、日清両国関係者参席の下、開校式が行われ、6 日に当時の日本領事森田寛蔵（副領事、1909 年 8 月 24 日任命、領事、1911 年 12 月 28 日任命）が日本外務省に報告を行った。当時は夜学校の形式で小学校の教室を借りて週六日間、一回三時間授業を行った。最初は中国人と日本人学生を 60 名で日本語と中国語を教えた。中国人の学生は主に巡査 20 名で当時の当局機関が特に配慮したものだと思われる。

学校の規定では、中国人が日本語を日本人が中国語を学ぶ目的で設置され、日本居留民と鉄嶺勧学所が共同経営し、年齢 12 歳以上、小学四年或は同等学力の男性を募集し、修業期間は六ヶ月、期間満了及び試験合格で修業証書を与えた。学校内に中国語と日本語教師を各一名ずつ、書記一名（会計と書籍物品を管理）を配置した。学費は一人当たり毎月 50 銭で、学校の経費は学生の学費から支出し、足りないところは県勧学所と日本居留会が共同分担した。このように、鉄嶺日語学堂は速成夜学校でありながらも鉄嶺歴史上、初めての外国語学校であった。

1904 年，日露戦争を契機として，日本は満洲の教育事業にかかわりを持ち始める。日露戦争後，関東州と南満洲鉄道株式会社の附属地、その他鉄道沿線の都市に居住する日本人子弟の教育を主としていたが、朝鮮人ならびに中国人の教化にも乗り出していく。まずは初等教育に最も力を注いだ。その流れの中で、南満洲鉄道株式会社も 1912 年 7 月鉄嶺に鉄嶺尋常高等小学校を設立することによって同年 9 月に日本人居留民経営の公立日本人小学校を廃止した。日語学堂も鉄嶺尋常小学校に置くことになる。

学生は地域内範囲に限らず、また中国人子弟のために日語日文を教えることによって将来独立経営した事業を運営できる能力を養成する旨であった。そのため、日本語だけでなく、日本人と交流できる商業知識も教える中国人向けの教育機関であった。高等小学校卒業及び同等の学力を持つ中国人学生で、本科、研究科、別科の三つを設け、本科の修業年限は二年であった。毎年三十名から九十名募集し、教師は殆ど日本人であった。学生は算術、漢文、質問応答の試験を受けて合格者を入学させた。学習内容は日本語、中文、算術、簿記、商事要項、体操、唱歌等で、学費は年 20 元であった。学堂内に寄宿舎と食堂を設置したが、食費は月 10 元くらいであった。本科卒業後商業学校など進学予定の学生に対しては推薦し、銀行などでの希望者に対しては研究科に進学させた。研究科の学習期間は不定であり、卒業後は満鉄、銀行などに配置し、優秀なものに対しては日本に派遣した。別科は夜学校で、一週間に三日間授業を行い、年齢は制限なく、日本人教師の下で『速成日本語読本』を習った。修業年限は二年であった。

1925 年、学堂の職員は 6 名で学生は 115 名（本科と別科生）であった。1929 年、職員は 4 名で、本科生 53 名、別科生 57 名であった。1931 年、職員は 4 名で、本科生 50 名、別科生 82 名であった。

鉄嶺日語学校になったのはいつからか不明であるものの、1932 年 6 月 5 日『満洲日報』の満洲人教育によると、協議事項に「満洲人教育と新国家教育との連絡方法如何(鉄嶺日語学校)」と「日語学校の改善法如何(鉄嶺日語学校)」が載せられている。

そして、1937 年に鉄嶺の附属地は、当該接続市街地と合して鉄嶺市となり、鉄嶺日語学校も引継がれて、鉄嶺市公立日語学堂になった。学堂長は日本人飯塚計作になり、1939 年から服部久雄が代理堂長であった。

その後は「奉天省鉄嶺商業学校」になり、修業年限は三年になった。各学年に一クラス設け、45 歳の鉄嶺人丁賛文と日本人服部久雄、中西七蔵、高橋教が教諭になっていた。日本語教育が主でまた商業知識教育にも重点を置き、卒業後は軍部、鉄道、銀行などに配置された。1942 年、商業学校の校長は秋田県の吉岡繁、副校長は丁賛文であった。

鉄嶺には他にも二つの日本語学校があった。

一つ目は「自強日語義塾」で、1933 年 10 月に日本人新井武八郎が校長になって、西門外で創立された。教師は 1 名、学生 20 名で、『日語読本』を教えた。その後、古城東関北大街に移され、教職員を 6 名に増やし、学生を 250 名募集、修業年限を六ヶ月、週 6 日、毎日 6 時間を教授し、一人当たり 2 元の学費が支払われた。

二つ目は「日語協合学院」で、校長は石之璋、教職員は 6 名で、学生は 280 名募集した。修業年限は二年で毎週 6 日、毎日 6 時間で、一人当たり月 2 元であった。科目は日語、修身、国文、歴史、地理、算術、唱歌、簿記などであった。

1945 年日本敗戦後、日本語の必要がなくなり、前述の学校も消滅した。

Ⅳ. 体験者の証言

筆者は、鉄嶺史料調査中、「鉄嶺日語学堂」体験者の回顧録を二つ見つけ出した[9)]。その一部から本論に関係のある箇所だけを抽出してみる。

1. 袁忠勤「満鉄日語学堂」

私は偽満南満洲鉄道株式会社鉄嶺日語学堂が鉄嶺市商業学校に改名されてからの第一期卒業生である。此の学校は日本の文化侵略であった。1938 年、治外法権撤廃と共に、日語学校は当時の経済情勢により商業学校となったが、実際は何も変わっていない。課目は商業技術を中心とする簿記、算盤などであるが、メインは日本語であった。教師も日本人が中心であったため、奴隷化教育が続いた。

教師は六人で、三学年の学生は 150 名、入学した時の堂長は小田島で、卒業時の校長は服部で、中国語教師は丁先生、担任は田中、課目担当は松本であった。

本校の学生出身は 1937 年の例を挙げると、市内から田舎まで、県内から県外へ、高級小学校卒から中等師範卒までに伸ばし、800 名の応募から 50 名しか入学できなかった。

当時の卒業生の就職状況は金洲農業学校に次ぎ、日本語の水準は南満中学堂の次ぎであ

った。就職状況については、1938 年までは堂長の紹介で全員各事業所などに配属され、1939 年からは偽満政権の委任官試験制度により各種試験を受験し、進学と就職ができていた。

2. 魏重新「私が偽満鉄嶺商業学校で勉強した時」

日語学堂は商業学校に変わってから学校も日本の経済侵略に助けになる人材育成に乗り出す。商業学校は商業課目を中心に文化課目も講義する。課目として商業、商業簿記、算盤、数学、日語、満語、国民道徳等課目が含まれる。卒業後は銀行、金融部門に配置される。

私は 1943 年にこの学校に入学した。この学校の規模は小さく、毎年一クラスのみで 50 名であった。教職員は 10 名程度で、その中に 2 名の日本人がおり、他は中国人であった。校長は 50 代の吉岡繁という日本人で、身分のある文官であった。厳格な顔付きで、日本人が持っている大和民族の尊厳と風格があった。もう一人は五十子という退役軍人で、典型的な日本人であった。体格は小柄であるが、強壮で、武士道の技量を持っており、学生をすぐ地面に倒し、軍事教練の時間によく強く叩いたりした。話によると、日本敗戦後奉天に逃げ、そこで殴られ死んだそうである。

商業学校は日本人の統治の下で下級が上級に服従する階級制度で、学生は教師に、下級生は上級生に服従しなければ、叩かれてしまう。商業学校の一日は早朝の厳しい掃除から始まる。清掃後は国旗を揚げ、東京方向の天皇に向かって礼拝した後、新京方向の皇帝に向かって礼拝し、その後は国民訓を唱和し、教師の講話後授業が開始された。

学校は専門科目と文化課目以外に労働実習科があり、毎年長い労働実習がある。場所は農場、工場、ある時は日本の軍事倉庫であった。1945 年 5 月、卒業生として奉天にある満洲電纜工場に学生勤労奉仕隊として出向いた。学生の中には、奉天五校、奉天七高、牡丹江女高（日本女子学生）がおり、各現場に配置され、現場の人とともに厳しい労働を強いられた。大東亜戦争の最中、工場内の日本人は戦争前線に徴兵され、退役兵も再度徴兵された。

奉天においてもアメリカ空軍も戦闘機で軍用工場を襲撃し、満洲北部のおいてもソ連軍が国境地域まで進出しており、緊迫情勢であった。その中、四か月予定されていた労働奉仕も 45 年 8 月の初め頃に引き上げ、鉄嶺に戻ったところで、日本が敗戦になった。日本の敗戦と共に、鉄嶺商業学校も解体されてしまった。

上の回顧録は様々な注目すべき実態を伝えている。

①日語学堂から実業学校である商業学校に変え、日本の経済侵略に役立つ人材育成を行った。

②商業学校の一日は、清掃、国旗掲揚式、東京方向の天皇に向かって礼拝、新京方向の皇帝に向かって礼拝、国民訓唱和、教師講話、授業開始の順になる。

③大東亜戦争時に勤労奉仕という名目で戦争協力に駆り出され、勤労奉仕に明け暮れた戦時下の状況が語られている。
④卒業生は 1938 年までは堂長の紹介で事業所などに配属され、1939 年からは検定試験を受けることになっていた。

おわりに

本稿では、主に鉄嶺県誌等と銀州文史史料の回顧録を使って満鉄が満洲鉄嶺に設置・経営していた鉄嶺日語学堂を取り上げた。日本が関与した鉄嶺日語学堂の主要な点は次のようにまとめられよう。

日露戦争後、満洲に進出した日本は鉄嶺において、通訳養成のために鉄嶺日語学堂を設立するが、その後実業教育の一環として、鉄嶺商業学校に変え、日本の経済侵略に役立つ人材育成に乗り出す。学校では、国旗掲揚式、東京方向の天皇に向かって礼拝、新京方向の皇帝に向かって礼拝、国民訓唱和、講師講話などを重視し、また日本語教育を中心に、精神的にも言語的にもあくまでも日本への忠誠心を培うことを優先とした。また太平洋戦争の最中、勤労奉仕という名目で戦争協力に駆り出され、学生は勤労奉仕に明け暮れていたことが本研究によって明らかになった。

本研究は、満洲教育史研究の一齣であり、未だに全体像が明らかになっていないものも含まれているが、これらの作業をいわば蓄積型、積み上げ方式と考えて、その一端を示すことにする。今後も「鉄嶺日語学堂」及び本稿で触れている「自強日語義塾」「日語協合学院」について新資料を発掘して研究を重ね、歴史的事実の究明に近づけたい。

注

1) 日露戦争時に編成された秋山好古陸軍少将を指揮官とする日本陸軍の支隊を指す。
2) 国務院総務総統計処『満洲国現住人口統計』1943、pp. 286-287。
3) 「満洲国」 教育史研究会編「解説　第一巻　教育行政・政策 I」『「満洲・満洲国」教育資料集成 I』エムテイ出版 1993、p. 7。
4) 嶋田道彌『満州教育史』青史社 1982、p. 739。
5) 満州国国務院総務庁情報処編『満洲建国五年小史』1997、p. 98。
6) 民生部教育司 1937 年 11 月『學校令及學校規程』満洲圖書株式會社 p. 1。
7) 野村章「旧『満洲国』の皇民化教育」『教育研究』22 号 1987、p. 15。
8) 宮脇弘幸「満洲の教育」『人文社会科学論叢』26 号 2017. 3、p. 14。
9) 次に述べる袁忠勤の「満鉄日語学堂」と魏重新の「私が偽満鉄嶺商業学校で勉強した時」を指し、政協鉄嶺市銀州区委員会文史資料委員会が 1990 年 10 月に編纂した『銀州文史資料』6 輯に収録されたものである。『銀州文史資料』6 輯は主に回顧録を載せたもので、内容は学校教育から戦争最前線の体験、教会、新聞などが含まれている。

参考文献

政協鉄嶺市銀州区委員会文史資料委員会編（1990.10）『銀州文史資料』政協鉄嶺市銀州区委員会文史資料委員会出版社。

鉄嶺県公署総務課編輯（1933）『鉄嶺県統計汇編』鉄嶺泰東印刷局。

鉄嶺県地方誌編纂委員会編（1993）『鉄嶺県誌』遼瀋書社。

民生部教育司（1937.11）『學校令及學校規程』満洲圖書株式會社。

「満洲国」 教育史研究会編（1993）『「満洲・満洲国」教育資料集成Ⅰ』エムテイ出版。

宮脇弘幸（2017.3）「満洲の教育」『人文社会科学論叢』26 号、13-18 頁。

金珽実（2021.3）「鉄嶺安全農村」『東アジア日本学研究』5 号、89-97 頁。

・『満州日日新聞』　1937.11.19

・『満洲日報』　1932.6.5

謝辞：本研究の史料調査に当たり、商丘師範学院の任慧瑾さん（鉄嶺出身）に協力してもらった。この場を借りて心より感謝する。

付記：本研究は JSPS 科研費 19K00711 による研究成果の一部である。

Tieling japanese language school established in Manchuria

JIN, Tingshi

Abstract

Japan was directly involved in the rule of the area once called Manchuria, including Tieling. There was an education in the full railway annexe to the involvement. In this paper, we took up "Tieling japanese language school" which often appears in the historical materials of Manchuria research, but the actual situation is explored mainly using the memoirs of Tieling records and Yinzhou literature and history materials. After the Russo-Japanese War, Japan entered Manchuria and established the Tieling japanese language school in September 1910 to train interpreters, but later changed it to Tieling Commercial School as part of its business education and embarked on human resource development that would help Japan's economic invasion. At this school, they attached importance to flag-raising ceremonies, worshipping the emperors of Tokyo and Xinjing, singing the national anthem and paying attention to lectures. It also focused on the Japanese language education and gave priority to cultivating loyalty to Japan mentally and linguistically. Moreover, this research clarified that during the Pacific War,students were forced to participate in

the war as the pretext for working service and devoted themselves to the labor service.

Keywords： Manchuria, Japan, Tieling., japanese language school, education

セルフメディアから見る日中の民間交流
—竹内亮監督の『走近大凉山（中国最貧困大涼山地区ドキュメンタリー）』を例として—

王 思瑶（武漢理工大学大学院生）

要旨

第 17 回（2021）日中共同世論調査の結果において、日中双方とも民間では相手国に対する好感度が低いことが分かった。このような局面を打開するには、日中の民間交流を一層促進する必要があり、中では、セルフメディアは有効な手段である。本稿はセルフメディアの成功事例として竹内監督の制作した『走近大凉山（中国最貧困大涼山地区ドキュメンタリー）』に注目し、その成功要因をテーマや視聴者の角度から分析を行った。「夢」、「教育」等国境を越える共通テーマは良いエントリーポイントのほか、外国人にとって知らない中国の美しいところを出発点とし、個人的な視点から国家の発展を映し出すという撮影モデルではより良い中国イメージを構築することができることを分析した。一方、竹内監督の作品の日本における影響力の向上やこのようなセルフメディアの育成方法などは今後の課題としたい。

キーワード：竹内亮、日中民間交流、セルフメディア

はじめに

2021 年に行われた第 17 回日中共同世論調査の結果では、日中双方とも相手国に対する好感度が低いことが分かった。日本に対する印象が「良くない」と回答した人の割合が、中国で 8 年ぶりに悪化に転じた一方、日本では「良くない」「どちらかといえば良くない」と回答した人は、去年と比べてほぼ横ばいの 90.9%となり、高止まりしている [1)]。このような局面を打開するには、日中の民間交流を一層促進する必要がある。日中民間交流の促進には従来、文学、アニメ、ドキュメンタリーなどが重要な役割を担ってきた。ところが、近年ではセルフメディアの影響力が大きくなりつつあり、無視できない力となっている。図 1 は 2005 年から 2021 年まで日本の言論 NPO と中国国際出版集団が実施した世論調査の結果を示している。日本に良い印象を持っている中国人は 2013 年に 5.2%まで下がったが、2014 年から持ち直し、2019 年には 45.9%まで上がっている。一方、中国に良い印象を持っている日本人は横這いか下がる傾向にある。よって、日中の民間交流の促進には、むし

ろ日本人の対中イメージをいかに向上させるかが重要であり、中でもセルフメディアの役割には期待できる。

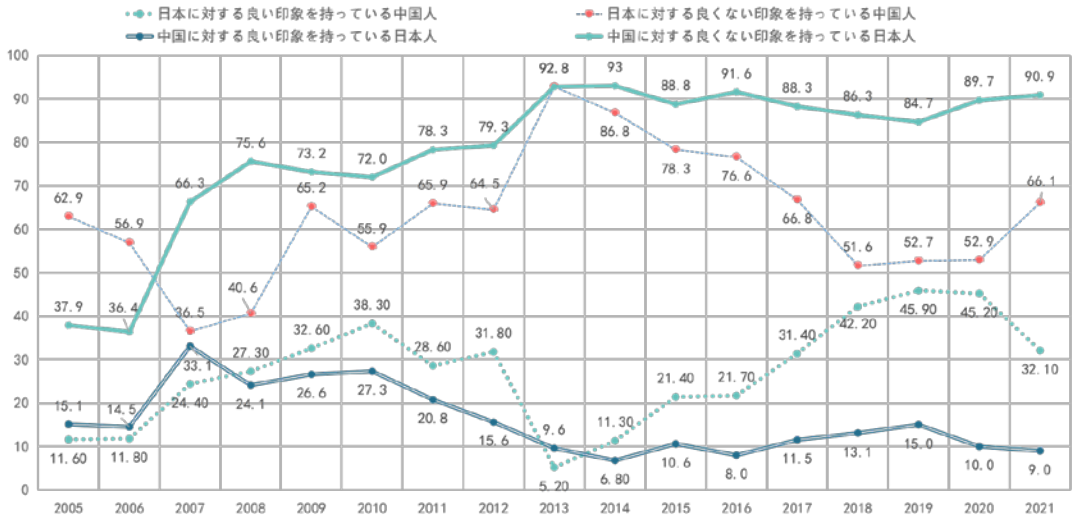

図１　相手国に対する印象の推移（2005－2021 年）

セルフメディアは、主に自分自身を表現・発信するメディアのことであり、個人メディアの一種類である。草の根メディアと同じく、自分自身のブランド向上のために、ブログやツイッター、YouTube などのソーシャルネットワークサービスを介した情報発信のことを指す。また、草の根メディアの主体は一般民衆であるのに対して、セルフメディアの主体は政治家、芸能人など有名人も含む。セルフメディアという概念はもともと 2003 年にアメリカの作家 Dan Gillmor により提出されたものである。その後、インターネットの普及と共に、セルフメディアの影響力は次第に大きくなり、国際交流や相互理解の増進にも大きくつながった。

筆者はセルフメディアの視点から日中民間交流に焦点を当て、在中日本人監督である竹内亮に注目した。竹内は、「作品を通して偏見をなくしたい」という初心を胸に、四川省涼山地区の少数民族を取材し、中国の貧困削減をリアルに紹介した。この作品は大きな反響を呼び、日本人の対中理解にも大きく寄与した。このように、本論では日中民間交流の成功事例として、竹内を代表とする在中日本人のセルフメディアが担う役割と成功要因を明らかにするとともに、その経験の活用方法について検討していきたい。

Ⅰ．先行研究

中国国内では、日中民間交流に関する研究は青少年交流、メディア間の交流などに注目した論文が多く見られる。例えば、付博（2009）は青年交流を日中関係が発展する潤滑剤に例えた。また、栄元（2015）は 1949 年から 1972 年までの朝日新聞の中国に関する活動を中心に研究し、日中国交正常化までのその役割について明らかにした。

ところが、セルフメディアの役割に注目した研究は少ない。さらに、竹内と『走近大凉山（中国最貧困大涼山地区ドキュメンタリー）』に限ると、先行研究は極めて少ないのが現状である。2021 年 9 月 7 日時点で、竹内亮をキーワードとして中国最大の学術文献オンラインサービスサイト CNKI で検索した結果、論文はわずか 11 本であった。『走近大凉山（中国最貧困大涼山地区ドキュメンタリー）』に関する論文は 1 本だけであった。

一方、日本では日中民間交流に関する研究はほとんどがメディア間交流、経済交流などに集中している。例えば、音好宏（2015）は『グローバル化する中での国際報道と公共放送の役割』で、民放メディア、セルフメディアの役割を共に重視する必要があるとも強調している [2)]。また、岩田賢は訪日経験が対日感情へ与える影響について学術的な考察を行い、日本人は中国の国内世論に如何に影響を与えるべきか提言するとともに、アフターコロナ時代にインバウンド観光を利用することは困難であるため、日中民間交流を促進する為にはセルフメディアがよい切り口になる [3)] と述べた。

上記のように、セルフメディアの日中民間交流に対する重要性は高いにもかかわらず、その先行研究は少ないのが現状である。本論では、竹内の『走近大凉山（中国最貧困大涼山地区ドキュメンタリー）』を事例に、セルフメディアの日中民間交流の促進に対する効果と経験の活用方法について分析していく。

Ⅱ．竹内亮の影響力について

本論では AFPBB News とヤフーニュースを基に竹内に関する日本での報道を集めたが、中国メディアの報道からの転載が多く、日本のメディアによるオリジナルニュースは少ないことが分かった。表 1 は筆者がヤフーニュースで竹内亮をキーワードとして検索した結果である。

表 1　ヤフーニュースで竹内亮に関するニュース

ニュースの題目	放送社	番組名	日時
福原愛さんVS竹内亮監督の中国語力対決、「東京五輪は 1 人で見ていた」と福原さん	CGTN Japanese	東京 2020・B 面日記	2021 年 8 月 11 日
中国で日本人「動画第一人者」東京五輪取材	NippoNews Network（NNN）	東京 2020・B 面日記	2021 年 7 月 21 日

また、『走近大凉山（中国最貧困大涼山地区ドキュメンタリー）』は YouTube に中国語－英語字幕版と日本語字幕版がある。本論はこの二つのバージョンを比較し、その上で視聴者に共通の価値観を基に分析するため、AFPBB News のニュースを収集した。その結果は表 2 の通りである。

表 2　AFPBB News で竹内亮に関するニュース

ニュースの題目	放送社	番組名	日時
「今年あなたが得たものは？」中国在住の日本人監督が再び武漢へ	Xinhua News	お久しぶりです、武漢	2021 年 1 月 1 日
「作品を通して偏見をなくしたい」 竹内亮監督にインタビュー	Xinhua News	私がここに住む理由	2021 年 5 月 26 日
竹内亮監督の「私がここに住む理由」書籍化、深圳でイベント	Xinhua News	私がここに住む理由	2021 年 5 月 12 日
ドキュメンタリー「中国アフターコロナの時代」の竹内亮監督インタビュー	Xinhua News	中国アフターコロナの時代－『逆転勝利の法則』	2021 年 1 月 11 日
動画：中国外交部 竹内亮監督の新作を高く評価	CGTN Japanese	中国アフターコロナの時代－『逆転勝利の法則』とは	2021 年 1 月 7 日
福原愛さん VS 竹内亮監督の中国語力対決、「東京五輪は 1 人で見ていた」と福原さん	CGTN Japanese	東京 2020・B 面日記	2021 年 8 月 11 日
日本人監督が中国の状況を記録したドキュメンタリーを称賛 中国外交部	Xinhua News	中国アフターコロナの時代－『逆転勝利の法則』とは	2021 年 1 月 8 日
竹内亮監督「中国の現代文化を海外に伝えたい」	CGTN Japanese	中国アフターコロナの時代－『逆転勝利の法則』とは	2021 年 1 月 23 日
竹内亮監督が武漢で交流会「武漢のことを伝え続けたい」	CGTN Japanese	お久しぶりです、武漢	2020 年 12 月 7 日
動画：北京中国で大活躍するドキュメンタリー監督・竹内亮独占インタビュー	CGTN Japanese	お久しぶりです、武漢	2020 年 9 月 1 日
北京国際映画祭の国際映画学術フォーラムに竹内亮監督が登場	CGTN Japanese		2020 年 8 月 31 日
中国在住の日本人監督、武漢密着ドキュメンタリーが話題に	Xinhua News	お久しぶりです、武漢	2020 年 7 月 1 日
南京市档案館、竹内亮監督のドキュメンタリー作品を収蔵	Xinhua News		2020 年 4 月 6 日
評判になった「ウイルス戦記」の背景、ある日本人が南京に残った理由とは？	CNS	南京におけるウイルスとの戦いの現場	2020 年 3 月 24 日
南京在住の日本人監督、現地の感染対策を映像で紹介 中日両国で話題に	Xinhua News	南京におけるウイルスとの戦いの現場	2020 年 3 月 10 日

以上の結果から見れば、竹内に関するAFPとヤフーニュースでの報道はほぼ中国メディア報道からの転載であり、日本メディア自身のニュースとしては少ないものの、これだけ転載を重ねるということは、日本国内での竹内に対する関心度がやや高いことが推測できる。

Ⅲ. 『走近大凉山（中国最貧困大凉山地区ドキュメンタリー）』について

2021年の現在でも、新型コロナウイルスは依然として人々の生活を脅かしている。竹内は「新型コロナ問題が起きたから、みんな都市ばかり注目していて、田舎の少数民族には、全く無関心になってしまった。やっぱ日本では、発展した中国の発展した部分しか見ていない。みんな田舎の方の暮らしを知らないので、やっぱ知ったほうがいいと思います」[4)]と述べた。竹内は貧困生活を送る涼山もリアルな中国の一部であり、独特な魅力を持つため、外国人に紹介すべきだと考えたのである。

1. テーマについて

俄木依吾は四川省大涼山地区彝族自治州昭覚県近くの哈甘郷の元村民である。彼の家庭を取材した際、竹内は真の貧困脱却には教育が一番重要だと再認識したと述べた。一部の彝族の人々にとっては新しい住宅や都会で働く機会があっても、都会の人とは知識量と情報量が全く違うため共通言語がないのも事実である。日本人にとって大涼山地区の貧困は理解しがたいかも知れないが、同じく教育の平等を求めている。ここでは教育を切り口として、貧困脱却における教育の重要性を強調し、視聴者の共感を呼び起こしている。

教育支援ボランティアにとって夢は大涼山地区の教育レベルを向上させることである。サッカーの監督にとっての夢は子供に明るい未来を与えることである。自分の手で「運命」を変えたい子供にとっての夢は世間に広く知れ渡るサッカー選手になることである。ドキュメンタリーは彼らの夢を伝えてくれた。ドキュメンタリーの主人公たちは全て未来に憧れ努力するタイプである。こうした努力の精神自体も国境を越えて視聴者を感動させる要素となる。夢、これはまさに国境を越える共通のテーマである。このテーマは貧困脱却以上に文化的偏見を超えられると考えられる。従って、このような共通テーマに注目し、日常的な話から夢というテーマを引き出し、相互理解につなげていくこと、この点は他のドキュメンタリーディレクターにとっても多いに参考になる点ではないかと考える。

2. 視聴者視点からの分析

YouTubeの『走近大涼山（中国最貧困大涼山地区ドキュメンタリー）』の中国語－英語字幕版（最初のバージョン）は、2021年4月28日から2021年9月9日までに291万8694回再生され、計13,322件のコメントがあった。その後、中国語－日本語の字幕付きバージョンも公開され、合計95万7,888回の視聴と2,891件のコメントが残された。時間軸を考

慮に入れつつ、筆者は賞賛の内容にあった上位 100 のコメントのキーワードを分類した。

（1）中国語－英語字幕版

上位 100 のコメントを「いいね」の数で並べ替え、高頻度のキーワードの出現回数を並べ替えると、結果は図 2 の通りである。

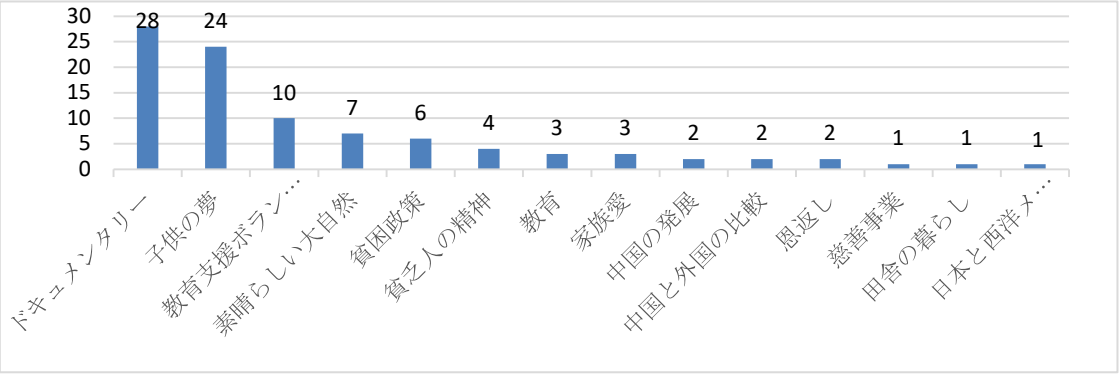

図 2　中国語－英語字幕版でコメントの高頻度キーワード

ドキュメンタリー自体と竹内への称賛を除くと、コメントは夢、ボランティア教師、中国の美しさ、貧困緩和、貧乏人の精神、教育などのテーマに焦点が当たっている。この図から、教育、中国の発展、中国と外国の比較という壮大なテーマよりも夢、教師の支援、自然の美しさなどの価値観を共有するテーマが国境を越えて理解されやすいことがわかる。そのため、ドキュメンタリーなどの文化作品を輸出する際には、これらの共通テーマをエントリーポイントとして利用することが考えられる。

（2）日本語字幕版

ドキュメンタリー自体は、監督の視点から中国語と日本語を組み合わせて使用しているため、中国語－英語の字幕版を直接見ている日本人もいたが、日本語の字幕版の高頻度のキーワードを整理してみると、少し違うことがわかった。結果は図 3 の通りである。

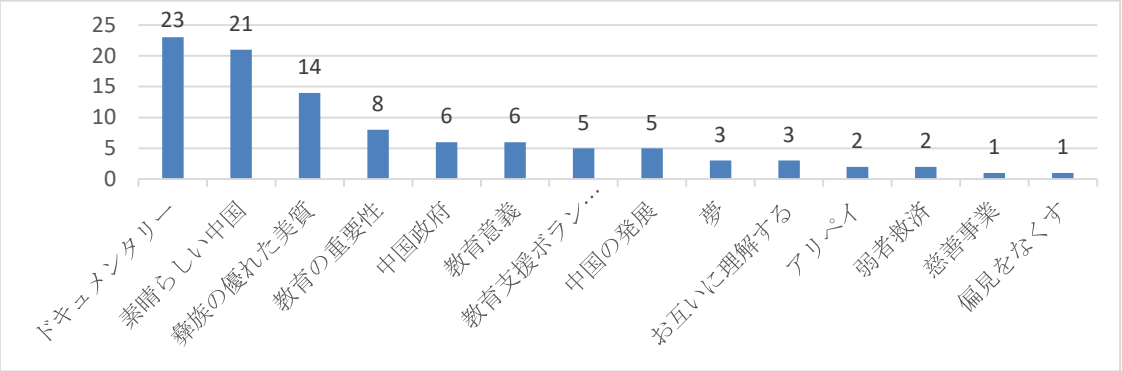

図 3　日本語字幕版でコメントの高頻度キーワード

日本語字幕版では、素晴らしい中国、彝族の優れた美質、そして教育の重要性などに注意を払っていることがわかる。その原因は、中国と日本の文化的類似性が比較的高いからだと考えられ、日本人の視聴者はドキュメンタリー映画製作者の本来の意図に近い感覚で見ていた可能性があると推測できる。いずれにしろ、日本の視聴者であれ、中国の視聴者であれ、ドキュメンタリーの焦点として素晴らしい中国というテーマを回避することはできない。したがって、将来のドキュメンタリーのテーマとコンテンツの選択において、中国の美しいところに着目し、中国文化への理解を促進していけば、現実的で親和性のある国家イメージを構築することができるのではないだろうか。

おわりに

2005 年から 2021 年までの日中共同世論調査の結果、中国に対して悪い印象を持っている日本人の割合がずっと高いことがわかった。本論では、日中民間交流を促進するため、日本人の対中印象を変えることの重要性を指摘し、そうした現状を変えるためには、セルフメディアを活用することが極めて重要であるとの結論に至った。本論ではセルフメディアの成功事例として竹内が日中民間交流を促進できたことを明らかにした。このようなセルフメディアは、現在では日中民間交流の現状を変える重要なツールとなっている。

本論では、『走近大涼山（中国最貧困大涼山地区ドキュメンタリー)』の成功要因について、まずドキュメンタリーのテーマから分析を行い、「夢」、「教育」など国境を越える共通テーマが良いエントリーポイントになると結論付けた。更に、視聴者の受容側から外国人にとって知らない中国の美しいところを出発点とし、個人的な視点から国家の発展を映し出すという撮影モデルにおいて、より良い中国イメージを構築することができる点を指摘した。一方、竹内の作品が日本での影響力を如何に高め、さらに彼のような日中民間交流に役立つセルフメディアを今後如何に成長させるかについての検討は今後の課題としたい。

注

1) 言論 NPO (2005-2021)、『日中共同世論調査結果』https://www.genron-npo.net/ 2021 年 11 月 28 日最終閲覧。
2) 音好宏(2015)、「グローバル化する中での国際報道と公共放送の役割」『学術の動向』20(12)、72-74 頁。
3) 岩田賢(2020)、「訪日経験が及ぼす対日感情への影響に関する一考察」『日本国際観光学会論文集』27、83-93 頁。
4) 『動画：北京中国で大活躍するドキュメンタリー監督・竹内亮独占インタビュー』https://www.afpbb.com/articles/-/3302092?cx_part=search　2021 年 9 月 7 日最終閲覧。

参考文献

音好宏（2015)「グローバル化する中での国際報道と公共放送の役割」『学術の動向』20(12)、72-74 頁。

岩田賢(2020)「訪日経験が及ぼす対日感情への影響に関する一考察」『日本国際観光学会論文集』27、83-93 頁。

付博（2009)「从中日青年交流看中日民間外交的重要意義」『吉林广播電視大学学報』5、61-62+119 頁。

栄元（2015)「戦後中日民間交流中媒体功能之再検討―以朝日新聞社的活動為中心（1949-1972）」『東北亜外語研究』3、25-33 頁。

Dan Gillmor(2010)『草根媒体』(陳建勲、原著は 2004 年発行）南京大学出版社。

Viewing the Non-governmental Exchanges between Japan and China from the self-media

WANG, Siyao

Abstract

The results of the 17th (2021) Japan-China joint public opinion survey show that the people of the two nations have a low degree of favorability towards each other's country. In order to overcome this situation, it is necessary to further expand non-governmental exchanges and communications between Japan and China. We- Media is an effective means to improve the situation. This article, taking "Approach to the Great Liangshan (China's Poorest Liangshan Documentary)" produced by Director Takeuchi as a successful example, analyzes the factors that contributed to the success of the documentary from the perspective of the theme selection and audience’s engagement. Except from the theme selection of "dreams", "education" and other global concerning issues, this documentary probes into the undetectable beauty of China, describing Chinese development from a personal perspective, which is conducive to construction of good image of China. On the other hand, this paper intends to inspire new thoughts, such as increasing the influence of Director Takeuchi in Japan and how to promote the creation of more We-Media like Director Takeuchi.

Keywords： Takeuchi Ryo, Japan-China non-governmental exchanges, self-media

学会役員

＜顧問＞

山泉進（明治大学・名誉教授）
李漢燮（高麗大学・名誉教授）

＜会長・理事＞

安達義弘（日韓言語文化交流センター・副代表）

＜副会長・理事＞

李東哲（韓国新羅大学校・教授）
権寧俊（新潟県立大学・教授）
崔光准（新羅大学・教授）
海村惟一（福岡国際大学・名誉教授）
杉村泰（名古屋大学・教授）
金龍哲（東京福祉大学・教授）
鄭亨奎（日本大学・特任教授）

＜常任理事＞

李東軍（蘇州大学・教授）
岩野卓司（明治大学・教授）
崔粛京（富士大学・教授）
李慶国（追手門学院大学・教授）

＜事務局長・理事＞

金珽実（商丘師範学院・副教授）（事務局長）

＜一般理事＞

阿莉塔（浙江大学・副教授）
安勇花（延辺大学、副教授）
白暁光（西安外国語大学・副教授）
宮脇弘幸（大連外国語大学・客員教授）
金光林（新潟産業大学・教授）
李光赫（大連理工大学・副教授）
娜荷芽（内蒙古大学・副教授）
任星（厦門大学・副教授）
施晖（蘇州大学・教授）
矢野謙一（熊本学園大学・教授）
王宗傑（浙江越秀外国語大学・教授）
徐瑛（浙江越秀外国語学院・副教授）
植田晃次（大阪大学・教授）
朴銀姫（魯東大学・教授）
加藤三保子（豊橋技術科学大学・特任教授）
中川良雄（京都外国語大学・教授）
堀江薫（新潟県立大学・名誉教授）
飯嶋美知子（北海道情報大学・准教授）
李昌玟（韓国外国語大学校・教授）

学会動向

◆「第三回東アジア日本学研究国際シンポジウム」開催

2021 年 9 月 18 日、中国・蘇州大学にて「第三回東アジア日本学研究国際シンポジウム」がオンラインで開催されました。合計 91 名が参加し、基調講演を含めて 55 編の学術論文が発表されました。

◆「韓国日語日文学会 2021 年冬季国際学術大会」の共催

2021 年 12 月 18 日、韓国外国語大学校サイバー大学で「韓国日語日文学会 2021 年冬季学術大会」が本学会との共同開催で開かれました。本学会からは名古屋大学の杉村泰教授の基調講演をはじめ、24 名が学術論文を発表しました。

◆「東アジア日本学研究学会」第三期会長選挙

2021 年 10 月から本学会第三期の会長選挙が行われ、東京福祉大学の金龍哲教授が会長と決まりました。金龍哲新任会長の任期は 2022 年 4 月 1 日から 2024 年 3 月 31 日までです。

◆学会誌第 8 号への投稿

2022 年 9 月発行予定の『東アジア日本学研究』第 8 号への投稿を募集中です。会員皆様の積極的な投稿を期待します。締め切りは 4 月 1 日（金）の北京時間 24：00 です。

東アジア日本学研究学会副会長

李東哲

会員消息

◆新入会員

王慈敏（桂林旅游学院、副教授）

連　青（北京外国語大学、院生）

徐金鳳（瀋陽航空航天大学、副教授）

雷嘉璐（北京外国語大学、院生）

范静遐（武漢理工大学、副教授）

金世朗（新潟県立大学、准教授）

◆会員所属・職位・転職等

李東哲　韓国・新羅大学教育専担→中国・山東外事職業大学教授

朴銀姫　魯東大学教授→延辺大学教授

※上記の情報は 2021 年 10 月 1 以降、2022 年 3 月 31 日までの変動事項です。

東アジア日本学研究学会副会長

李東哲

東アジア日本学研究学会会則

＜名称＞

第１条　本会は、東アジア日本学研究学会(The Society of Japanese Studies in East Asia)と称する。

＜目的＞

第２条　本会は、東アジア地域における日本学の学際的研究をとおして、また、それぞれの研究者が研究成果を発表し交換し合うことをとおして、学問の進歩及び当該地域の平和的発展に寄与することを目的とする。

＜事業＞

第３条　本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

１．東アジア地域における日本学を中心とした学際的研究・調査

２．学会、研究会、講演会及びシンポジウムの開催

（学会における共通言語は、原則として日本語とする）

３．機関誌及び図書等の刊行

４．内外の学術団体、研究者との連絡及び学術上の交流

５．その他本会の目的を達成するために必要と認められる事業

＜会員＞

第４条　本会の会員は、個人会員、賛助会員とする。

１．個人会員は、東アジア地域の研究に関心を持ち、かつ本会の目的に賛同する個人

２．賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会の事業に協力する法人・団体または個人

第５条　本会には、名誉会員および顧問をおくことができる。名誉会員および顧問は、理事会が推薦し、会員総会の承認を受ける。

＜入会・退会＞

第６条　本会に入会を希望する者は、理事会に申請し、その承認を得るものとする。

ただし、大学院生は、指導教員の推薦を得ることとする。

第７条　本会を退会しようとする者は､退会を事務局に通告すれば退会することができる。

会費を２年間滞納した者は、理事会において承認のうえ、退会とみなす。

＜会費＞

第８条　会員の会費は、次のように定める。

一般会員　　5,000　円
学　　生　　3,000　円
賛助会員　　50,000（１口）　円

＜役員＞
第 9 条　本会に次の役員をおく。
１．会長　　１名
２．副会長　　若干名
３．理事　　30 名以内（理事のうち若干名を常任理事とする）
４．事務局長　　1 名
５．会計監事　　2 名
６．その他理事会が必要と認めた役員
第 10 条　役員の任期は、就任から 2 年とする。ただし、再任は妨げない。

＜役員の職務＞
第 11 条　本会の役員の職務は次のとおりとする。
１．会長は、本会を代表し、会務を統括する。
２．副会長は、会長を補佐し、会長に不都合が生じた時はこれを代理する。
３．理事は、理事会を組織し、会務を審議執行する。理事会の議事は、出席者の過半数により決定する。
４．事務局長は、会長の指示に基づいて、事務を執り行う。
５．会計監事は、会計を監査する。

＜役員の選出＞
第 12 条　役員の選出は次のとおりとする。
１．会長は、会員総会において選出する。
２．副会長・理事は会長が任命する。
３．会計監事は、会員総会において選出する。
４．その他の役員は、理事会が委嘱する。

＜学会誌編集委員会＞
第 13 条　本会は、理事会のもとに学会誌編集委員会をおく。
１．学会誌編集委員会は、学会誌の出版計画を立案し、これを理事会に提案する。
２．委員は、個人会員の中から理事会が推薦し、会長が任命する。
３．委員の任期は、就任から 2 年とする。ただし、再任は妨げない。

４．学会誌編集委員会に委員長を置き、委員の中から互選する。
５．委員長は、学会誌編集委員会の事務を掌理する。

＜会員総会＞
第 14 条　本会は、毎年 1 回会員総会を開催する。
第 15 条　会員総会では、次の事項を審議決定する。
１．事業報告及び決算
２．事業計画及び予算
３．会長及び会計監事の選出
４．会則の変更
５．その他の必要な事項
第 16 条　臨時会員総会は、理事会が必要と認めたとき、または会員の 2 分の 1 以上の要望があるときに開催する。
第 17 条　会員総会の議決は、出席会員の過半数をもって決する。

＜会計＞
第 18 条　本会の運営は、会費及びその他の収入で賄う。
１．本会の会計年度は、毎年 4 月 1 日に始まり、3 月 31 日に終わる。
２．本会の決算は、会計監事の監査を受けなければならない。

＜雑則＞
第 19 条 本会の所在地は、〒818-0125 福岡県太宰府市五条 2 丁目 8-8-205 とする。

＜付則＞
１．本会の設立は、2018 年 9 月 1 日とする。
２．本会則は、2018 年 9 月 1 日から実施する。
３．本会の運営に必要な事項は理事会が定める。

『東アジア日本学研究』投稿要領

1)『東アジア日本学研究』は、東アジアにおける日本学研究に関する論文・研究ノート・書評などにより構成される。

2) 1年に2号（春季号・秋季号）の刊行を原則とする。

・春季号はシンポジウムの論文集とする。毎号シンポジウム終了後3週間以内を目安にその都度締め切りを設ける。

・秋季号はシンポジウムの発表以外の内容も含む学術論文集とする。投稿期間は毎号3月1日から4月1日までとする。

（例：2020年度年会費分の春季号は翌2021年春、秋季号は翌2021年秋に発行予定）

3)『東アジア日本学研究』に投稿できるのは、東アジア日本学研究学会の会員および編集委員会が依頼した者とする。ただし春季号にはシンポジウムで発表した非会員にも投稿資格を認める。その場合、会員の年会費相当額を投稿料として事務局に納入することとする（筆頭著者だけでなく共著者も同様とする）。

4) 投稿者が会員の場合、投稿する当該年度までの会費を投稿前に全て納入しなければならない（筆頭著者だけでなく共著者も同様とする）。

5) 投稿者が学生会員の場合は、投稿時に投稿原稿、投稿票とともに、指導教員等による承諾書（100字以内で様式は任意。指導教員等の署名または捺印が必須）を提出しなければならない。ただし、編集委員会が投稿を依頼した者については、これを適用しない

6) 投稿原稿は未発表のものでなければならない。投稿者は投稿原稿の不採用が決定される前に当該原稿を他の場所で公刊してはならない。

7) 本誌の春季号と秋季号は両方同時に投稿することができる。ただし、両者の内容は異なるものとすること。また、春季号も秋季号も一回の投稿期間に投稿できるのは一篇のみとする。

8)『東アジア日本学研究』に掲載された全ての原稿の著作権は東アジア日本学研究学会に帰属する。

9) 原著者が『東アジア日本学研究』に掲載された文章の全部または大部にわたって複製利用しようとする場合には、事前に編集委員長に申請しなければならない。編集委員会は特段の不都合がない限りはこれを受理し、複製利用を許可する。

10) 『東アジア日本学研究』に掲載された全ての原稿は、東アジア日本学研究学会のホームページにおいてPDFファイルにて公開する。

11) 投稿者は、東アジア日本学研究学会ホームページに掲載の「執筆要領」の内容を踏まえ、これに準拠した完成原稿と投稿票を提出する。投稿票は下記の所定の様式で提出すること。

12) 完成原稿と論文要旨は、E-mail の添付ファイルとして送付する。ファイル形式は原則

として MS-Word とする。採用が決定された原稿の提出方法は編集委員会から再度通知する。

13）投稿された原稿は、査読者による審査結果をもとに、編集委員会が採否を決定する。

14）採用された場合、投稿者は英文要旨を提出する。英文要旨は、提出前に必ずネイティブ・チェックを受ける。

15）原稿の投稿先および問い合わせ先は次のとおりとする。

東アジア日本学研究学会事務局　E-mail: eaja20172@163.com

（2021 年 4 月 20 日改正）

※投稿の際は以下の部分を切り取り、原稿に添えて送ってください。

投　稿　票

投稿日：20　年　月　日

氏名		
所属・職位	（例）〇〇大学・助手、講師、副教授、教授、大学院生	
メールアドレス		
電話番号		
論文タイトル		
種類（該当を残す）	春季号　/　秋季号	論文・研究ノート・書評
分野（該当を残す。複数回答可）	1.語学・言語教育　2.文学　3.文化　4.歴史 5.哲学・思想　6.経済　7.政治　8.その他	
連絡事項 事務局または編集委員会に連絡したいことがあれば書いてください。特になければ記載不要です。		

『東アジア日本学研究』執筆要領

1）利用言語

原稿は日本語を使用し、横書きで作成する。

2）原稿枚数

原稿の枚数は40 字×35 行を1 枚と換算して、春季号論文は5～7枚（注・図表・参考文献を含む）、秋季号論文は10～15枚（注・図表・参考文献を含む）とする。

3）見出し番号の表記

本文内の各節章の見出しにつける番号はⅠ、Ⅱ、Ⅲ…とし、その下の款項には1.、2.、3.…を用いる。さらにその下の項には（1）、（2）、（3）…を用いる。最初に「はじめに」、最後に「おわりに」を置いてもよい（番号は付けない）。

4）句読点の表記

句読点は全角の「、」「。」を用いる。

5）括弧の表記

括弧は原則として全角とする（欧語表記および注記を示す記号に用いる片括弧を除く）。

6）数字の表記

数字は、熟語など特別な場合を除き半角のアラビア数字を用いる。4 桁表記以上となる場合は、コンマ(,)を用いる。また、「兆、億、万」 などの漢数字を用いてもよい。

7）年号の表記

年号は原則として西暦を用いる。必要に応じて、西暦の後に元号などを丸括弧に入れて併用してもよい。

8）度量衡の単位は、原則として記号（m kg など）を用いる。

9）図や表には番号とタイトルを記入する。

10）注は以下のように該当部分の右肩に入れ、論文末にまとめて並べる。

～と考える[1)]。

11）参考文献の表記

本文と注記で用いた全ての文献を「参考文献」として本文の最後に一括して表示する。参考文献の表記は以下のとおりとする。

（日中韓語の書籍）編著者名（発行年）『書名--副題』出版社。（MS 明朝 9P）

（日中韓語の雑誌論文）著者名（発行年）「論文名--副題」『雑誌名』巻数(号数)、○-○頁。

（日中韓語の書籍中の論文）著者名（発行年）「論文名--副題」(編者名『書名--副題』出版社)、○-○頁。

（日中韓訳書）編著者名（発行年）『書名--副題』(訳者名、原著は○年発行）出版社。

（欧文の書籍）編著者名（発行年）書名：副題，発行地:出版社.

（欧文の雑誌論文）著者名（発行年）“論文名：副題,”雑誌名,巻数(号数)，pp.○-○.

（欧文の書籍中の論文）著者名（発行年）“論文名：副題,” 編者名 ed.，書名：副題，発行地:出版社，pp.○-○.

『東アジア日本学研究』査読要領

【査読スケジュール】

・投稿締切日

（春季号）シンポジウム終了後 3 週間以内とする。

（秋季号）毎号 4 月 1 日（北京時間 24：00）とする。

・投稿先：東アジア日本学研究学会事務局　E-mail: eaja2017@163.com

・査読の流れ

（春季号）査読は 2 回までとする。

（2 回目の総合評価が「再査読」の場合は結果的に「不採用」となる。）

投稿	→	受付	→	査読依頼	→	査　読	→	取りまとめ・結果通知	→		
修正		→		査読依頼	→	再査読	→	取りまとめ・結果通知	→	最終投稿	
執筆者		事務局		編集委員会		査読者		編集委員会		執筆者	

（秋季号）査読は 3 回までとする。

（3 回目の総合評価が「再査読」の場合は結果的に「不採用」となる。）

投稿	→	受付	→	査読依頼	→	査　読	→	取りまとめ・結果通知	→		
修正		→		査読依頼	→	再査読	→	取りまとめ・結果通知	→		
修正		→		査読依頼	→	再査読	→	取りまとめ・結果通知	→	最終投稿	
執筆者		事務局		編集委員会		査読者		編集委員会		執筆者	

【査読者の構成】

1)　論文 1 編について 2 名の査読者が査読する。

2)　査読者は編集委員会によって原則として会員の中から選任する。会員の中に適任者がいない場合は外部審査員を依頼することができる。審査料は全て無料とする。

3)　春季号の場合は、自己の投稿論文でなければ査読可能とする。秋季号の場合は、投稿者は当該号の査読は行わないこととする。

【査読】

4)　査読は投稿者・査読者間、査読者間ともに匿名で行うこととする。

5)　判定は、「採用」「条件採用」「再投稿」「不採用」の 4 段階とする。

・「採用」は誤植程度の修正しか必要でない場合とする。

・「条件採用」は査読者から指摘された問題が 1 週間程度で修正でき、当該号での採用が見込める場合とする。

・「再投稿」は査読者から指摘された問題が 2 週間程度で修正でき、当該号での採用が見込める場合とする。

・「不採用」は当該号での採用のレベルに達していない場合とする。

6)　査読者は所定の「査読票」に査読結果とコメントを記入する。

7)　論文の中に投稿者が特定される情報が書かれていることが査読の過程で明らかになった場合でも、原則として査読を継続する。但し、投稿者と査読者が指導教員と指導生の関係、同じ機関に属する等の場合には、査読者の交代を行う。

8)　査読にあたり二重投稿等の疑義等が生じた場合、投稿者宛てコメントには記載せず、編集委員会宛てコメントに記載する。

【査読結果のとりまとめ】

9)　査読者は「査読票」を編集委員長に送付する。

10)　編集委員会では、以下の総合判定ガイドラインに基づいて採否を決める。基本的にこれを順守するが、このガイドラインに従わない方がよいと判断される場合には、編集委員会で審議する。

＜総合判定ガイドライン＞

（◎採用、○条件採用、△再投稿、×不採用）

採用　　：◎◎（6 点）

条件採用：◎○（5 点）、○○、◎△（4 点）

再投稿　：◎×、○△（3 点）、○×、△△（2 点）、△×（1 点）

不採用　：××（0 点）

11)　総合判定の確定後、編集委員長は結果を事務局に送付する。

12)　事務局は、総合判定結果と査読者のコメントを投稿者に送付する。

【再投稿・最終投稿】

13)　「採用」の場合は、微修正の確認を編集委員会で行う。

14)　「条件採用」と「再投稿」の場合は、初回の 2 名の査読者で再度査読する。

15)　春季号の査読は 2 回まで、秋季号の査読は 3 回までとし、査読結果に基づいて編集委員会で最終判定を行う。

16)　編集委員会は最終判定結果を事務局に送付し、それを事務局から投稿者に送付する。

【その他】

17)　「不採用」に関する投稿者からの反論には原則として応じない。

18)　校正は字句等の修正のみ認める。問題が生じた場合には編集委員長が確認する。

編集後記

編集委員長　杉村泰（名古屋大学教授）

本号には 19 本の投稿がありました。各論文とも 2 名の査読者による審査が行われ、採用 11 本、不採用 3 本、辞退 2 本、不受理 3 本という結果となりました。投稿の際は制限頁数などの規程を守り、必ずネイティブチェックを受けてから投稿して下さい。

編集委員　加藤三保子（豊橋技術科学大学特任教授）

今号も多様なテーマの興味深い論文がたくさん採用されました。執筆者は苦労が報われ、達成感を感じていることと思います。査読者としても査読した論文が採用されると、執筆者とは一味違う喜びがあり、執筆者との不思議な繋がりを感じます。

編集委員　吉川佳英子（愛知工業大学教授）

今年も力作が多く寄せられ、論文を読む側としてはたいへん勉強になりました。切り口が新鮮であったり、独創的な提言があったりと、多彩な研究内容は驚くばかりでした。次年度も刺激的な論文を読ませていただけるのを楽しみにしています。

編集委員　金光林（**新潟産業大学教授**）

『東アジア日本学研究』には毎回たくさんの論文が投稿されるので、査読を通して論文の質を向上させるのは大事だと思いました。査読を通して投稿論文の問題点が改善されました。論文を書くのはたいへんな作業であり、皆さんのご努力を評価したいです。

学会誌担当副会長　海村惟一（福岡国際大学名誉教授）

コロナ感染の第六波（オミクロン変異株の猛威）の中、学会誌第七号が世に問うことができ、ひとえに著者、査読者、編集者の皆様のおかげです。感謝に堪えません。これからも会員の皆様の「論」のある「研究論文」を心から期待しております。

〔本号の査読者〕（50 音順）

安達義弘（日韓言語文化交流センター副代表）、海村惟一（福岡国際大学名誉教授）、飯嶋美知子（北海道情報大学・准教授）、加藤恵梨（大手前大学准教授）、加藤三保子（豊橋技術科学大学特任教授）、金光林（新潟産業大学教授）、池孝民（商丘師範学院講師）、陳秀茵（東洋大学講師）、中川良雄（京都外国語大学教授）、白暁光（西安外国語大学副教授）、橋本恵子（福岡工業大学短期大学部准教授）、吉川佳英子（愛知工業大学教授）、李先瑞（浙大寧波理工学院・教授、李東軍（蘇州大学教授）、李東哲（新羅大学教育専担）

東アジア日本学研究　第 7 号
Japanese Studies in East Asia　No.7

2022 年 3 月 20 日発行
東アジア日本学研究学会
The Society of Japanese Studies in East Asia

学会事務局　E-mail: eaja2017@163.com（一般）
eaja20172@163.com（学会誌専用）
住所：〒818-0125　福岡県太宰府市五条 2－8－8－205
日韓言語文化交流センター
ホームページ　https://www.east-asia.info/
ISSN 2434-513X